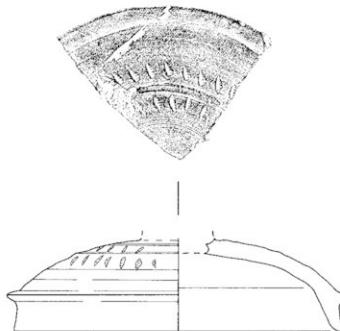


主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡

発掘調査報告書



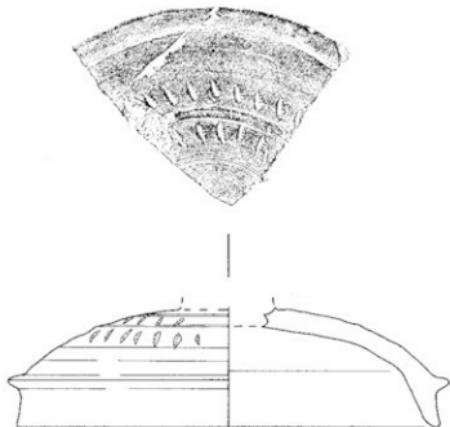
平成25（2013）年3月

四條畷市教育委員会

主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡

発掘調査報告書



平成25（2013）年3月

四條畷市教育委員会



1. NR2004-1



2. NR2004-1



1. NR2006-1



2. OM・NR2006-1



1. NN2006-1



2. NN2006-1



1. NN2006-1



2. NN2006-1

彩色土器



1. NR・NN2008-1



2. NR・NN2008-1

例　　言

1. 本書は、平成16（2004）年度から平成20（2008）年度にかけて実施した中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡での主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。本書より、市発行の発掘調査報告書シリーズ名を「四條畷市文化財調査報告」と変更する。これまで市で発行した発掘調査報告書は、1975年発行の『讚良川遺跡発掘調査概要』（四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報1）から、2012年発行の『奈良井遺跡発掘調査概要報告書』まで45冊存在するため（対応表は今後作成する）、本書のシリーズ番号は第46集とする。
2. 発掘調査は、大阪府枚方土木事務所からの依頼を受け、四條畷市教育委員会が実施した。調査期間等は本文中に記載している。
3. 発掘調査は、奈良井遺跡平成16年度調査地区（NR04-1）は四條畷市教育委員会社会教育課主任 野島 稔が、その他の調査地区は野島（平成18年度以降主幹）の指導のもと、技術職員（平成18年度以降主査）村上 始（肩書きはいずれも当時）が担当者として実施した。
4. 発掘調査の実施にあたっては、大阪府枚方土木事務所・地元自治会の御協力を得た。記して感謝の意を表したい。
5. 発掘調査の進行・本書の作成・出土遺物の鑑定などにあたっては、以下の方々から御指導・御協力を得た。厚く感謝の意を表したい。

大阪府教育委員会文化財保護課、櫻井敬夫氏、瀬川芳則氏（元関西外国语大学教授）、野島 稔氏（四條畷市立歴史民俗資料館館長）、佐野喜美氏（前四條畷市立歴史民俗資料館館長）。（順不同）
6. 本書作成用の出土遺物の整理（遺物の洗浄・注記・分類・接合・復元・彩色・収納等）・写真整理（写真の分類・注記・収納等）・図面作成（遺構図のトレース・版組、遺物の実測・トレース・版組）などは四條畷市教育委員会社会教育課主任 村上 始、事務職員 實盛良彦、臨時職員 酒井圭二・田伏美智代が行った。
7. 本書は、村上・實盛が、分担して執筆・編集を行った。文責者については、それぞれの文末に記載している。
8. 発掘調査で出土した遺物および記録した写真・実測図面等は四條畷市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 本書中のレベルは、T.P.（東京湾平均海面）を用いた。
2. 土色の色調は、1998年度版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
3. 須恵器の編年については、田辺昭三のもの（田辺1981）と中村浩のもの（中村2001）を併記した。中世土器の編年は、中世土器研究会のもの（中世土器研究会編1995）に依拠した。

本文目次

卷頭写真図版

例　言・凡　例

第1章　遺跡の位置と歴史的環境	7
第1節　遺跡の位置と既往の調査	
第2節　周辺の歴史的環境	
第2章　調査の経過	14
第1節　調査の経過	
第3章　奈良井遺跡（NR04-1）調査成果	16
第1節　基本層序	
第2節　遺構	
第3節　出土遺物	
第4章　奈良井遺跡（NR06-1）調査成果	27
第1節　基本層序	
第2節　遺構	
第3節　出土遺物	
第5章　岡山南遺跡・奈良井遺跡（OM・NR06-1）調査成果	33
第1節　基本層序	
第2節　遺構	
第3節　出土遺物	
第6章　中野遺跡（NN06-1）調査成果	40
第1節　基本層序	
第2節　遺構	
第3節　出土遺物	
第7章　岡山南遺跡・南山下遺跡（OM・MS07-1）調査成果	51
第1節　基本層序	
第2節　遺構	
第3節　出土遺物	
第8章　奈良井遺跡・中野遺跡（NR・NN08-1）調査成果	58
第1節　基本層序	
第2節　遺構	
第3節　出土遺物	
第9章　発掘調査のまとめ	72
第1節　各調査のまとめ	
第2節　古墳時代における奈良井遺跡周辺の様相	
参考文献	77
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	12
第2図	調査地区全体図	15
第3図	調査地区位置図 (NR04-1)	16
第4図	調査地区平面図 (復元)・断面図 (NR04-1)	17~18
第5図	出土遺物 (NR04-1) (1)	21
第6図	出土遺物 (NR04-1) (2)	23
第7図	出土遺物 (NR04-1) (3)	25
第8図	調査地区位置図 (NR06-1)	27
第9図	調査地区平面図・断面図 (NR06-1)	29~30
第10図	出土遺物 (NR06-1)	31
第11図	調査地区位置図 (OM・NR06-1)	33
第12図	調査地区平面図 (OM・NR06-1)	34
第13図	調査地区断面図 (OM・NR06-1)	35~36
第14図	出土遺物 (OM・NR06-1)	38
第15図	調査地区位置図 (NN06-1)	40
第16図	調査地区平面図・断面図 (NN06-1)	41~42
第17図	溝1遺物出土状況図 (NN06-1)	43
第18図	出土遺物 (NN06-1) (1)	45
第19図	出土遺物 (NN06-1) (2)	47
第20図	出土遺物 (NN06-1) (3)	49
第21図	調査地区位置図 (OM・MS07-1)	51
第22図	調査地区平面図 (OM・MS07-1)	52
第23図	調査地区断面図 (OM・MS07-1)	53~54
第24図	出土遺物 (OM・MS07-1)	56
第25図	調査地区位置図 (NR・NN08-1)	58
第26図	調査地区平面図 (NR・NN08-1)	61~62
第27図	調査地区断面図 (NR・NN08-1)	63~64
第28図	出土遺物 (NR・NN08-1) (北側地区)	67
第29図	出土遺物 (NR・NN08-1) (南側地区)	69

写 真 図 版 目 次

卷頭写真図版1	1. NR2004-1
	2. NR2004-1
卷頭写真図版2	1. NR2006-1
	2. OM・NR2006-1
卷頭写真図版3	1. NN2006-1

2. NN2006-1
- 卷頭写真図版4 1. NN2006-1
2. NN2006-1 彩色土器
- 卷頭写真図版5 1. NR・NN2008-1
2. NR・NN2008-1
- 写真図版1 NR2004-1 1. 調査前現況（北側から）
2. 調査状況（北側から）
- 写真図版2 1. 大溝調査状況（南側から）
2. 大溝全景（南側から）
- 写真図版3 1. 大溝全景（北側から）
2. 大溝近景（北東側から）
- 写真図版4 1. 大溝近景（南側から）
2. 大溝近景（北側から）
- 写真図版5 1. 西壁断面（南東側から）
2. 西壁断面（北東側から）
- 写真図版6 NR2006-1 1. 調査前現況（南側から）
2. 調査状況（南側から）
- 写真図版7 1. 調査状況（南側から）
2. 調査地区南側全景（西側から）
- 写真図版8 1. 調査地区中央部全景（北東側から）
2. 溝1全景（北東側から）
- 写真図版9 1. 大溝全景（北東側から）
2. 大溝（東側から）
- 写真図版10 1. 大溝遺物出土状況（北東側から）
2. 大溝西壁断面（北東側から）
- 写真図版11 OM・NR2006-1 1. 調査前現況（南西側から）
2. 調査状況（南西側から）
- 写真図版12 1. 調査状況（南東側から）
2. 調査地区全景（北側から）
- 写真図版13 1. 溝3近景（南東側から）
2. 土坑1全景（北東側から）
- 写真図版14 NN2006-1 1. 調査前現況（南西側から）
2. 調査前現況（北東側から）
- 写真図版15 1. 調査状況（南東側から）
2. 土坑1全景（南西側から）
- 写真図版16 1. 調査地区中央部全景（南西側から）
2. 溝1～4検出状況（北東側から）
- 写真図版17 1. 溝1～4検出状況（南西側から）
2. 調査状況（北東側から）

- 写真図版18 1. 溝1遺物検出作業（北東側から）
2. 溝1～4全景（南西側から）
- 写真図版19 1. 溝1遺物出土状況（南東側から）
2. 溝1西壁断面（南東側から）
- 写真図版20 1. 溝2遺物出土状況（北西側から）
2. 溝2西壁断面（南東側から）
- 写真図版21 OM・MS2007-1 1. 調査前現況（北東側から）
2. 調査状況（北側から）
- 写真図版22 1. 北側地区 遺構検出全景（南側から）
2. 北側地区 調査状況（北西側から）
- 写真図版23 1. 北側地区 全景（南西側から）
2. 南側地区 全景（北東側から）
- 写真図版24 NR・NN2008-1 1. 北側地区 調査前現況（北東側から）
2. 北側地区 調査状況（南東側から）
- 写真図版25 1. 北側地区 全景（南側から）
2. 北側地区 遺物出土状況（北側から）
- 写真図版26 1. 土坑5・6全景（東側から）
2. 南側地区 調査前現況（南西側から）
- 写真図版27 1. 南側地区 調査状況（南西側から）
2. 南側地区 全景（南西側から）
- 写真図版28 1. 南側地区 溝1遺物出土状況（北西側から）
2. 南側地区 大溝全景（西側から）
- 写真図版29 1. NR2004-1出土遺物
2. NR2004-1出土遺物
- 写真図版30 1. NR2004-1出土遺物
2. NR2004-1出土遺物
- 写真図版31 1. NR2006-1出土遺物
2. NR2006-1出土遺物
- 写真図版32 1. OM・NR2006-1出土遺物
2. NN2006-1出土遺物
- 写真図版33 1. NN2006-1出土遺物
2. NN2006-1出土遺物
- 写真図版34 1. NN2006-1出土遺物
2. NN2006-1出土遺物
- 写真図版35 1. NN2006-1出土遺物
2. OM・MS2007-1出土遺物
- 写真図版36 1. NR・NN2008-1出土遺物
2. NR・NN2008-1出土遺物
- 写真図版37 1. NR・NN2008-1出土遺物
2. NR・NN2008-1出土遺物

第1章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 遺跡の位置と既往の調査

四條畷市は、大阪府の北東部に位置する。市のほぼ中央部に、生駒山に続く飯盛山系がそびえ、市を東の田原盆地と西の平野部に分けている。飯盛山系から西に向かって、讚良川・岡部川・清瀧川・権現川が流れている。生駒山系の西側斜面の枚方台地は、北は京都府八幡丘陵から南は四條畷市南野丘陵までの淀川左岸にひろがる広大な丘陵・段丘があり、北から枚方市船橋川・穂谷川、交野市天野川、寝屋川市寝屋川、四條畷市讚良川・清瀧川などの中小河川によって開かれている。中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡は、いずれも飯盛山系の西側の山裾部に位置する遺跡である。

中野遺跡

中野遺跡は、四條畷市中野本町・中野新町・中野一～三丁目に広がる遺跡で、古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1977年に大阪瓦斯天然ガス管理工事に伴い発見され、中世の石組井戸などや、古墳時代中期の大溝が見つかった(野島1977、1986b)。この大溝からは朱塗りの壺や滑石製玉類、馬の下顎骨等が出土している(野島1986b、四條畷市教育委員会編2004)。またその後の二次調査では、隅丸方形の周溝状遺構を検出し、多量の漆が入った須恵器把手付碗や製塙土器等が出土している(野島1977、1978c、1986b)。

同年からは国道163号の拡幅工事に伴う調査が始まり、数次にわたって調査が行われた(野島1978a、西尾1987、1988、村上2000、2006)。1977～1978年の調査では、平安時代～室町時代の集落跡が確認され、室町時代の石組井戸から花崗岩の石臼が出土した(野島1978a)。この調査では硬玉製勾玉など古墳時代の遺物も出土している。1986年の調査でも中世の集落跡を確認したほか、古墳時代中期～後期の大溝から人物埴輪片や滑石製玉類、舟形木製品などが出土した(西尾1987)。1987～1988年の調査では古墳時代中期後半の井戸から板に乗せられた状態で馬頭骨が出土した(西尾1988)。井戸庵鉢時に犠牲とされたものと考えられている(四條畷市教育委員会編2004)。1994年の調査では、古墳時代後期前半の落込から滑石製子持勾玉などが出土した(村上2000)。1996年の調査では奈良時代末～平安時代ごろの方形横板枠井戸を検出し、井戸内から「日置」と墨書きされた土師器坏が出土した(村上2006)。

この間他の開発に伴う調査も多く行われており、1977年の旧国鉄片町線(現JR学研都市線)複線化工事に伴う調査では古墳時代後期の掘立柱群を検出している(野島1977)。1983・1985年の民間開発に伴う調査でも古墳時代の遺物が出土している(野島・前田1984、野島1986a)。1985年のマンション建設に伴う調査では、古墳時代中～後期の井戸を検出し、井戸内からは石製玉類や多量の製塙土器などが出土した(野島1986b)。1989年度の公共下水道工事に伴う調査では、奈良時代の青銅製鉄帶(丸韁)が出土した(野島1990)。1991～1992年の市役所東別館新築工事に伴う調査では、平安時代末～鎌倉時代初頭ごろの方形縦板枠井戸を検出し、その底部の井戸枠に使われていた曲物には「應保二年 如月廿日」の墨書きがあった(村上2003b、櫻井・佐野・野島2006)。また溝からは青銅製鉄帶(巡方)や長年大宝が出土した。1993年のガソリンスタンド建設に伴う調査では横穴式石室を検出している(村上2006)。石室は床面のみの残存であったが、玄室から羨道へ延びる石組排水溝を確認した。

この後も数次にわたり調査を行っており、2012年1～2月には四條畷郵便局の西隣で宅地開発に伴い発掘調査を行った。この調査では平安時代末～鎌倉時代初頭の集落跡を検出した。なかでも6×5.5m以上の大きさの土坑からは多くの土器や木製品が出土し、その中には木製の火起し道具や木簡が含まれていた。出土した木簡には文字が3字以上書かれていた。

奈良井遺跡

奈良井遺跡は、四條畷市中野三丁目を中心として広がる遺跡で、主に古墳時代中期から後期にかけての馬関係の祭祀跡を中心とした古墳時代・中世の遺跡である。最初にこの遺跡を確認したのは1976年で、現在のJR学研都市線の複線化工事に伴って発掘調査を行い古墳時代中期の集落跡等と共に石敷製塙炉を検出した(四條畷市教育委員会編1976、藤原1977等)。

1979年には市立市民総合センター建設に伴って発掘調査を行い(野島1980b、櫻井・佐野・野島2006、2010等)、古墳時代中期末の、長さ約16m、最大幅約2.5m、深さ約1mの溝を検出した。この

溝からは滑石製の白玉36点が須恵器大甕の内部より一括で出土した。この溝を中央としてそれを取り囲むように、一辺約40m、最大幅約5m、深さ約1~1.5mの、古墳時代後期初頭の方形周溝状遺構を検出した。遺構からは、土師器甕・須恵器高杯・甕・蓋環・滑石製有孔円盤・木製品・ミニチュア土器などのはか、7頭分の馬骨・馬歯が出土した。なかでも1頭は、ほぼ完全な形で検出された。一方で、馬の首のみが切られて土坑に埋められたものもあった。方形周溝状遺構と、中央の溝との合流地点からは馬形・人形の土製品18点が出土した。これらのことから、この方形周溝状遺構は、馬の祭祀を行うステージ状の施設であったと考えられている。この方形周溝状遺構の西約60mの場所では、古墳時代後期初頭の、一辺約1.2m、深さ約1mの方形板枠井戸を検出した。

1985年度の市立保健センター建設に伴う調査では、古墳時代後期の遺構面を検出し、牛の下顎臼歯等が出土した(野島ほか2005)。

1990年には、民間開発に伴い1979年調査地の北側約100mの箇所で調査を行い、古墳時代中期から後期の大溝や掘立柱建物等を検出した(野島1991)。

2000年には個人住宅の建設に伴い調査を行い、1979年検出の方形周溝状遺構の続きと考えられる溝の一部を検出し、須恵器蓋環が集中的に出土したほか、馬歯・製塙土器・韓式土器や韓式系土器・ミニチュア土器などが出土した(野島・村上2000)。

2011年にはガス関連施設の設置に伴い2000年調査地の南隣を調査し、半分しか検出できていなかった方形周溝状遺構の続きの溝を検出した(野島・村上・實盛2012)。この地点においては溝には少なくとも二つの段階差があることと、方形周溝状遺構上に柱が立っていたことが新たに分かった。主な出土遺物としては土師器・須恵器や韓式系土器のはか円筒形土製品や滑石製玉類・ガラス小玉・剣形木製品・馬歯などがあった。

この他2002年の調査では、古墳時代の遺構のほかに平安時代・鎌倉時代の遺構を検出し、特に鎌倉時代の石組み井戸からは底部から墨書のある曲物が出土した(村上2003a)。

南山下遺跡

南山下遺跡は、四條畷市岡山1丁目・岡山東1丁目・中野本町・大字中野に所在する縄文時代・古墳時代・中世の集落跡である。この遺跡は1976年に旧国鉄片町線(現JR学研都市線)複線化工事に伴い発見され、発掘調査により鎌倉時代の縄板枠井戸や、室町時代以降の瓦積み井戸を検出した(四條畷市教育委員会編1976)。また、古墳時代中期～後期の旧河川が見つかり、土師器・須恵器等の土器類や滑石製品等が多量に出土した。1978年にも片町線複線化工事に伴い発掘調査を行い、この旧河川の続きの河道が検出され、古墳時代の遺物が多数出土するとともに、縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土した(野島1978b)。また、この旧河川の北側で縄文時代中期の溝を検出し、縄文時代中期の「船元式」(間堀1971)にあたる土器や石器等が多く出土した(野島1978b、野島・村上2001)。

その後、この遺跡は忍ケ丘駅前土地区画整理事業に伴い数次の発掘調査が行われた。1984年の調査では中世の石組み井戸や古墳時代の溝を検出し、家形埴輪片のほか縄文時代中期の土器片・石錘・石鎌などが出土した(前田1984)。1986年の調査では、中世の井戸が3基検出されたほか、古墳時代中期の大溝を検出し、土師器・須恵器や円筒埴輪・朝顔形埴輪とともに完形に復元できる馬形埴輪が出土した(野島1987c, d)。また大溝周辺で土坑5基を検出し、朝顔形埴輪・円筒埴輪・蓋形埴輪などが出土した。この調査で出土した埴輪の中には×印などの記号や舟などの絵画が描かれているものが14点含まれていた(野島1987d)。

1988年には都市計画道路建設に伴い発掘調査を行い、縄文時代の落込を検出して、縄文時代中期の土器や石匙などが出土した(野島1988)。また古墳時代の旧河川・大溝・掘立柱建物などを検出し、大溝内から木製埴の子12点の一括出土を含む多量の遺物が出土した。

1989年から2001年にかけては、一級河川岡部川改修工事に伴い6次にわたり発掘調査を行った(野島・村上2001)。このうち1990年の調査では中世の溝を検出した。1992～1993年の調査では中世以降の井戸2基や、それ以前の河川跡などを検出した。

1993年の田代マンション建設に伴う調査では、古墳時代と中世から近世にかけての集落跡を確認した(野島・村上2001)。河川状の遺構面からは古墳時代の円筒埴輪・土師器・須恵器、中世の瓦器碗・土師質皿・須恵質摺鉢・青磁などとともに中世の馬歯12本が出土した。

1995年のレジオン四條畷マンション建設に伴う調査では、古墳時代の溝と鎌倉時代の溝・掘立柱建物跡・土坑等を検出した(野島・村上2001)。

2001年の共同住宅建設に伴う調査では、平安時代後期～中世の集落跡を検出し、中国製青磁や黒色土器、土師質土器、瓦質土器、瓦等が出土した(村上2001b)。

これら南山下遺跡の既往の調査については、2001年発行の発掘調査報告書(野島・村上2001)にもやや詳しくまとめられている。

岡山南遺跡

岡山南遺跡は、四條畷市大字岡山・岡山東1丁目を中心に広がる、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代・中世の集落跡である。この遺跡は1975年の府道枚方富田林泉佐野線新設バイパス建設工事中に発見された遺跡で、その後1976年10月にかけて同工事に伴い3次にわたりて発掘調査を行った(野島・藤原・花田1976)。1次調査は確認調査で、古墳時代～中世にわたる遺跡を確認した。2次調査では古墳時代の掘立柱建物や竪穴建物を検出し、竪穴建物を中心多くの遺物が出土した。3次調査では古代～中世の掘立柱建物を複数検出した。これらの掘立柱建物の柱穴からは皇朝十二銭の乾元大宝が出土した。この遺構面の下層からは古墳時代の大溝2本(大溝A・B)、井戸1基等を検出した。この大溝のうち大溝Bからは、土器類とともに家形埴輪や蓋形埴輪、動物形埴輪などの形象埴輪や朝顔形埴輪、円筒埴輪などが多数出土した。また、これらの遺物とともに縄文土器や石器・磨製石斧、後期旧石器時代後半の木葉形槍先形尖頭器も出土した。

1976年11月には4次調査として大阪瓦斯天然ガス管理設工事に伴い発掘調査を行い、3次調査の大溝Bが逆S字状に蛇行する溝であることが分かった(野島1979、1982)。この溝は埴輪を出土しながら古墳の周溝ではないことがわかり、集落内を区画する溝の可能性が考えられている(野島1982)。また大溝B内からは、円筒埴輪や土器類とともに木製下駄が出土した(野島1979)。この下駄は左足用のもので、伴出遺物から古墳時代中期のものであり、他例と比較しても極めて古い出土例である(野島1979、瀬川1992、本村2006)。

1981年2～4月には5次調査として四條畷市開発公社の委託で調査を実施し、古代～中世の集落跡と古墳時代中期の集落跡を検出した(野島1982)。古代～中世の遺構面では中世の掘立柱建物や平安時代の板枠井戸などを検出し、井戸内からは「田内急」と墨書きされた黒色土器などが出土した。古墳時代中期の遺構面では数多くの円筒埴輪や形象埴輪が出土し、掘立柱建物を検出した(野島1982)。掘立柱建物周辺からは馬齒が出土した(野島・前田1984)。この調査個所は大溝Bに西接する場所に当たり、この点からも大溝Bは集落内を区画する溝とみられる(野島1987b)。

1981年7月からは6次調査として宅地開発に伴い発掘調査を行い、3次調査の2本の大溝の続きと、掘立柱建物を検出した(野島1982)。このうち大溝Aでは、最下層から縄文時代晩期の土器や石器類が出土した。

1983年には忍ヶ丘ハイツ建設に伴い7次調査を行い、古墳時代後期の溝、鎌倉時代末の掘立柱建物、室町時代の落込を検出した(野島・前田1984)。古墳時代後期の溝からは土器類や埴輪類、鉄鉗、勾玉のほか円孔が穿たれ垂下可能な砥石が出土した。

1986年には民間社宅建設に伴い8次調査を行い、古墳時代中期の掘立柱建物、平安時代の掘立柱建物、方形板枠井戸、中世の掘立柱建物、溝などを検出した(野島1987b)。特に平安時代の井戸からは「高田宅」「福万宅」の墨書きがある黒色土器3点などが出土した。

2003年の駐車場造成に伴う調査では中世の井戸等を検出した(村上2004)。

第2節 周辺の歴史的環境

周辺の遺跡では、旧石器時代からの各時代の遺構・遺物が見つかっている(第1図)。

旧石器時代

周辺の旧石器時代の遺跡として、更良岡山遺跡の範疇である讃良川床遺跡があげられ、ハンドアッシュ・ナイフ形石器・細石刃・削器・彫器などが出土している(櫻井1972)。また、忍岡古墳付近では、縦長剥片を用いたナイフ形石器が採集されている(片山1967a)。岡山南遺跡では、後期旧石器時代後半の木葉形槍先形尖頭器が出土している(野島・藤原・花田1976)。

縄文時代

縄文時代草創期の有茎尖頭器が、南山下遺跡(野島1978b)、木間池北方遺跡(村上1997)などで見つかっている。縄文時代中期の遺跡としては南山下遺跡などがあげられる(野島1978b、1988)。

縄文時代後期・晩期の遺跡として更良岡山遺跡があげられる。ここでは北陸地方から搬入された大形彫刻石棒・ヒスイ製「石斧」をはじめ土偶・土製勾玉などの祭祀具、高环形土器・深鉢・注口土器などの土器類と多量の石器類が出土した(片山1967b、櫻井1972、野島編2000)。

弥生時代

弥生時代前期初頭の土器が、2005年の大阪府文化財センターによる調査で縄文時代晩期の突帯文土器とともに讃良郡条里遺跡で見つかっている(中尾・山根編2009)。ここでは炭化米も出土しており、北河内地域における稻作の初現を示している。

雁屋遺跡は弥生時代の前期から後期にわたって続く集落である。1983年の調査では弥生時代前期の北部九州系大形壺(板付Ⅱ式)が出土した(野島1984a)。その壺に伴い石庖丁が2点出土した。なお、この調査区の50m東で縄文時代晩期末の深鉢が出土している。

雁屋遺跡は中期になると拠点的集落として機能した。1985～1986年の調査で4基の方形周溝墓を検出し、第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓内から子供用のものを含めて合計20基の組合せ式本棺を検出した(野島1987a)。棺材の樹種鑑定によりコウヤマキ・ヒノキ・カヤ材が使用されていたことが判明した。特にコウヤマキ製の木棺は遺存状態が良好なものが多くみられた。また第1号方形周溝墓2号主体部では、コウヤマキの底板上で被葬者の腹部から腰部にあたるところからサヌカイト製の打製石鎌が12点出土した。第1号方形周溝墓と第2号方形周溝墓の共有する周溝内から出土した壺3点・把手付鉢・水差形土器の5点には水銀朱が塗られていた。また同じ周溝からはヤマグワ材の蓋付木製四脚容器が出土した。蓋の上面には双頭鷲文が浮き彫りされていて、この蓋にも水銀朱が塗られていた。

1993～1994年の調査では方形周溝墓の構からノグルミ製の鳥形木製品が出土した(野島1994a)。またその鳥形木製品のそばから、長さ約1.4mで断面U字状の隅丸長方形をしたモミ材の板状木製品が出土した。火災を受けた中期の堅穴住居からは分銅形土製品や焯跡から卜骨と考える肩甲骨が出土している。また土坑からは木製盤・杓子など未成品のものが多く出土しており、未成品の貯蔵施設と考えられる。石製品としては特筆すべきものとして、銅鐸の舌が2本出土している。そのうちの1本は徳島県吉野川産の塙基性凝灰岩質点紋片岩製であった。

銅鐸については、明治44年に、四條畷の「砂山」から入れ子になった銅鐸2口が出土したと伝えられる砂山銅鐸2口があり(梅原1985)、現在関西大学の所蔵となっている。

2010年の調査では、掘立柱建物を構成すると考えられる柱が2基出土したほか、木製品の貯蔵施設と、それを囲むように不整形に区画する杭列を検出した(村上・實盛2011)。遺物としては播磨地域の特徴を示す土器が出土しており、中期から他地域との交流があったことを示している。

大阪府教育委員会の雁屋遺跡発掘調査では(辻本1987、阿部1999等)、中期の方形周溝墓や後期の堅穴住居などが多数検出されている。特筆すべき遺物としては、中期の鳥形木製品や後期のシャーマンを線刻した土器などがあげられる。

後期の雁屋遺跡は日本海側と活発な交流を持つ集落となった。1985～1986年の調査では後期の旧河川・周溝墓・堅穴住居・土壙を検出した(野島1987a)。弥生時代後期の周溝墓は大きく削平を受けており、主体部は痕跡を残すのみであったが、周溝内からは在地の土器とともに丹後系の台付鉢や甕、近江系の鉢、出雲・山陰系の低脚杯や土玉が出土したほか、堅穴住居からは丹後系の把手付鉢が出土

した(三好ほか2007)。これらのことから、弥生時代後期の雁屋遺跡は日本海側地域との交流があったものと考えられる。鉄片と鉄滓も出土しており、鉄の豊富な日本海側地域と交流を持つことで鉄を手に入れていたと考えられる。以上のように、雁屋遺跡は中期から後期まで撫点的集落として存在した遺跡である。

雁屋遺跡にとどまらず弥生時代遺跡は検出されており、鎌田遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が5基見つかっている(野島1994b)。1号方形周溝墓には墳丘のほぼ中心に埋葬施設が1基あり、コウヤマキの組合式木棺材が残存していた。2号方形周溝墓の周溝からは完形の打製石剣が出土した。また城遺跡では翡翠製獸形勾玉が出土している(村上2006)。

古墳時代

四條暖でもっとも古い古墳は、古墳時代前期中葉に築造された全長約87mの前方後円墳である忍岡古墳である。昭和9年の室戸台風で忍陵神社が倒壊し、その建て直しの際に竪穴式石室が発見され、京都大学によって調査された(梅原1937)。すでに盜掘されていたが、碧玉製の車輪石・鍬形石・紡錘車、鉄剣、鉄鎌、小札片などが出土した。また四條暖市教育委員会で1973年に竪穴式石槨の現状の実測図を作成した(宇治田・桑原1974)。

中期になると、幕ノ堂古墳をはじめ、馬銅集団が墓域としたと考えられる清滝古墳群や大上古墳群、更良岡山古墳群などで次々と古墳が築造された。幕ノ堂古墳は、全長約62mの前方後円墳である(櫻井・佐野・野島2006、2010)。清滝古墳群2号墳は、直径20mの円墳で、周溝に馬が埋葬されていた(野島1980a)。

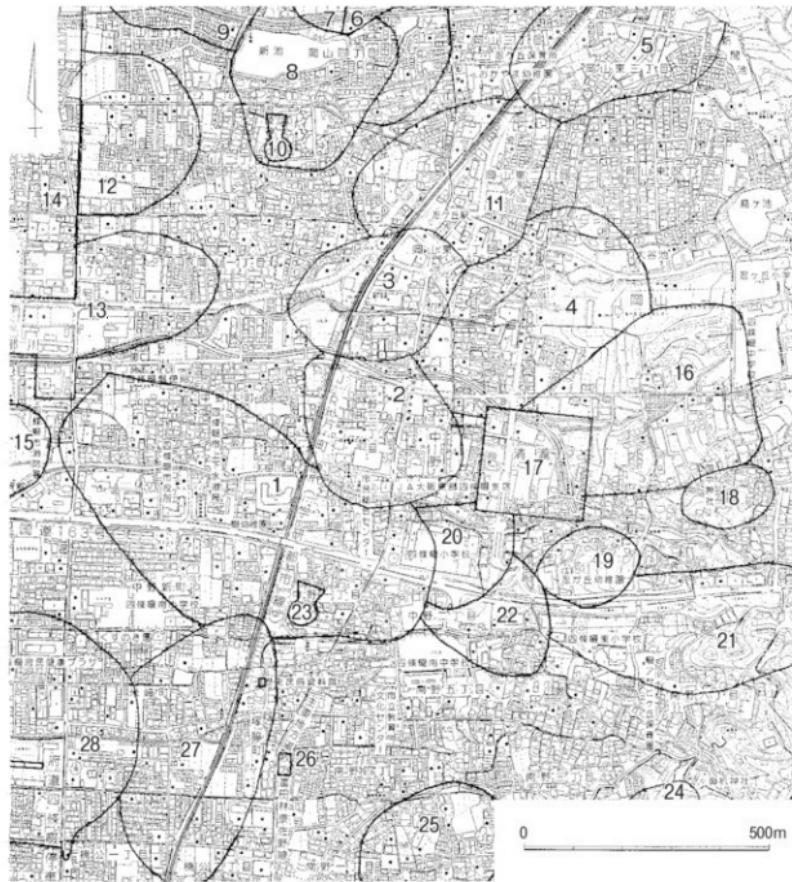
形象埴輪は、古墳から出土するのが通常であるが、四條暖では集落遺跡からの出土が多く、中期に属するものが出土している。忍ヶ丘駅前遺跡で人物埴輪・子馬形埴輪・水鳥形埴輪(櫻井・佐野・野島2006、2010等)、南山下遺跡で馬形埴輪(野島1987c, d)、岡山南遺跡で家形埴輪が出土している(野島・藤原・花田1976)。なお、家形埴輪に伴って左足用の木製下駄が出土している(野島1979、1982)。古墳から出土した形象埴輪は、忍ヶ丘駅前1号墳での琴を弾く男性埴輪などがある(野島1993a、1997a)。

後期の古墳として、大上3号墳は、全長約45mの帆立貝形古墳で、主体部は削平されていたが周溝と墳丘の一部を検出し、円筒埴輪が立て並べられた状態で多数出土した(村上2006)。時期は古墳時代後期後半である。大上1号墳は横穴式石室を主体とし、鎌倉時代に盜掘されていたが、金銅装中空耳環が1点出土した(野島1999a、四條暖市教育委員会編2002)。その他の古墳でも、装飾壺や鳥形埴輪など多数の副葬品が出土している。埴輪は、出土するものほとんどが円筒埴輪である。

古墳時代における四條暖の大きな特徴は、中期に馬の飼育が始まつたことである。馬は朝鮮半島から運ばれ、瀬戸内海、河内湖を経てこの地におろされたものと考えられる。古墳時代の四條暖は飯盛山系が南北に走り、山麓の西方2kmほどで河内湖となる。飯盛山系から、讃良川・岡部川・清滝川・権現川が河内湖に注ぎ、この川が馬の食料を育て自然の柵ともなり牧場に適した環境であった(野島1996d、1999b)。鎌田遺跡では樂器のスリザサラや木鎧、祭具を載せる台が(村上2001c, d, e)、奈良井遺跡では犠牲馬の首をはじめ儀式で使われた人形・馬形の土製品やミニチュア土器が出土している(野島1980b、櫻井・佐野・野島2006、2010等)。四條暖小学校内遺跡・中野遺跡などで初期須恵器をはじめ韓式土器や韓式系土器が数多く出土し(村上2000等)、牧場を運営した渡来系の人々の存在を示している。これらの人々を支えた生産遺跡として、鎌田遺跡や讃良郡条里遺跡では水田跡が見つかっている(野島1993b、中尾・山根編2009等)。

古代以降

正法寺跡は、大阪府教育委員会と四條暖市教育委員会がともに数次にわたって調査しており、南から南大門・中門・東西の塔・金堂・講堂・食堂と並ぶ薬師寺式の伽藍配置の寺院であると推定されている(大阪府教育委員会編1970)。これまでの調査で、中門、東塔、講堂などの存在が確認されており、平安時代ごろの建物はいずれも石積み、あるいは瓦積みの基壇建物である。一方白鳳期の創建当時の建物は、講堂の位置には掘立柱建物があったことがわかった(村上2001a)。これ以外にも創建当時の掘立柱建物が多く検出されており、創建当時の建物の多くは掘立柱建物であったと思われる。ただし、中門は礎石建物で(野島・藤原・花田1977)、東塔は石積みの造構を伴っていた(大阪府教育委員会編



第1図 周辺遺跡分布図

- | | | | |
|-----------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 中野遺跡 | 2. 奈良井遺跡 | 3. 南山下遺跡 | 4. 岡山南遺跡 |
| 5. 坪井遺跡 | 6. 讀良川床遺跡 | 7. 讀良寺跡 | 8. 更良岡山古墳群 |
| 9. 更良岡山遺跡 | 10. 忍岡古墳 | 11. 忍ヶ丘駅前遺跡 | 12. 北口遺跡 |
| 13. 奈良田遺跡 | 14. 讀良郡条里遺跡 | 15. 錄田遺跡 | 16. 清滝古墳群 |
| 17. 正法寺跡 | 18. 国中神社内遺跡 | 19. 大上遺跡 | 20. 四條畷小学校内遺跡 |
| 21. 城遺跡 | 22. 木間池北方遺跡 | 23. 墓ノ堂古墳 | 24. 近世墓地 |
| 25. 南野遺跡 | 26. 伝和田賢秀墓 | 27. 南野米崎遺跡 | 28. 雁屋遺跡 |

1970)。2001年の調査では、回廊の南西部部分にあたると推定される位置の瓦だまりから鶴尾片が出土した(野島・村上2002)。この鶴尾片は白鳳期のもので、創建当時のものと考えられる。

讃良寺跡は1969年に部分的に調査されており、正法寺と同じく白鳳期の創建であることが分かっている(桜井1972、櫻井・佐野・野島2006、2010)。また、1997年の讃良川改修工事に伴う調査では正法寺のものと同様の素弁八葉蓮華文軒丸瓦が出土した(野島編2000)。讃良寺出土のものの文様は型に起因する摩耗がみられ、正法寺出土のものが先に作られたものと考えられる(野島1997b)。

奈良時代には正法寺を中心に集落遺跡があいついで発見されている。河川跡では数箇所で土馬を使った祭祀がおこなわれていて、木間池北方遺跡では円面鏡や土器と共に土馬が7体出土した(村上2006)。木間池北方遺跡で「□万呂」(村上2006)、南野遺跡では「大」の字を墨書きした土器が出土し(野島1995)、文字資料がみられるようになる。

城遺跡では旧通産省との合同地震調査が行われ、生駒断層の跡が見つかった(野島1996c)。この断層の研究の結果、断層の上の層から奈良時代の須恵器坏が出土し、地震は奈良時代以前におこったと判断された。その後、放射性炭素年代測定法による分析から地震は縄文時代から弥生時代ごろであったことが判明した。

平安時代には井戸が多く発見される。中野遺跡では「應保二年 如月廿日」と書かれた墨書き物が出土し(村上2003b)、岡山南遺跡では「高田宅」「福万宅」などの墨書き土器が井戸から出土している(野島1987b)。

大阪から奈良へと向かう街道のひとつである清滝街道を、飯盛山系の西麓まで下りきらない地点には、延喜式神名帳に記載される式内社の国中神社が鎮座している。四條暖市内には、他に御机神社と忍陵神社が式内社として挙げられるが、延喜式の時代から場所を変えずに残っている神社はこの国中神社だけである。

鎌倉時代では、坪井遺跡で鍛冶工房の跡が見つかっている(野島1996a、b)。工房跡では、鍛冶炉・金床石、井戸などの施設が備わっていた。鎌5丁が残された工房もあった。

南北朝時代に四條暖では、四條暖の合戦が行われたとされている。南朝方の実質的大将で若くして戦死した楠正行のものと、その一族の和田賢秀のものと伝わる墓があり、いずれも大阪府指定の史跡となっている。

中野共同墓地には天文24(1555)年銘のある十三仏塔があり(山口1990)、四條暖で最も古い十三仏塔である。

(實盛良彦)

第2章 調査の経過

第1節 調査の経過

今回報告する遺跡は、四條畷市内を東西に連なる生駒山系の西側に所在する中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡である。中野遺跡は、四條畷市中野本町を中心として、東西約800m・南北約400mの範囲に広がり、古墳時代と中世の集落跡である。奈良井遺跡は、四條畷市中野三丁目を中心として、直径約300mの範囲に広がり、主に古墳時代中期から後期にかけての馬関係の祭祀跡を中心とした遺跡である。南山下遺跡は、四條畷市岡山東1丁目付近において東西約330m・南北約270mの範囲に広がり、縄文時代・古墳時代・中世の集落跡である。岡山南遺跡は、四條畷市岡山を中心として、東西約400m・南北約350mの範囲に広がり、旧石器時代・縄文時代・古墳時代・平安時代・中世の集落跡である。今回、大阪府枚方土木事務所により、これらの遺跡を総断するように国道163号東中野の交差点からJR学研都市線忍ヶ丘駅へ向かう主要地方道枚方富田林泉佐野線での道路拡幅工事が計画された。過去の周辺地域での発掘調査の状況や立地条件から、道路拡幅工事場所においても遺跡が存在することが十分に考えられた。以上、発掘調査を開始するにあたっては、大阪府枚方土木事務所と協議を行い、工事に伴って埋蔵文化財が破壊されることが考えられることから、その記録保存のために事前に発掘調査を実施することになった。

奈良井遺跡（NR04-1）については、平成16年8月30日付けで文化財保護法第57条の3の規定により通知があった。四條畷市中野3丁目地内に所在し、調査面積は140m²で、調査期間は平成16（2004）年12月9日から平成16年12月17日までであった。

奈良井遺跡（NR06-1）については、平成18年9月14日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により通知があった。四條畷市中野3丁目地内に所在し、調査面積は69m²で、調査期間は平成18（2006）年11月20日から平成18年12月5日までであった。

岡山南遺跡・奈良井遺跡（OM・NR06-1）については、平成19年2月6日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により通知があった。四條畷市大字中野地内に所在し、調査面積は63m²で、調査期間は平成19（2007）年4月3日から平成19年4月9日までであった。

中野遺跡（NN06-1）については、平成19年1月30日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により通知があった。四條畷市大字中野地内に所在し、調査面積は351m²で、調査期間は平成19（2007）年4月18日から平成19年5月16日までであった。

岡山南遺跡・南山下遺跡（OM・MS07-1）については、平成19年9月7日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により通知があった。四條畷市大字中野地内に所在し、調査面積は77m²で、調査期間は平成19（2007）年12月4日から平成19年12月12日までであった。

奈良井遺跡・中野遺跡（NR・NN08-1）については、平成20年9月12日付けで文化財保護法第94条第1項の規定により通知があった。四條畷市大字中野地内に所在し、調査面積は162m²で、調査期間は平成20（2008）年12月15日から平成21（2009）年1月16日までであった。

発掘調査報告書の作成については、大阪府枚方土木事務所との協議により、道路拡幅事業がすべて完了した翌年にを行うこととしていた。その事業が平成23年度に完了したことから、平成24年2月24日付け枚上第9418号で大阪府枚方土木事務所から「主要地方道枚方富田林泉佐野線埋蔵文化財調査の完了に伴う報告書作成について（依頼）」が提出された。そのことについて、四條畷市教育委員会から平成24年3月2日付け暖教社第1550-1号で「主要地方道枚方富田林泉佐野線埋蔵文化財調査の完了に伴う報告書作成について（回答）」を大阪府枚方土木事務所へ提出した。これらの事務手続きを経て、平成24年4月2日付けで「主要地方道枚方富田林泉佐野線埋蔵文化財調査の報告書作成委託」の委託契約書を締結した。

委託期間は、平成24年4月2日から平成25年3月29日までであった。

（村上 始）



第2図 調査地区全体図

第3章 奈良井遺跡 (NR04-1) 調査の成果

調査地区的東隣には、平行するように主要地方道枚方富田林泉佐野線が南北方向に通じているため、現道の安全確保の点から遺構を全面調査することは不可能であった。そのため、遺構部分については、道路から西側へ幅約1.5mを控え、東西約1.5m×南北約40.8mのトレンチを設定し調査を実施した。

調査は、重機により約40cm掘削した段階で遺構面である地山を確認し大溝を検出した。それ以下は人力での掘削を行った。(写真図版1-1・2)

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区については、調査前の現状は耕作地であった。耕土は約20cmで、耕土下には2種類の床土が20cm程度貼られていた。その下層は黄橙色系の粘土層で地山であり、遺構面であった。以下、基本層序について述べる。

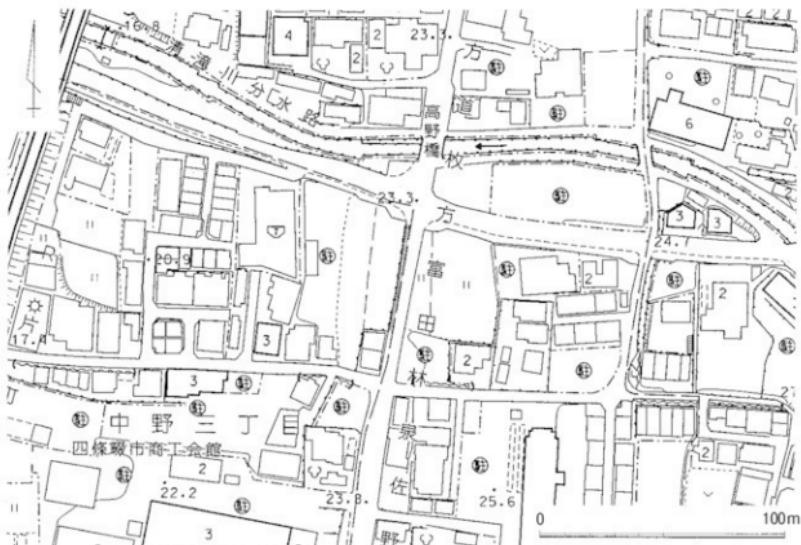
第I層：耕土 上面は南端でT.P.+22.630m、北端でT.P.+22.680m。厚さは約20~30cm。現代の耕土。

第II層：床土 上面は南端でT.P.+22.360m、北側でT.P.+22.400m。厚さは約8~20cm。現代の床土。

第III層：黄灰色系の砂質土 上面はT.P.+22.300m~T.P.+22.400m。厚さは約10~120cm。大溝の上層から中層付近までの埋土。

第IV層：オリーブ黒色粘土 上面はT.P.+21.000m~T.P.+21.700m。厚さは約10~30cm。大溝の下層の埋土。

第V層：橙色粘土 上面はT.P.+22.260m~T.P.+22.350m。地山。



第3図 調査地区位置図 (NR04-1)

次に、各土層の説明を述べる。(第4図・写真図版5-1・2)

第1層：耕土	第21層：灰白色砂(N 8/)
第2層：床土A	第22層：灰白色砂(2.5Y 8/2)
第3層：床土B 淡黄色粘土(5Y 8/3)	第23層：灰白色砂(5Y 8/1)
第4層：浅黄色砂質土(2.5Y 7/3)	第24層：灰白色砂(2.5Y 7/1)
第5層：灰黄色砂質土(2.5Y 6/2)	第25層：灰黄褐色砂質土(10YR 5/2)
第6層：灰白色砂(5GY 8/1)	第26層：淡黄色砂質土(2.5Y 8/4)
第7層：灰白色砂(2.5Y 8/1)	第27層：黄灰色砂質土(2.5Y 5/1)炭化物混入
第8層：灰白色砂(2.5Y 8/2)	第28層：黄灰色粘質土(2.5Y 5/1)に 明青灰色粘質土(5BG 7/1)混入
第9層：灰白色砂質土(2.5Y 7/1)	第29層：灰白色砂(5Y 7/1)
第10層：灰黄色砂質土(2.5Y 6/2)	第30層：灰白色シルト(10Y 7/1)
第11層：黄灰色砂(2.5Y 6/1)	第31層：灰白色砂(2.5Y 8/1)
第12層：黄灰色砂質土(2.5Y 4/1)	第32層：灰白色砂質土(10Y 7/1)
第13層：黄灰色砂(2.5Y 6/1)	第33層：灰白色砂(7.5Y 8/2)
第14層：灰白色砂(10Y 7/1)	第34層：灰色シルト(7.5Y 5/1)
第15層：灰白色砂(10Y 8/1)	第35層：オリーブ黒色粘土(5Y 3/1)
第16層：灰白色砂(7.5Y 7/1)	第36層：灰白色砂(5Y 7/1)
第17層：灰白色砂(5GY 8/1)	第37層：灰白色砂(2.5Y 7/1)
第18層：明緑灰色シルト(10GY 7/1)	第38層：黒色粘質土(5Y 2/1)炭化物混入
第19層：明オリーブ灰色粘質土(5GY 7/1)	第39層：オリーブ黒色粘土(5Y 2/2)
第20層：黄灰色粘質土(2.5Y 6/1)	

第2節 遺構

今回の調査で確認した遺構は、古墳時代後期の大溝であった。遺構面の標高は調査地区の南端でT.P.+22.260m、北端でT.P.+22.360mあった。

大溝(第4図・写真図版2-1・2、3-1・2、4-1・2)

調査地区的東隣には、平行するように主要地方道松方富田林泉佐野線が南北方向に通じているため、現道の安全確保の点から大溝を全面調査することは不可能であった。そのため、遺構部分については、道路から西側へ幅約1.5mを控え、東西約1.5m×南北約40.8mのトレーニチを設定し調査を実施した。

大溝は、調査地区的南寄りのところで検出し、長さ約1.5m以上、幅約26m、深さが最大約1.78mである。確認できた大溝の南端は上端がT.P.+22.300m、下端がT.P.+20.800m、北端は上端がT.P.+22.380m、下端がT.P.+20.600mであった。

形状は、北側の肩部が緩やかに南側へ下降し、約2.4m付近で約40cm下がる段をもちらがら底部へ向かう。底部は幅約3mが平坦面を呈し、北端で約20cm立ち上がったあと約10mはほぼ平坦に北側へ向かい、そこから緩やかに上昇する。周囲の地形から判断するとほぼ東から西へと流れる大溝である。

主な出土遺物は、須恵器蓋壺・高壺・甕・甕・器台・土師器甕・高壺・把手・鉢・石杵・瓦などである。

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

大溝

須恵器

1 壺蓋 口径：12.6cm(復元)。器高：4.3cm(残存)。厚さ：0.4~0.6cm。色調：内面は青灰色(5PB 5/1)、外面は青灰色(5B 5/1)、断面は紫灰色(5P 5/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石と赤色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。I型式4段階(T K23型式)。(第5図-1・写真図版29-1-1)

2 壺蓋 口径：12.2cm(復元)。器高：4.2cm。厚さ：0.2~0.7cm。色調：内面は青灰色(5PB 5/1)、

外面は灰色(N 4/)、断面は灰色(N 6/)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石と石英を多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。II型式1段階(MT15型式)。(第5図-2・写真図版29-1-2)

3 壱蓋 口径：14.1cm。器高：5.0cm。厚さ：0.1～0.6cm。色調：内面は青灰色(5PB 5/1)、外面は灰白色(N 7/)、断面は明青灰色(5PB 7/1)。胎土：緻密。直径2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存度：2/3。II型式2段階(TK10号窯段階)。(第5図-3・写真図版29-1-3)

4 壱蓋 口径：13.6cm(復元)。器高：4.1cm(残存)。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内面は灰白色(N 7/)、外面は灰白色(2.5Y 8/1)、断面は明青灰色(5PB 7/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石と赤色・黒色鉱物を多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/4。外面に別個体の焼成時付着痕あり。II型式2段階(TK10号窯段階)。(第5図-4・写真図版29-1-4)

5 壱蓋 口径：14.4cm(復元)。器高：3.8cm(残存)。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内面は明青灰色(5PB 7/1)、外面は灰色(N 6/)、断面は紫灰色(5P 5/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石を多く含む。焼成：良好。残存度：1/8。外面に気泡が筋状に入り込む。II型式5段階(TK209型式)。(第5図-5・写真図版29-1-5)

6 壱蓋 口径：13.2cm(復元)。器高：3.3cm(残存)。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内面は明青灰色(5PB 7/1)、外面は灰白色(N 7/)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石を多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/8。天井部はヘラ切り後未調整。II型式5段階(TK209型式)。(第5図-6・写真図版29-1-6)

7 壱身 口径：11.2cm(復元)。器高：4.1cm(残存)。厚さ：0.1～0.7cm。色調：内面は青灰色(5PB 6/1)、外面は青灰色(5PB 5/1)、断面は暗紫灰色(5RP 4/1)。胎土：やや密。直径1mm以下の長石と石英をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/10。I型式5段階(TK47型式)。(第5図-7・写真図版29-1-7)

8 壱身 口径：11.3cm(復元)。器高：4.7cm(残存)。厚さ：0.1～0.8cm。色調：内面は青灰色(5PB 6/1)、外面は灰色(N 6/)、断面は紫灰色(5P 6/1)。胎土：緻密。直径2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存度：1/4。II型式1段階(MT15型式)。(第5図-8・写真図版29-1-8)

9 壱身 口径：12.3cm(復元)。器高：5.3cm(残存)。厚さ：0.1～0.6cm。色調：内面は青灰色(5PB 5/1)、外面は明青灰色(5PB 7/1)、断面は灰色(N 5/)。胎土：緻密。直径2mm以下の長石を少量含む。焼成：良好。残存度：1/8。II型式1段階(MT15型式)。(第5図-9・写真図版29-1-9)

10 壱身 口径：12.0cm(復元)。器高：3.7cm(残存)。厚さ：0.2～0.6cm。色調：内面にはぶい黄橙色(10YR 7/3)、外面は灰白色(2.5Y 7/1)、断面の外側1～1.5mmは外面、他は内面と同じ。胎土：緻密。直径2mm以下の長石を含む。焼成：不良。残存度：1/5。II型式4段階(TK43型式)。(第5図-10・写真図版29-1-10)

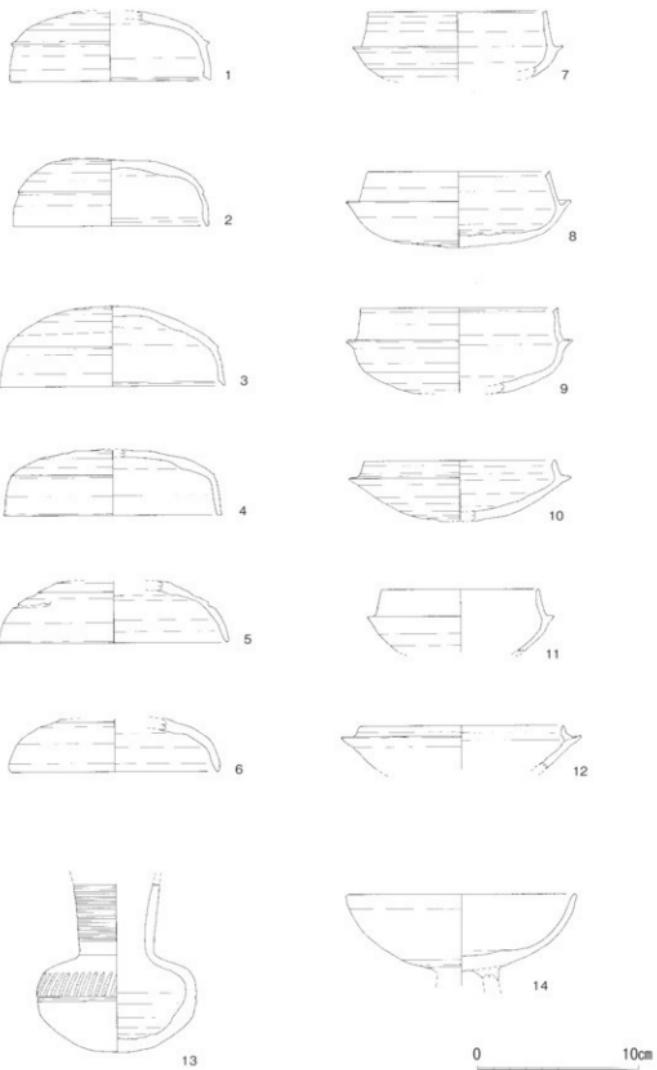
11 壱身 口径：9.8cm(復元)。器高：3.9cm(残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・断面は灰色(N 6/)、外面は灰色(N 4/)。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/7。II型式1段階(MT15型式)。(第5図-11・写真図版29-1-11)

12 壱身 口径：12.8cm(復元)。器高：2.7cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内面は灰色(N 7/)、外面は青灰色(5PB 6/1)、断面は灰赤色(2.5YR 5/2)。胎土：粗。直径2mm以下の長石と石英を多く含む。焼成：やや不良。残存度：1/8。II型式5段階(TK209型式)。(第5図-12・写真図版29-1-12)

13 魁 器高：10.5cm(残存)。厚さ：0.4～1.0cm。色調：内・外面は灰色(N 6/)、断面は灰色(N 8/)。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。頭部にはカキメ調整を施し、体部外面の中位に刺突文を施した後、1条の沈線を巡らせてある。II型式4段階(TK43型式)。(第5図-13・写真図版29-2-13)

14 無蓋高壺 口径：14.4cm。器高：5.4cm(残存)。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色(2.5Y 8/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石と石英を多く含む。焼成：不良。残存度：3/5。II型式5段階(TK209型式)～II型式6段階(TK217型式)と思われる。(第5図-14・写真図版29-2-14)

15 壺 口径：17.8cm(復元)。器高：2.4cm(残存)。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内面はオリーブ黒色



第5図 出土遺物 (NR04-1) (1)

(10Y 3/1)、外面は灰色(N 4/)、断面は灰色(N 5/)。胎土：やや密。直径3mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存度：小片。焼成前のタタキ締めが不足し、気泡痕が多くみられる。自然釉が全体的にかかっている。口縁部下に波状文を施している。I型式3段階(T K208型式)。(第6図-15・写真図版29-2-15)

16 壺 口径：19.0cm(復元)。器高：4.3cm(残存)。厚さ：0.5~0.8cm。色調：内面は紫灰色(5P 5/1)、外面は暗紫灰色(SRP 4/1)、断面は紫灰色(SRP 5/1)。胎土：やや密。直径1mm以下の長石等を含む。焼成：良好。残存度：小片。頸部外面はカキメ調整を施し、内外面の一部に自然釉(暗オリーブ色 5Y 4/3)がかかっている。I型式5段階(T K47型式)。(第6図-16・写真図版29-2-16)

17 壺 口径：21.6cm(復元)。器高：5.0cm(残存)。厚さ：0.5~0.9cm。色調：内面は灰色(N 6/)、外面は青灰色(5PB 6/1)、断面は青灰色(5PB 6/1)。胎土：やや粗。直径1mm以下の長石等をやや多く、また直径1.4cmの礫を含む。焼成：良好。残存度：小片。頸部外面はカキメ調整を施し、一部に自然釉がかかっている。II型式1段階(MT15型式)。(第6図-17・写真図版29-2-17)

18 壺 口径：18.8cm(復元)。器高：4.9cm(残存)。厚さ：0.9~1.1cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。内面に自然釉(オリーブ黄色 7.5Y 6/3)がかかっている。II型式2段階(T K10号窯段階)。(第6図-18・写真図版29-2-18)

19 壺 口径：24.6cm(復元)。器高：5.4cm(残存)。厚さ：0.5~1.0cm。色調：内面は灰色(N 5/)、外面は青灰色(5PB 5/1)、断面は黄灰色(2.5Y 5/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石等を含む。焼成：やや不良。残存度：小片。口縁部内面の一部に砂礫が付着している。II型式2段階(T K10号窯段階)。(第6図-19・写真図版29-2-19)

20 壺 口径：22.1cm(復元)。器高：6.6cm(残存)。厚さ：0.9~1.1cm。色調：内面は灰色(N 4/)、外面は灰色(N 5/)、断面は紫灰色(SRP 6/1)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石と赤色鉱物をやや多く含む。焼成：やや不良。残存度：小片。頸部外面はカキメ調整を施している。II型式2段階(T K10号窯段階)と思われる。(第6図-20・写真図版29-2-20)

21 壺 口径：34.8cm(復元)。器高：4.2cm(残存)。厚さ：0.7~1.1cm。色調：内面は灰白色(5Y 7/2)、外・断面は灰白色(5Y 7/1)。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。内面に自然釉がかかっている。II型式2段階(T K10号窯段階)。(第6図-21・写真図版29-2-21)

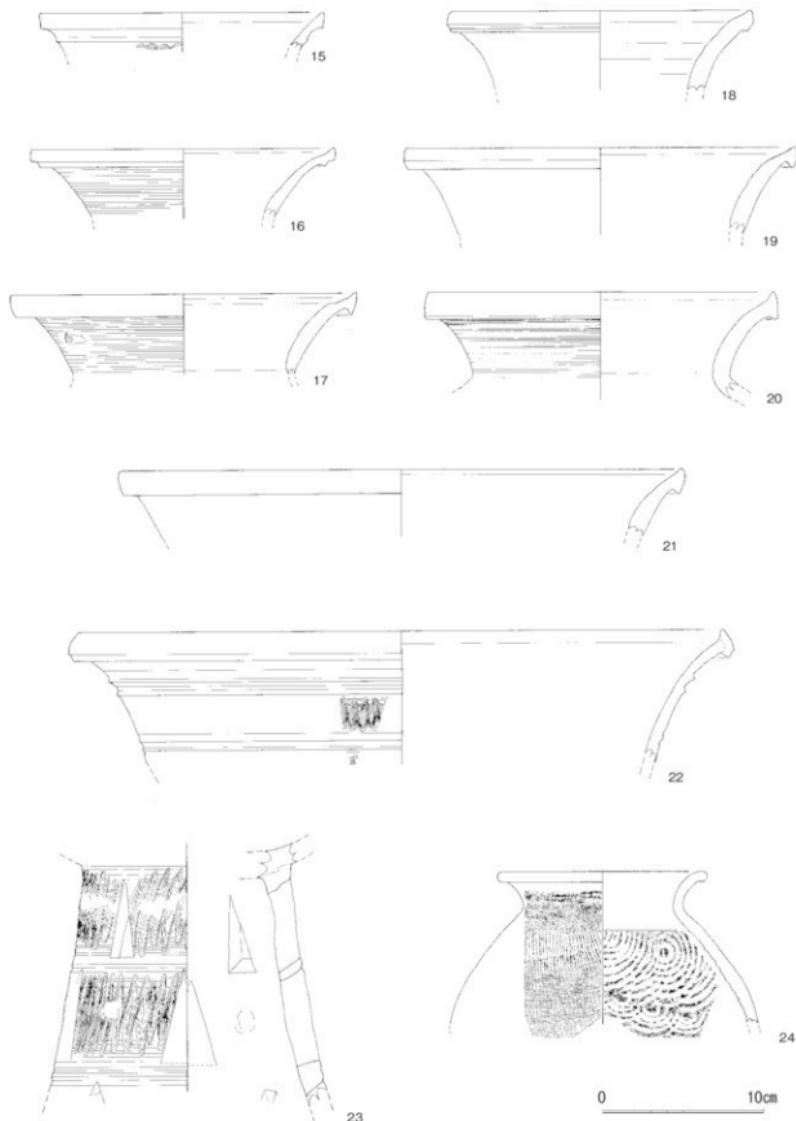
22 器台(环部)口径：41.6cm(復元)。器高：8.3cm(残存)。厚さ：0.5~1.0cm。色調：内面は灰色(N 6/)、外面は暗青灰色(5PB 4/1)、断面は灰色(N 5/)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石をやや多く含む。焼成：やや良好。残存度：小片。外面には、上下に沈線を施すことで形成された2条の凸線を2段以上に巡らせ、それぞれの凸線の下位にカキメ調整後に波状文を施している。II型式5段階(T K209型式)。(第6図-22・写真図版29-2-22)

23 器台(脚部)脚部径：17.4cm(復元)。器高：16.4cm(残存)。厚さ：1.2~1.7cm。色調：内面は青灰色(5PB 6/1)、外・断面は灰色(N 6/)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石を含む。焼成：良好。残存度：小片。外面には、上下に沈線を施すことで形成された1条の凸線を2段以上に巡らせ、それぞれの凸線の上位に波状文を施した後に上下で位置をずらせて三角形の透かしを開けている。I型式4段階(T K23型式)～II型式2段階(T K10号窯段階)と思われる。(第6図-23・写真図版29-2-23)

24 壺 口径：12.9cm(復元)。器高：9.4cm(残存)。厚さ：0.6~0.9cm。色調：内・外・断面は青灰白色(5B 5/1)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。III型式2段階(T K217型式)と思われる。(第6図-24・写真図版29-2-24)

土師器

25 長胴壺 口径：20.6cm(復元)。器高：9.4cm(残存)。厚さ：0.5~1.1cm。色調：内面は灰黄褐色(10YR 4/2)、外面はにぶい黄橙色(10YR 6/3)で口縁下半部褐灰色(10YR 4/1)、断面はにぶい黄橙色(10YR 7/3)。胎土：粗。直径2mm以下の長石・石英・雲母・赤色鉱物を多く含む。焼成：良好。



第6図 出土遺物 (NR04-1) (2)

残存度：小片。口縁部外面はヨコハケとナデ調整、体部外面はタテハケ調整、口縁部内面はヨコナデ調整、体部内面はタテハケ調整後ナデ調整を施している。内面の一部に炭化物が付着している。6世紀前半。(第7図-25・写真図版30-1-25)

26 壺 口径：22.2cm(復元)。器高：5.7cm(残存)。厚さ：0.3~0.6cm。色調：内面はにぶい橙色(7.5YR 6/4)、外面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)、断面は灰白色(7.5YR 8/2)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石・石英・黑色鉱物・赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はナデ調整・内面はヨコハケ調整後ナデ調整、口縁部外面はタテハケ調整後ナデ調整・内面はナデ調整を施している。6世紀中頃。(第7図-26・写真図版30-1-26)

27 壺 口径：22.4cm(復元)。器高：4.7cm(残存)。厚さ：0.5~1.0cm。色調：内面は灰白色(10YR 8/1)、外面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)、断面は橙色(7.5YR 7/6)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石・石英・雲母を含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整を施している。6世紀中頃。(第7図-27・写真図版30-1-27)

28 壺 口径：23.6cm(復元)。器高：4.5cm(残存)。厚さ：0.4~0.9cm。色調：内面はにぶい橙色(5YR 7/4)、断面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)、外面は橙色(5YR 6/6)。胎土：やや粗。直径2mm以下の長石・石英・雲母・赤色鉱物を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整後ナデ調整、体部内面はヨコハケ調整を施している。6世紀中頃～後半。(第7図-28・写真図版30-1-28)

29 把手 長さ：6.2cm(残存)。幅：7.1cm(残存)。高さ：5.0cm(残存)。厚さ：1.3~4.5cm。色調：内・外面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)、断面は淡橙色(5YR 8/4)。胎土：粗。直径3mm以下の長石・石英を多量に含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はユビオサエ痕がみられ、体部内面はナデ調整を施している。瓶又は鍋の把手。6世紀代。(第7図-29・写真図版30-1-29)

30 把手 長さ：5.9cm(残存)。幅：6.3cm(残存)。高さ：5.0cm(残存)。厚さ：1.3~3.7cm。色調：内・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/2)、外面は橙色(7.5YR 7/6)。胎土：やや粗。直径1mm以下の長石・雲母・赤色鉱物を含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はユビオサエ痕がみられ、タテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。器壁の角度から瓶の把手と考える。6世紀代。(第7図-30・写真図版30-1-30)

31 高环(脚部) 底径：8.8cm(復元)。器高：6.9cm(残存)。厚さ：0.4~0.9cm。色調：内・外面は橙色(7.5YR 7/6)、断面は浅黄橙色(7.5YR 8/6)。胎土：やや密。直径2mm以下の長石・石英を含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の上位はタテヘラミガキ調整、裾部はナデ調整、体部内面の裾部はナデ調整を施している。6世紀中頃～後半。(第7図-31・写真図版30-1-31)

石器

32 石杵 長さ：9.6cm(残存)。最大幅：6.6cm。最大厚：5.8cm。色調：灰色(10Y 6/1)、大半の箇所に鉄分が沈着し褐灰色(10YR 5/1)に変色している。下部の2.1×1.9cmの範囲に敲打痕跡がみられる。古墳時代のものと思われる。(第7図-32・写真図版30-1-32)

瓦

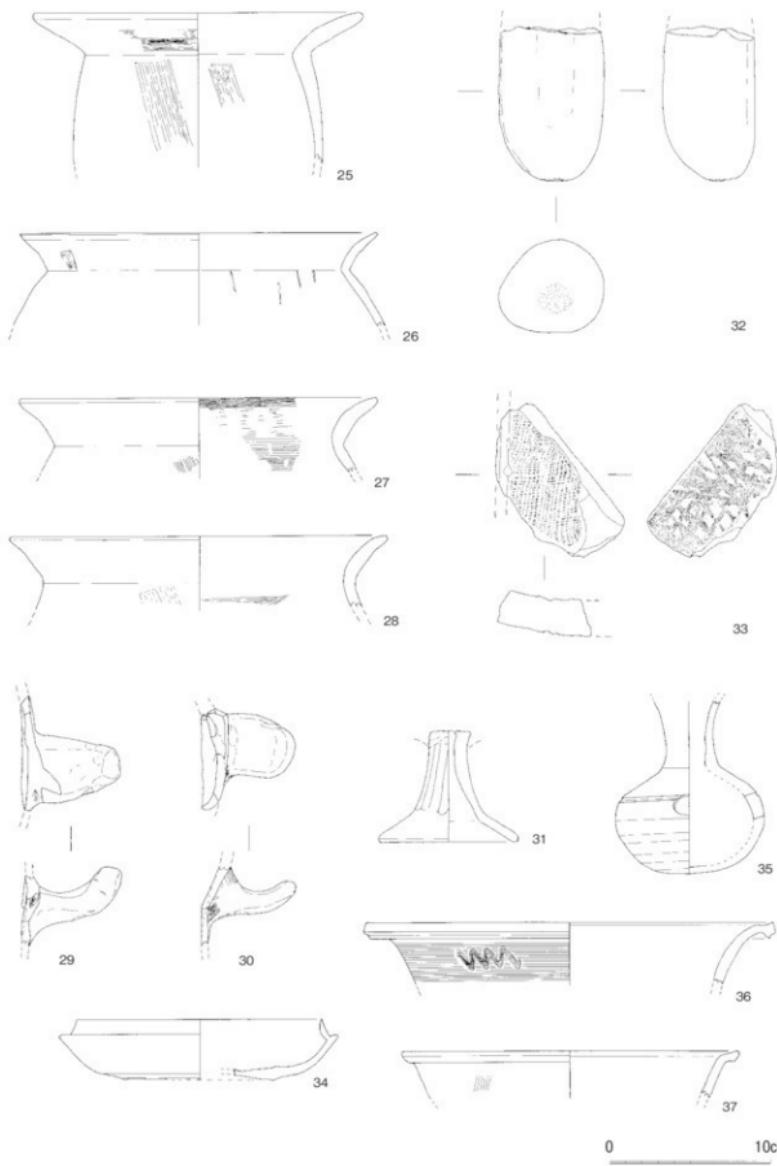
33 平瓦 長さ：9.5cm(残存)。最大幅：8.0cm(残存)。厚さ：2.1~2.3cm。色調：凹面は灰白色(2.5Y 8/2)、凸面は灰白色(2.5Y 8/1)。胎土：やや粗。直径1mm以下の石英と直径3mm以下の長石を含む。焼成：やや不良。凹面には布目痕がみられ、凸面は一辺約6mmの格子叩きを施している。他の遺物から奈良時代のものと思われる。(第7図-33・写真図版30-1-33)

2. 包含層出土遺物

須恵器

34 坏身 口径：15.2cm(復元)。器高：3.8cm(残存)。厚さ：0.2~0.8cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。II型式3段階(M T 85号窯段階)。(第7図-34・写真図版30-2-34)

35 鏟 器高：10.6cm(残存)。厚さ：0.4~0.8cm。色調：外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：口縁部のみ欠損。体部外面の円孔の上位に1条の沈線を巡らせている。II型式4段階(T K 43型式)。(第7図-35・写真図版30-2-



第7図 出土遺物 (NR04-1) (3)

36 壺 口径：25.3cm(復元)。器高：3.9cm(残存)。厚さ：0.4～0.7cm。色調：内・外面は灰色(N 4/)、断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面にはカキメ調整後波状文を施している。体部内面には自然釉がかかっている。II型式2段階(T K10号窯段階)。(第7図-36・写真図版30-2-36)

土師器

37 鉢 口径：21.0cm(復元)。器高：2.9cm(残存)。厚さ：0.5～0.6cm。色調：内・外・断面は橙色(5YR 6/8)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と黒色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。(第7図-37・写真図版30-2-37)

(村上)

第4章 奈良井遺跡（NR06-1）調査の成果

調査地区的東隣には、平行するように主要地方道枚方富田林泉佐野線が南北方向に通じており、西隣には歩道が利用されている状況下での発掘調査であったため、現道や歩道の安全確保の点から幅約1m×総延長約69mの範囲を調査対象として実施した。

調査は重機による掘削から開始したが、調査地区全体が過去に現道や歩道に埋設した下水管などの工事によって約0.9~1.25mは擾乱を受けていた。このことから遺物包含層はほとんど残存しておらず、注意を払いながら遺構面である地山まで重機による掘削を行うこととした。しかし遺構面である地山も大半が擾乱を受けており、確認できたのはごく一部であった。機械掘削後遺構検出の精査を行ったところ一部で遺構を確認できたが、その残存状況も良好なものとは言えないものであった。（写真図版6-1・2、7-1）

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区については、前述したように調査対象地区の全体が過去の埋設管工事により現地盤下の約0.9~1.25mが擾乱を受けていたため、注意を払いながら遺構面である地山まで重機による掘削を行うこととした。

地山に関しては、南側の一部でのみ確認し、北側では掘下げの限界により未確認である。

以下、基本層序について述べる。

第1層：アスファルト・碎石・盛土・埋戻し土 上面は南端でT.P.+23.850m、北端でT.P.+23.820m。
厚さは約65~125cm。



第8図 調査地区位置図（NR06-1）

第Ⅱ層：耕土 上面はT.P.+23.030m。厚さは約30~40cm。旧耕土。一部で残存。

第Ⅲ層：床土 上面はT.P.+22.700m。厚さは約10cm。旧床土。一部で残存。

第Ⅳ層：灰褐色系の砂質土 上面はT.P.+22.600m厚さは約60cm。大溝の埋土。

第Ⅴ層：黒色粘質土 上面はT.P.+22.020m厚さは約30cm以上。

第Ⅵ層：明黄褐色粘土 上面はT.P.+23.050m。地山。南側でのみ確認。

次に、各土層の説明を述べる。(第9図・写真図版7-2、10-2)

第1層：縁石

第11層：旧耕土

第2層：歩道(コンクリート)

第12層：床土

第3層：アスファルト

第13層：灰褐色砂質土(7.5YR 4/2) - 大溝の埋土

第4層：コンクリート(以前の建物の床面)

第14層：黒色粘質土(N 2) - 遺物出土なし

第5層：碎石

第15層：浅黄色砂質土(2.5Y 7/4)

第6層：埋戻土

第16層：灰白色シルト(2.5Y 7/1)

第7層：碎石(下水工事による)

第17層：にぶい黄色粘質土(2.5Y 6/3)

第8層：埋設管工事による搅乱

第18層：明緑灰色シルト(7.5GY 7/1)

第9層：盛土

第19層：搅乱(埋設管工事による)

第10層：旧耕土に盛土混入

第2節 遺構

今回の発掘調査地区については、調査前の現状は道路と歩道であった。周辺の発掘調査成果から考えると本来であれば盛土の下層には耕土と床土が堆積しており、その下層から中世以降の包含層や遺構面を確認し、さらに下層へ調査を進めることとなるのであるが、前述したように調査対象地区的全体が過去の埋設管工事により現地盤下の約0.9~1.25mが搅乱を受けていたため、注意を払いながら遺構面である地山まで重機による掘削を行うこととした。

そのような状況下で今回の調査で確認した主な遺構は、溝と古墳時代後期の大溝であった。

溝1(第9図・写真図版8-2)

調査地区的中央付近で南側の肩部を検出した。北側の肩にあたる部分は搅乱を受けているとの埋設管のため確認はできなかった。確認できた範囲では、西端の幅約1.5m・東端の幅約1m、深さが最大約0.33mである。南西肩部の上端はT.P.+22.916m、南東肩部の上端はT.P.+22.918m、底部はT.P.+22.883mであった。形状は、確認できた肩部から東西方向に延びるものである可能性が高いと考える。

出土遺物は、須恵器壺と思われる小片のみであった。

大溝(第9図・写真図版9-1・2、10-1・2)

調査地区的北端部で検出した。遺構の肩部などは搅乱などにより確認できず、底部に関しても掘下げの限界により未確認である。ただし、まとめの章でも述べるように周辺地区での調査成果を考えると、西側隣接地や現道を挟んだ東側で確認している大溝の一部にあたる個所であり、形状は北東から南西へ延びるものと考える。遺構の掘下げはT.P.+22.050mまでが限度であった。

主な出土遺物は、須恵器蓋坏・壺・土師器把手・ミニチュア土製品・壺・韓式系壺・韓式系把手付鍋などである。出土遺物から6世紀中頃～後半の遺構と思われる。

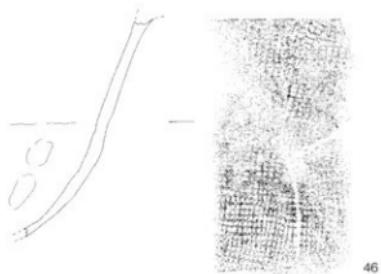
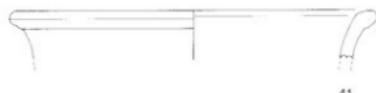
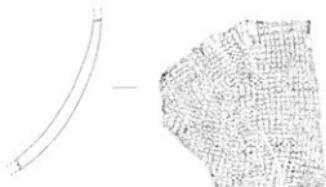
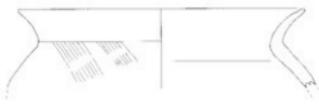
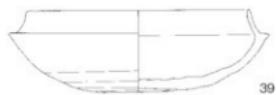
第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

溝1

須恵器

38 壺か 器高：28cm(残存)。厚さ：0.6~0.9cm。色調：内面は灰色(N 4/)、外・断面は灰色(N 5/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はナデ調整を施し、体部内面にはロクロ目がみられる。(第10図-38・写真図版31-1-38)



0 10cm

第10図 出土遺物 (NR06-1)

大溝

須恵器

39 壱身 口径：13.8cm。器高：4.9cm。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内面は灰色(N 6/)、外面は灰色(N 6/)と1/2は降灰により灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：密。直径1～2mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：ほぼ完形。II型式3段階(MT85窯段階)。(第10図-39・写真図版31-1-39)

40 壱身 口径：12.4cm。器高：5.0cm。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)。胎土：密。直径1mm程度の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：完形。II型式1段階(MT15型式)。(第10図-40・写真図版31-1-40)

41 壺 口径：22.2cm(復元)。器高：3.0cm(残存)。厚さ：0.8～1.1cm。色調：内面は灰白色(5Y 7/1)、外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内面全体に降灰がみられる。II型式3段階(MT85窯段階)と思われる。(第10図-41・写真図版31-1-41)

土師器

42 把手 長さ：6.2cm(残存)。幅：4.6cm(残存)。高さ：5.0cm(残存)。厚さ：1.1～3.4cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色粒子を多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はナデ調整を施している。凹部の中央には長さ3.8cm・幅約1mm・深さ3mmの1条の切込みが施されている。瓶又は鍋の把手。(第10図-42・写真図版31-2-42)

43 ミニチュア土製品 口径：4.4cm(復元)。器高：3.0cm(残存)。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/4)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色粒子をやや多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。体部内外面に粘土紐痕がみられる。(第10図-43・写真図版31-2-43)

44 壺 口径：17.6cm(復元)。器高：4.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は橙色(5YR 7/6)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色粒子と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、体部内面はナデ調整を施している。ただし、外面は摩耗が著しいため調整痕は不明瞭である。6世紀中頃。(第10図-44・写真図版31-2-44)

45 韓式系壺 器高：9.3cm(残存)。厚さ：0.5～0.8cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：密。金雲母を極少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は一辺約3mmの格子叩き、体部内面はナデ調整を施している。外面の一部には帶状に炭化物が付着していることから壺の破片と思われる。(第10図-45・写真図版31-2-45)

46 韩式系把手付鍋 器高：13.3cm(残存)。厚さ：0.4～0.9cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は一辺約3mmの格子叩き、体部内面はナデ調整を施している。内面の下部にユビオサエ痕と粘土紐痕がみられる。外面の上端部に把手を受けたと思われる痕跡がみられることと内面の下部に炭化物の付着痕がみされることから把手付鍋と思われる。(第10図-46・写真図版31-2-46)

2. 埋戻土出土遺物

須恵器

47 無蓋高壺 器高：3.6cm(残存)。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外・断面は灰色(N 4/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。体部外面の中位に2条の凸線を設け、その下位に波状文をしている。I型式4段階(TK23型式)。この遺物は、埋設管工事による埋戻土内から出土していることから、この付近の遺物である可能性が高いと考える。(第10図-47・写真図版31-1-47) (村上)

第5章 岡山南遺跡・奈良井遺跡(OM・NR06-1)調査の成果

調査地区の東隣には、平行するように主要地方道枚富田林泉佐野線が南北方向に通じており西隣には民家が隣接している。そのことから東側には安全勾配を西側には通路を確保する必要があったため、東西約2.5m×南北約22mのトレンチを設定して調査範囲とした。

調査地区では、重機により盛土と耕土・床土を約90~100cm掘削した段階で中央付近より北側では遺構面である地山を確認し、南側では遺物包含層を確認した。これは、地山面が北端から約11m付近で南側は約20cm下がっていることから、南側部分では床土下に遺物包含層が残存していたもので、本来であれば北側にも堆積していたが、1枚の耕作地に造成するにあたって除去した結果、このような状況になったものと思われる。機械掘削前北側においては、遺構検出精査に努め、南側においては遺物包含層を人力で掘下げ、遺構面の検出業を行った。(写真図版II-1・2、12-1)

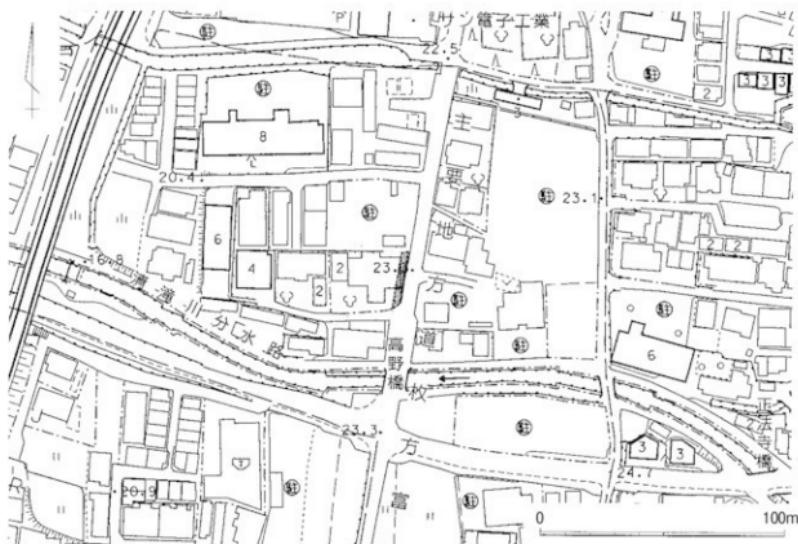
第1節 基本層序

今回の発掘調査地区については、調査前の現状は宅地であった。重機により盛土と耕土・床土を約90~100cm掘削した後、南側部分では床土下に遺物包含層を確認した。

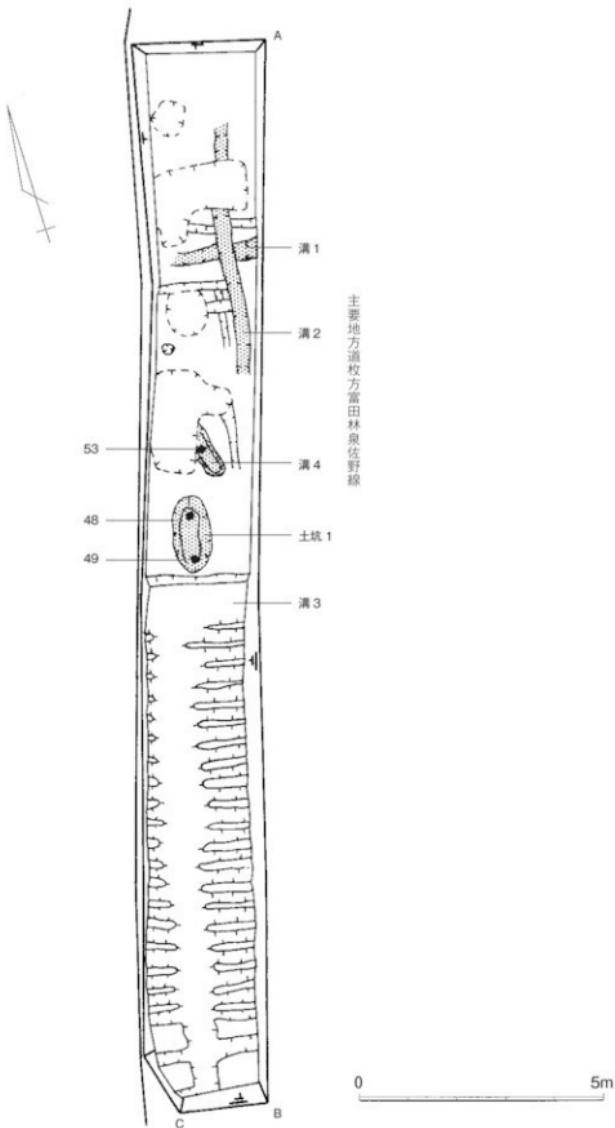
遺構面である地山は、北端から約11m付近で南側は約20cm下がっており、北側では機械掘削後に確認し、南側では遺物包含層を約20~30cm掘下げたところで確認した。

以下、基本層序について述べる。(写真図版12-2)

第I層：盛土 上面は南端でT.P. + 23.400m、北端でT.P. + 23.460m。厚さは約55~75cm。現代の盛土。



第11図 調査地区位置図 (OM・NB06-1)



第12図 調査地区平面図 (OM・NR06-1)

第Ⅱ層：旧耕土 上面は南端でT.P.+22.700m、北側でT.P.+22.700m。厚さは約10~25cm。現代の耕土。

第Ⅲ層：床土 上面は南端でT.P.+22.400m、北側でT.P.+22.500m。厚さは約5~10cm。現代の床土。

第Ⅳ層：灰色系砂質土 上面はT.P.+22.360m~T.P.+22.400m。厚さは約5~25cm。

他色の粘土ブロックなどが混在しているため、地盤高を揃えるために搬入した土と思われる。

第V層：黒褐色砂質土 上面はT.P.+22.300m~T.P.+22.400m。厚さは約10~50cm。

中世の包含層及び遺構の埋土。

第VI層：褐色系粗砂・シルト 上面は南端でT.P.+22.060m、北側でT.P.+22.460m。地山。

第2節 遺構

遺構面は、調査地区の中央付近で南側は約20cm下がっていた。北側では機械掘削後に確認し、南側では遺物包含層を約20~30cm掘下げたところで確認した。

南側下段では数条の溝、北側上段では溝と土坑を検出した。

溝1(第12図・写真図版12-2)

調査地区的南側上段北側付近で検出した。形状は東西方向に直線的で、規模は長さ約1.5m以上・幅約25cm・深さ約4cmである。北東肩部の上端はT.P.+22.469m・南東肩部の上端はT.P.+22.466m・底部はT.P.+22.426m、北西肩部の上端はT.P.+22.458m・南西肩部の上端はT.P.+22.454m・底部はT.P.+22.420mであった。

出土遺物は、土師器皿である。出土遺物から、13世紀後半から14世紀代の溝と思われる。

溝2(第12図・写真図版12-2)

調査地区的南側上段北側から中央付近で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ約5m以上・幅約25~30cm・深さ約10cmである。北東肩部の上端はT.P.+22.459m・北西肩部の上端はT.P.+22.437m・底部はT.P.+22.437m、南東肩部の上端はT.P.+22.464m・南西肩部の上端はT.P.+22.464m・底部はT.P.+22.370mであった。

出土遺物は、土師器皿である。出土遺物から、13世紀後半から14世紀代の溝と思われる。

溝3(第12図・写真図版13-1)

調査地区的北側下段全面で検出した。形状は、調査地区のほぼ中央に掘られた南北方向の太い溝に21条の東西方向の細い溝が直行するようなものであった。遺構埋土の状況からは、それぞれの切り合いで明確にすることはできなかった。南北方向の溝の規模は、幅約50~90cm・長さ約10.4m以上・深さ約10~20cm、東西方向の溝の規模は、長さ約2.2m・幅約20~30cm・深さ約10~20cmである。

両溝とも南端での肩部の上端はT.P.+22.100m・北端での肩部の上端はT.P.+22.200m付近で、底部はT.P.+22.000m付近であった。畠地の遺構であろうと思われる。

出土遺物は、瓦質三足釜である。出土遺物から、中世の溝と思われる。

溝4(第12図・写真図版12-2)

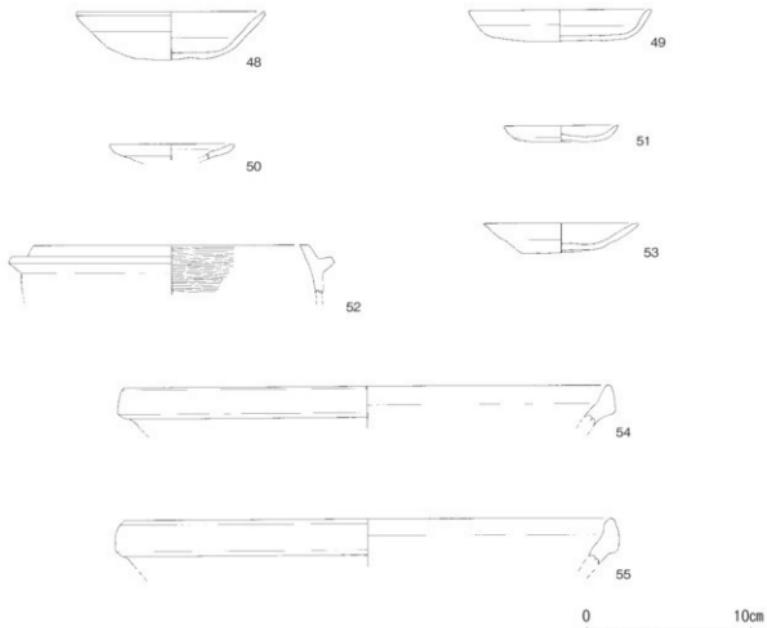
調査地区的南側上段南側付近で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ約90cm以上・幅約4cm・深さ約4cmである。中央部西側肩部の上端はT.P.+22.434m・東側肩部の上端はT.P.+22.463m・底部はT.P.+22.396mであった。

出土遺物は、溝の北端の上層から出土した土師器皿である。出土遺物から、15世紀後半から16世紀中頃の溝と思われる。

土坑1(第12図・写真図版13-2)

調査地区的南側上段北端付近で検出した。形状と規模は南北約1.6m・南北約0.7mの楕円形を呈し、深さは約16cmである。北側肩部の上端はT.P.+22.426m・南側肩部の上端はT.P.+22.378m・中央東側肩部の上端はT.P.+22.409m・中央西側肩部の上端はT.P.+22.364m・底部はT.P.+22.262mであった。

出土遺物は、土師器皿である。出土遺物から、13世紀後半から14世紀代の土坑と思われる。



第14図 出土遺物 (OM・NR06-1)

第3節 出土遺物

1. 造構出土遺物

土坑1

土師器

48 皿 口径：11.4cm(復元)。器高：2.9cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色(25Y 8/2)。胎土：密。焼成：良好。残存度：5/6。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。口縁部に若干の歪みがみられる。Ga-2 タイプ。14世紀代。(第14図-48・写真図版32-1-48)

49 皿 口径：11.2cm(復元)。器高：1.9cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を極少量、金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀代。(第14図-48・写真図版32-1-49)

溝1

土師器

50 皿 口径：7.6cm(復元)。器高：0.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：密。金雲母を極少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀代のものと思われる。(第14図-50・写真図版32-1-50)

溝2

土師器

51 皿 口径：7.0cm(復元)。器高：1.0cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土：密。金雲母を極少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀代のものと思われる。(第14図-51・写真図版32-1-51)

溝3

瓦質土器

52 羽釜 口径：16.8cm(復元)。器高：3.0cm(残存)。厚さ：0.5～0.7cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(5Y 8/1)。胎土：密。金雲母を極少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内面はヨコハケ調整、体部内外面はナデ調整を施している。鍔の直下に炭化物が付着している。中世の三足羽釜の破片と思われる。(第14図-52・写真図版32-1-52)

溝4

土師器

53 皿 口径：9.5cm。器高：1.8cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は橙色(2.5YR 6/6)。胎土：密。金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Iaタイプ。15世紀後半～16世紀中頃のものと思われる。(第14図-53・写真図版32-1-53)

2. 包含層出土遺物

須恵器

54 東播系片口鉢 口径：29.6cm(復元)。器高：2.6cm(残存)。厚さ：0.7～1.3cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。口縁部外面は降灰により灰色(N 4/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。第Ⅱ期第2段階。12世紀末～13世紀初頭。(第14図-54・写真図版32-1-54)

55 東播系片口鉢 口径：30.0cm(復元)。器高：2.9cm(残存)。厚さ：0.9～1.3cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。第Ⅱ期第2段階。12世紀末～13世紀初頭。(第14図-55・写真図版32-1-55)

(村上)

第6章 中野遺跡（NN06-1）調査の成果

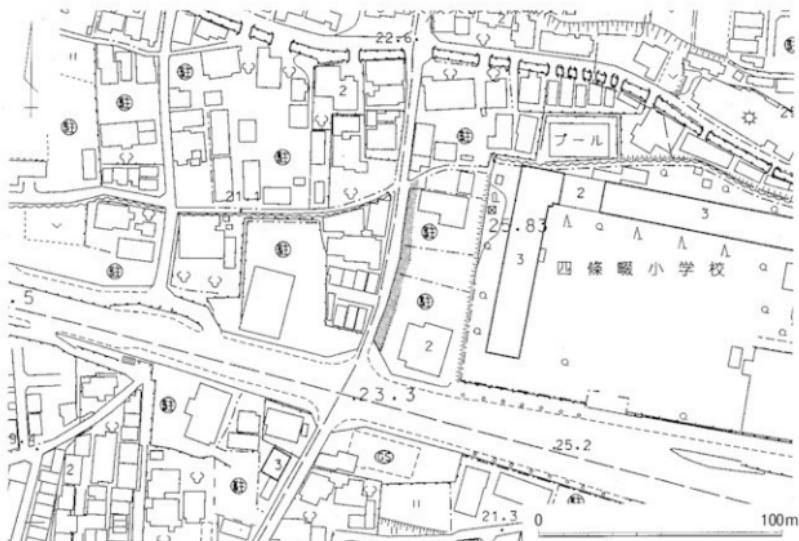
調査地区の西隣には、平行するように主要地方道枚方富田林泉佐野線が南北方向に通じており東側には店舗が隣接している。そのことから道路の安全確保と店舗への通路を確保する必要があったため、東西約64m×南北約4mの調査範囲を5か所に分割して発掘調査を実施した。

調査地区では、重機により盛土を約10~20cm掘削した段階で地山である遺構面を確認した。しかし、北端から3/4程度までの地域は埋設管や貯水槽などの工事により大きく搅乱を受けており、確認できた遺構は一部に限られた。残りの1/4の地域に関しては、搅乱を受けていたもののその範囲は少なく、奇跡的に遺構がほぼ良好な状態で残存している状況であった。機械掘削後北端から3/4程度までの地域においては可能な限り残存している遺構の検出に努めた結果、7基の土坑と1条の溝を確認した。また、調査地区の中央付近においてほぼ東西方向の石垣を確認した。この石垣に関しては、東側に所在する四條畷市立四條畷小学校の以前の正門に通じていた坂道の石垣の一部である。残りの1/4の地域においては、機械掘削後遺物包含層は存在せず、4条の溝と1基土坑を確認できる状況であった。そこでさらに詳細に検出作業を行い、遺構の掘削にあたった。（写真図版14-1・2、15-1）

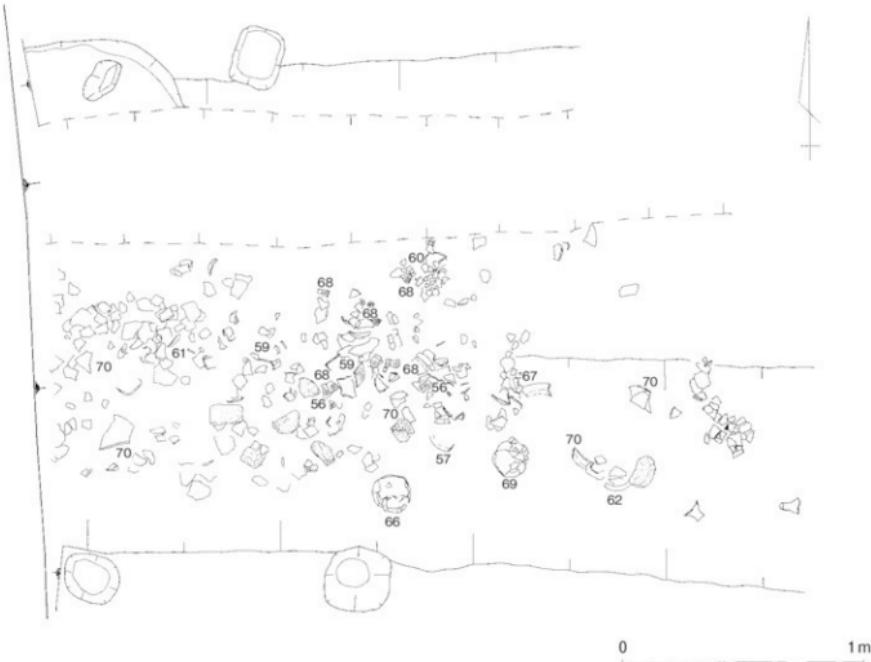
第1節 基本層序

今回の発掘調査地区については、調査前の現状は店舗の駐車場であった。調査地区では、重機により盛土を約10~20cm掘削した段階で地山である遺構面を確認した。

以下、基本層序について述べる。



第15図 調査地区位置図（NN06-1）



第17図 溝1遺物出土状況図 (NN06-1)

第I層：盛土 上面は南端でT.P.+23.200m、北端でT.P.+23.490m。厚さは約10~20cm。現代の盛土。

第II層：灰黄色系砂質土 上面はT.P.+23.000m~T.P.+23.100m。厚さは約30~48cm。溝の上層～中層の埋土。

第III層：灰色系砂質土 上面はT.P.+22.800m。厚さは約10~15cm。溝の下層の埋土。

第IV層：黄褐色粘質土 上面はT.P.+22.900m~T.P.+23.050m。地山。

次に、各土層の説明を述べるが、前述したとおりほとんどの地域で盛土下は遺物包含層がないような状況であったため、以下の土層は南端の地域の断面である。(第16図・写真図版18-2、19-2)

第1層：盛土

第7層：浅黄色砂質土(2.5Y 7/4)

第2層：灰黄色砂質土(2.5Y 7/2)

第8層：黄灰色砂質土(2.5Y 4/1)に3層混入

第3層：灰黄褐色砂質土(10YR 5/2)

第9層：暗灰色粘土(N 3/)

第4層：地山ブロック

第10層：灰色砂質土(7.5Y 5/1)

第5層：黄灰色砂質土(2.5Y 5/1)炭化物混入

第11層：黄灰色砂質土(2.5Y 4/1)

第6層：灰白色細砂(2.5Y 8/1)

第2節 遺構

遺構面は、盛土を約10~20cm掘削した段階で地山である遺構面を確認したが、北端から3/4程度までの地域は大きく搅乱を受けており、検出できた遺構は一部に限られた。残りの1/4の地域に関しては、搅乱を受けていたもののその範囲は少なかったため4条の溝と1基の土坑を検出した。以下、主な遺構について述べる。

溝1(第16図・第17図・写真図版16-2、17-1、18-1・2、19-1・2)

調査地区的南端付近で検出した。形状は東西方向に直線的で、規模は長さ約3.2m以上・幅約2.1~2.4m・深さ約48cmである。北東肩部の上端はT.P.+22.939m・南東肩部の上端はT.P.+22.995m・底部はT.P.+22.651m・北西肩部の上端はT.P.+23.100m・南西肩部の上端はT.P.+23.100m・底部はT.P.+22.620mであった。溝の中央部より北側は、南北方向の溝状に搅乱を受けている。本来の溝の断面形態は、北側肩部は緩やかに南へ向かって傾斜して溝の南寄りで底部となり立ち上がる。遺物は、特に中央部から西側に集中していた。

主な出土遺物は、須恵器壺蓋・無蓋高杯・広口壺・韓式系甕・土師器大型二重口縁壺・瓶・高杯・小型鉢・甕・小型甕・韓式系小型甕などである。出土遺物から、5世紀中頃から6世紀前半の溝と思われる。

溝2(第16図・写真図版16-2、17-1、18-2、20-1・2)

溝1の北隣で検出した。形状は東西方向に直線的で、規模は長さ約3.2m以上・幅約1.3~1.6m・深さ約36cmである。北東肩部の上端はT.P.+22.971m・南東肩部の上端はT.P.+22.991m・底部はT.P.+22.798m・北西肩部の上端はT.P.+23.070m・南西肩部の上端はT.P.+23.030m・底部はT.P.+22.680mであった。

主な出土遺物は、須恵器無蓋高杯・壺身・広口壺・土師器高杯(壺部)・小型甕などである。出土遺物から、5世紀中頃から6世紀前半の溝と思われる。

溝3(第16図・写真図版16-2、17-1、18-2)

溝2の北隣で検出した。形状は東西方向にはほぼ直線的で、北側の肩部が東端で北側へ開きぎみである。規模は長さ約3.2m以上・幅約1.3~1.8m・深さ約41cmである。北東肩部の上端はT.P.+23.009m・南東肩部の上端はT.P.+22.990m・底部はT.P.+22.836m・北西肩部の上端はT.P.+23.070m・南西肩部の上端はT.P.+23.070m・底部はT.P.+22.660mであった。

主な出土遺物は、土師器手づくね小型壺などである。

溝4(第16図・写真図版16-2、17-1、18-2)

溝3の北隣で検出した。形状は東西方向にはほぼ直線的である。北側肩部の西寄り部分は大きく搅乱を受けている。規模は長さ約3.2m以上・幅約1.5m・深さ約44cmである。北東肩部の上端はT.P.+23.035m・底部はT.P.+22.792m・南西肩部の上端はT.P.+23.070m・底部はT.P.+22.640mであった。

主な出土遺物は、須恵器壺蓋・壺身・広口壺・土師器韓式系長胴甕などである。出土遺物から、6世紀代の溝と思われる。

土坑1(第16図・写真図版15-2)

調査地区的北端で検出した。形状はほぼ円形を呈するものと思われるが、北側半分が搅乱を受けているため詳細は不明である。規模は直径約65cm・深さ約10cmである。南側肩部の上端はT.P.+23.152m・底部はT.P.+23.054mであった。

主な出土遺物は、瓦器碗などである。出土遺物から、12世紀後半の土坑と思われる。

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

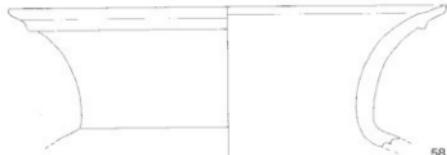
溝1

須恵器

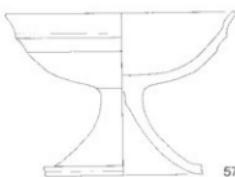
56 壺蓋 口径：13.4cm。器高：4.6cm。厚さ：0.2~0.6cm。色調：内・外面は灰色(N 4/4)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：3/4。体部外面に降灰がみられ、天井部の一部に赤色顔料(にぶい赤褐色 7.5R 4/3)が塗られている。I型式3段階(T K208型



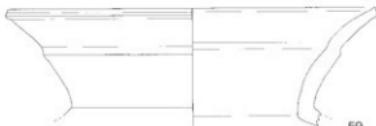
56



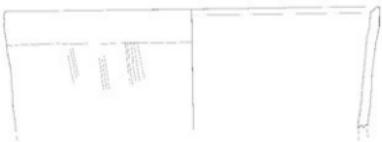
58



57



59



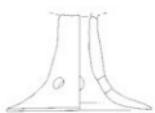
61



60



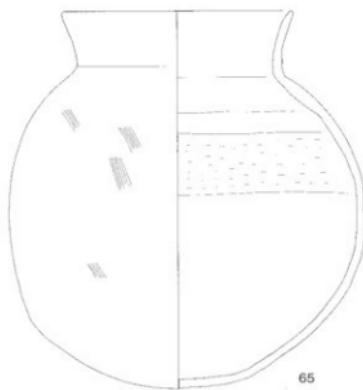
62



63



64



65



67

第18図 出土遺物 (NN06-1) (1)

式)。(第17図-56・第18図-56・写真図版32-2-56)

57 無蓋高壺 口径：14.2cm(復元)。底径：9.7cm(復元)。器高：10.0cm。厚さ：0.3~1.1cm。色調：内・断面は灰色(N 7/)、外面は灰色(N 4/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：2/3。体部外面に1条の凸線を巡らせ、壺部内面と脚部外面の全体に降灰がみられる。I型式2段階(TK216型式)。(第17図-57・第18-57・写真図版32-2-57)

58 広口壺 口径：27.0cm(復元)。器高：8.7cm(残存)。厚さ：0.3~1.1cm。色調：内・外・断面は灰白色(2.5Y 8/1)。胎土：密。直径1mm程度の砂粒を極少量含む。焼成：不良。残存度：小片。颈部外面はタテハケ後ヨコナデ調整、内面はヨコナデ調整を施している。I型式2段階(TK216型式)。(第18図-58・写真図版32-2-58)

60 無蓋高壺 口径：19.2cm(復元)。器高：4.6cm(残存)。厚さ：0.2~0.7cm。色調：内・外面は灰色(N 4/)、断面は灰白色(7.5Y 7/1)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部の直下に2条の凸線を巡らせ、その下位に波状文を施している。壺部に把手が付く高壺である。I型式3段階(TK208型式)。(第17図-60・第18図-60・写真図版32-2-60)

68 韩式系甕 器高：25.6cm(残存)。厚さ：0.5~1.0cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。体部外面は一辺約2mmの格子叩き、体部内面の上位1/3はヨコナデ調整、他はナデ調整が施されている。体部の中位に凹みがみられる。溝3の出土遺物と接合した。(第17図-68・第19図-68・写真図版33-2-68)

70 広口壺 口径：15.4cm(復元)。器高：25.0cm(残存)。厚さ：0.3~0.8cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰色(N 6/)。胎土：緻密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整、体部内面はユビオサエ後ヘラナデ調整を施している。I型式2段階(TK216型式)。(第17図-70・第19図-70・写真図版33-2-70)

土師器

59 大型二重口縁壺 口径：22.6cm(復元)。器高：7.3cm(残存)。厚さ：0.5~1.1cm。色調：内・外面はにぶい黄橙色(10YR 7/4)、断面は灰色(5Y 6/1)。胎土：密。直径1mm程度の砂粒を少量、直径1mm以下の砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。5世紀中頃。(第17図-59・第18図-59・写真図版32-2-59)

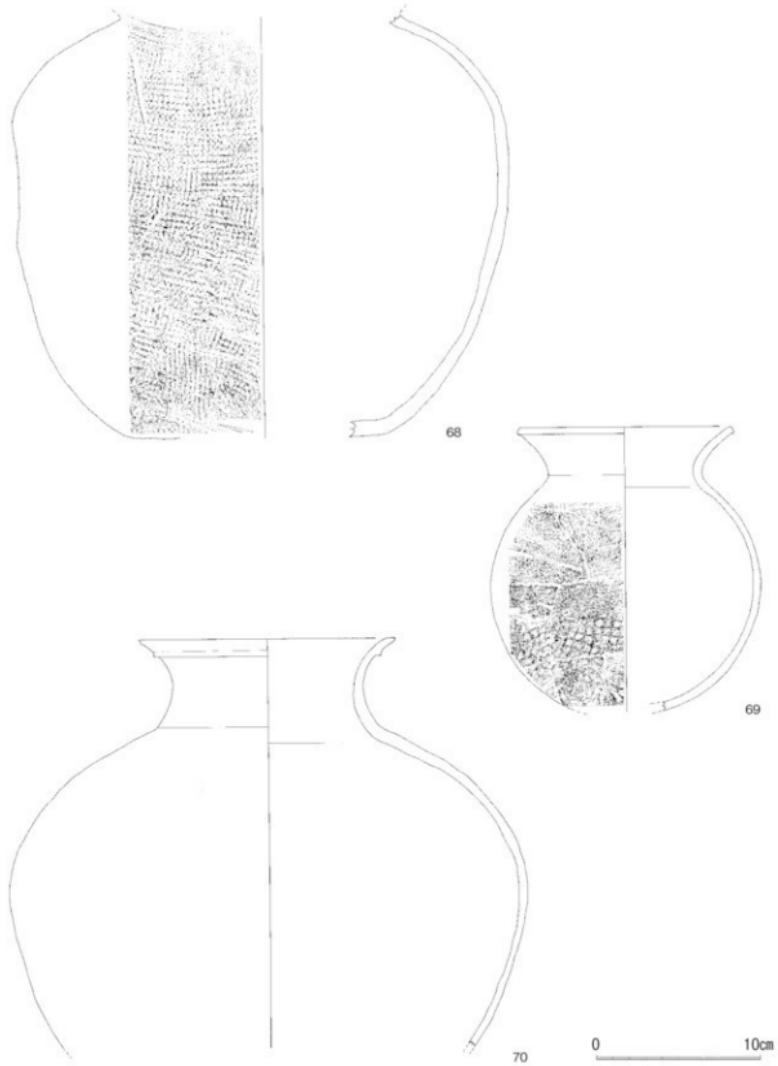
61 甕 口径：23.2cm(復元)。器高：7.5cm(残存)。厚さ：0.3~0.6cm。色調：内面は浅黄橙色(10YR 8/4)、外・断面は黄橙色(7.5YR 7/8)。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はナデ調整、体部外面はタテハケ調整を施しているが、摩耗が著しいため調整痕は不明瞭である。(第17図-61・第18図-61・写真図版32-2-61)

62 高壺 口径：13.0cm。底径：8.4cm。器高：11.2cm。厚さ：0.3~1.1cm。色調：壺部内・外面は橙色(5YR 7/8)、脚部内・外面は灰白色(10YR 8/2)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：完形。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施している。5世紀後半。(第17図-62・第18図-62・写真図版32-2-62)

63 高壺脚部 底径：9.0cm。器高：5.9cm。厚さ：0.2~0.7cm。色調：内面は黒色(7.5Y 2/1)、外・断面は橙色(7.5YR 7/6)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：7/8。体部外面はナデ調整を施している。3方向に直径8mmの円孔があけられている。5世紀中頃。(第16図-63・第18図-63・写真図版32-2-63)

64 小型鉢 口径：13.4cm(復元)。器高：5.4cm。厚さ：0.3~1.1cm。色調：内・断面は橙色(2.5YR 6/8)、外面はにぶい橙色(7.5YR 6/4)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と赤色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施している。5世紀後半。(第18図-64・写真図版32-2-64)

65 壺 口径：14.2cm。器高：23.3cm。厚さ：0.3~0.8cm。色調：内面は橙色(2.5YR 6/8)、外・断面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)。胎土：やや粗。直径1mm以下の砂粒を多量に含む。焼成：良好。残



第19図 出土遺物 (NN06-1) (2)

存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はヘラケズリ調整を施している。タテハケ調整は摩耗が著しいため調整痕は不明瞭である。体部外面の中央付近から頸部にかけて炭素が吸着しており使用痕と思われる。口縁部と胴部に垂みがみられる。6世紀前半。（第18図-65・写真図版33-1-65）

66 小型壺 口径：13.4cm。器高：15.6cm。厚さ：0.3~0.5cm。色調：内・外面は橙色(7.5YR 7/6)。胎土：やや粗。直径1mm以下の砂粒を多く、金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はナデ調整を施している。タテハケ調整は摩耗が著しいため調整痕は不明瞭である。5世紀後半。（第17図-66・第18図-66・写真図版33-1-66）

67 壺 口径：19.0cm(復元)。器高：9.1cm(残存)。厚さ：0.4~0.8cm。色調：内・外・断面は明赤褐色(5YR 5/6)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色砂粒と金雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。体部内面の上位にユビオサエ痕がみられる。体部外面は摩耗が著しいため調整痕は不明瞭。5世紀中頃。（第18図-67・写真図版33-1-67）

69 韓式系小型壺 口径：13.0cm(復元)。器高：17.3cm(残存)。厚さ：0.4~0.6cm。色調：内・外・断面はにぶい褐色(7.5YR 5/3)。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子と金雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面の上位1/3はナデ調整、他は一辺約3mmの格子叩き、体部内面はナデ調整を施している。（第19図-69・写真図版33-1-69）

溝2

須恵器

71 無蓋高壺 口径：11.2cm(復元)。底径：8.2cm。器高：9.0cm。厚さ：0.3~1.6cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：壺部は1/2、脚部は完形。体部外面に1条の凸線を這らせている。II型式1段階(MT15型式)。（第20-71・写真図版34-1-71）

72 壺身 口径：10.6cm(復元)。器高：5.1cm(残存)。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は赤灰色(2.5YR 6/1)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。I型式5段階(T K47型式)。（第16図-72・第20-72・写真図版34-1-72）

73 広口壺 口径：24.0cm(復元)。器高：7.3cm(残存)。厚さ：0.4~0.8cm。色調：内・外面は灰色(N 6/)、断面は赤灰色(2.5YR 6/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は平行叩きを施している。I型式2段階(T K216型式)。（第16図-73・第20図-73・写真図版34-1-73）

土師器

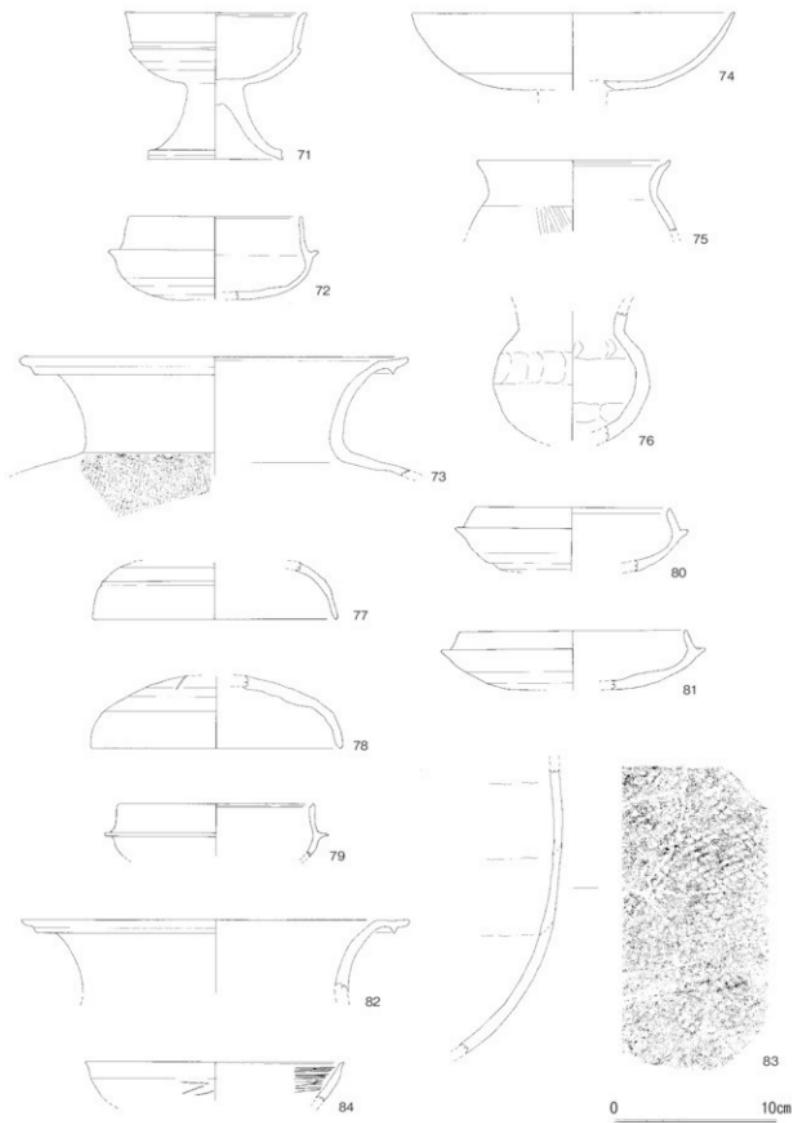
74 高环(环部) 口径：20.0cm(復元)。器高：4.7cm(残存)。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外・断面は浅黄褐色(10YR 8/4)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施している。5世紀中頃。（第16図-74・第20図-74・写真図版34-1-74）

75 小型壺 口径：11.8cm(復元)。器高：4.4cm(残存)。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外・断面は灰黄褐色(10YR 5/2)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色粒子と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はヘラケズリ調整を施している。5世紀中頃～後半。（第20図-75・写真図版34-1-75）

溝3

土師器

76 手づくり小型壺 器高：7.9cm(残存)。厚さ：0.6~0.9cm。色調：内面は褐灰色(5YR 6/1)、外・断面は橙色(5YR 7/6)。胎土：やや粗。直径1mm程度の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/3。頸部外面はヨコナデ調整、頸部内面には粘土を絞った痕跡がみられる。体部外面の中位にはユビオサエ痕がみられ、内面はナデ調整が施されている。体部外面の底部付近はナデ調整を施し、内面にはユビオサエ痕がみられる。（第20図-76・写真図版35-1-76）



第20図 出土遺物 (NN06-1) (3)

溝4

須恵器

77 壺蓋 口径：15.0cm(復元)。器高：3.5cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は灰黄色(2.5Y 7/2)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。天井部から口縁部へ向かう境の稜は鈍く、沈線による段となって痕跡をとどめている。II型式2段階(TK10号窯段階)。(第20図-77・写真図版34-2-77)

78 壺蓋 口径：15.4cm(復元)。器高：4.5cm(残存)。厚さ：0.4～0.9cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。天井部から口縁部へ向かう境は認められない。天井部にヘラ記号がみられる。II型式3段階(MT85号窯段階)。(第20図-78・写真図版34-2-78)

79 壺身 口径：12.0cm(復元)。器高：3.3cm(残存)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰赤色(7.5R 5/2)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。I型式5段階(TK47型式)。(第20図-79・写真図版34-2-79)

80 壺身 口径：12.0cm(復元)。器高：3.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内面は灰色(N 6/)、外・断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。II型式1段階(MT15型式)。(第20図-80・写真図版34-2-80)

81 壺身 口径：14.0cm(復元)。器高：3.6cm(残存)。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内・断面は灰色(N 6/)、外面は灰色(N 4/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/5。II型式4段階(TK43型式)。(第20図-81・写真図版34-2-81)

82 広口壺 口径：24.0cm(復元)。器高：4.5cm(残存)。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内面は灰白色(7.5Y 8/1)、外面は灰色(N 6/)、断面は赤灰色(2.5YR 6/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整を施している。口縁部内面には降灰がみられる。I型式2段階(TK216型式)。(第20図-82・写真図版34-2-82)

土師器

83 韓式系長胴甕 器高：17.5cm(残存)。厚さ：0.4～0.8cm。色調：内・断面は浅黄橙色(7.5YR 8/4)、外面は橙色(5YR 6/8)。胎土：密。直径1mm程度の白色砂粒と直径1mm以下の赤色粒子、金雲母を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は一辺約4mmの格子叩き、体部内面はナデ調整を施し、粘土紐痕がみられる。(第20図-83・写真図版34-2-83)

土坑1

瓦器

84 碗 口径：16.0cm(復元)。器高：2.4cm(残存)。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外・断面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。内面のヘラミガキは口縁端部まで密に施されており、外面のヘラミガキは粗い。大和型III-A古段階。12世紀後半。(第20図-84・写真図版35-1-84)

(村上)

第7章 岡山南遺跡・南山下遺跡(OM・MS07-1) 調査の成果

調査地区的東隣には、平行するように主要地方道枚方富田林泉佐野線が南北方向に通じている状況下での発掘調査であったため、現道の安全確保の点から幅約2.5m×総延長約25.5mの範囲を調査対象として実施した。また、周辺に残土置き場を確保することができなかつたため、ほぼ中央付近で2か所に分けて反転作業で調査を実施した。

調査地区的北端から約7m付近まで(北側地区)は、重機によりアスファルト・碎石・盛土と耕土・床土を約45cm掘削した段階で遺物包含層を確認し、そこから南側(南側地区)については、重機によりアスファルト・碎石・盛土と耕土を約1m掘削した段階で地表面を確認した。また、北側地区においては、機械掘削中に漆喰で固まれた水槽のようなものが3箇所確認されたため後世の搅乱によって遺構が大きく搅乱されていると思われたが、遺物包含層が一部で搅乱を受けているのみに留まっていた。南側地区については、断面観察により北側地区より旧耕土が約20cm下がっていた。これは旧耕作地が棚田状に2枚に分かれていたことを示しており、その耕作地造成の際に遺物包含層が削平されたことが判明した。機械掘削後北側地区においては、遺物包含層を人力で掘下げ遺構面の検出作業を行った。南側地区においては遺構検出に努めた。(写真図版21-1・2)

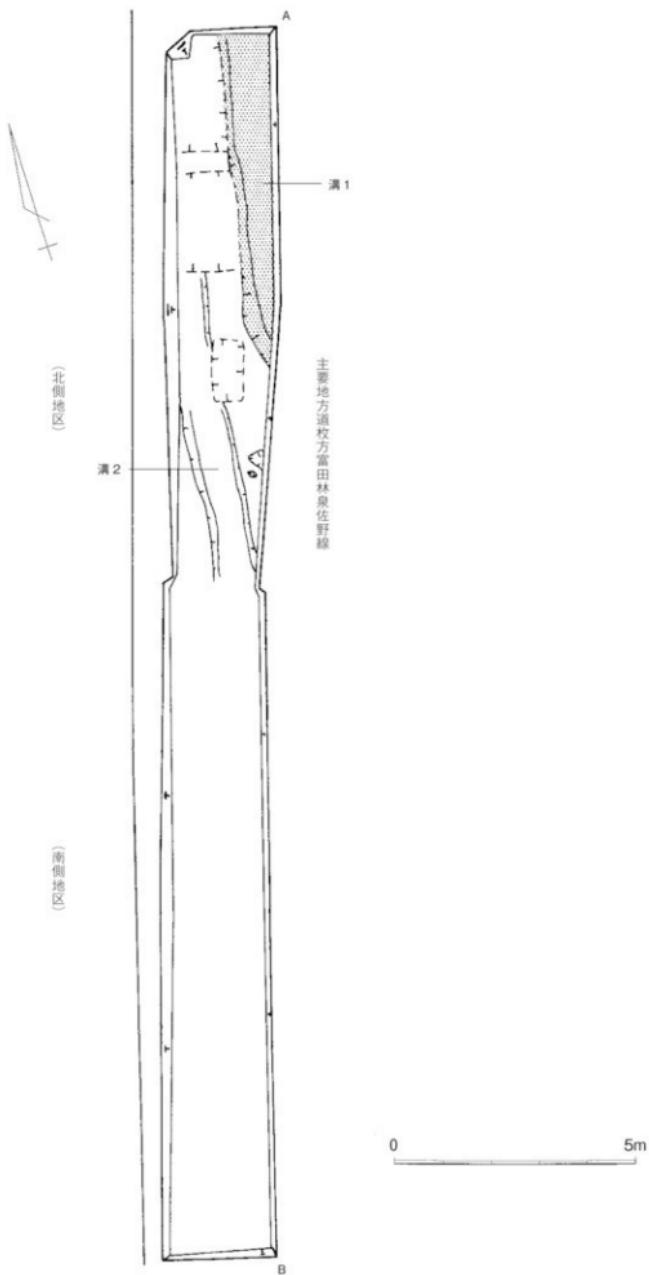
第1節 基本層序

今回の発掘調査地区については、前述したように北端から約7m付近まで(北側地区)は、重機によりアスファルト・碎石・盛土と耕土・床土を約45cm掘削した段階で遺物包含層を確認し、そこから南側(南側地区)については、重機によりアスファルト・碎石・盛土と耕土を約1m掘削した段階で地表面を確認した。南側地区については、断面観察により北側地区より旧耕土が約20cm下がっていた。これは旧耕作地が棚田状に2枚に分かれていたことを示している。(第23図、写真図版23-1・2)

以下、基本層序について述べる。

第1層：アスファルト・碎石・盛土 上面は南端でT.P.+23.260m、北端でT.P.+23.380m。厚さは約





第22図 調査地区平面図 (OM・MS07-1)

30~93cm。

第Ⅱ層：耕土 北側地区では上面はT.P.+23.070m。南側地区では上面はT.P.+22.680m。厚さは約6~26cm。旧耕土。

第Ⅲ層：床土 北側地区では上面はT.P.+23.020m。厚さは約4~6cm。旧床土。

第Ⅳ層：灰黄褐色系の砂質土 北側地区では上面はT.P.+22.900m。厚さは約45cm。

第Ⅴ層：黃灰色系の砂質土 上面はT.P.+22.500m。厚さは約28cm。溝1の埋土。

第Ⅵ層：灰色系砂質土 上面はT.P.+22.300m。厚さは約10~30cm。溝1の埋土。

第Ⅶ層：明褐色系砂質土 上面はT.P.+22.300m~22.500m。地山。

第2節 遺構

今回の調査地区では、北側地区においては機械掘削後に遺物包含層を掘り下げたところで遺構面を確認し、2条の溝と2基の土坑を検出した。南側地区においては、機械掘削後に遺構面である地山を確認し、遺構検出精査に努めたが遺構は検出しなかった。これは、元々遺構が存在しない場所であったか、旧耕作地造成の際に削平されたかのどちらかが原因であると考える。(第22図・写真図版23-2)以下、北側地区で検出した主な遺構について述べる。

溝1(第22図・写真図版22-1、23-1)

北側調査地区の北東端付近で検出した。溝のほとんどは調査地区外に広がる上に、そのほとんどは漆喰で閉まれた水槽のようなものにより擾乱を受けていた。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ約7m以上・幅約0.9m以上・深さ約46cmである。北西肩部の上端はT.P.+22.458m・底部はT.P.+22.170m、中央付近の西側肩部の上端はT.P.+22.501m・底部はT.P.+22.038mであった。

主な出土遺物は、白磁碗・瓦器碗・瓦質土器羽釜・土器師皿・平瓦などである。出土遺物から、13世紀後半~14世紀代の溝と思われる。

溝2(第22図・写真図版22-1、23-1)

溝1の西側で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ約6.5m以上・幅約1m・深さ約11cmである。北西肩部の上端はT.P.+22.399m・北東肩部の上端はT.P.+22.438m・底部はT.P.+22.328m、南西肩部の上端はT.P.+22.344m・南東肩部の上端はT.P.+22.449m・底部はT.P.+22.335mであった。遺物は出土しなかつたが、溝1と同じ時期のものと思われる。

第3節 出土遺物

1. 遺構出土遺物

溝1

磁器

85 白磁碗 底径：6.2cm(復元)。器高：1.8cm(残存)。厚さ：0.7~1.3cm。色調：内面は灰白色(7.5YR 8/2)、外面は灰白色(N 7/)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：1/2。C期。12世紀代。(第24図-85・写真図版35-2-85)

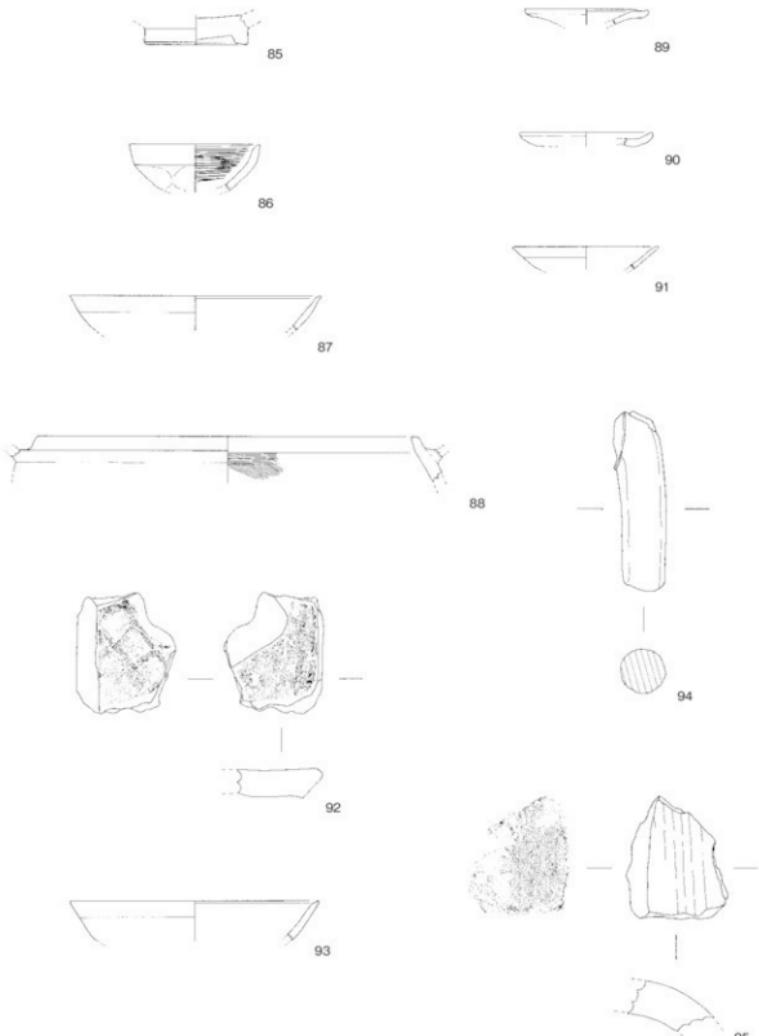
瓦器

86 小碗 口径：8.0cm(復元)。器高：2.8cm(残存)。厚さ：0.4~0.5cm。色調：内・外面は灰色(N 6/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面にはユビオサエの痕跡がみられる。内面のヘラミガキ調整は口縁端部まで密に施されている。(第24図-86・写真図版35-2-86)

87 碗 口径：15.4cm(復元)。器高：2.1cm(残存)。厚さ：0.2~0.4cm。色調：内・外・断面は灰白色(2.5Y 8/2)。胎土：密。焼成：不良。残存度：小片。焼しが不完全で、ヘラミガキも不明瞭である。大和型III-C又はIII-D段階。13世紀後半。(第24図-87・写真図版35-2-87)

瓦質土器

88 羽釜 口径：23.4cm(復元)。器高：2.8cm(残存)。厚さ：0.5~0.8cm。色調：内面は灰黄褐色(10YR 6/2)、外面は灰色(N 6/)、断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面はヨコハ



第24図 出土遺物 (OM・MS07-1)

ケ調整を施している。体部内面に炭化物が付着している。三足羽釜の破片と思われる。(第24図-88・写真図版35-2-88)

土師器

89 皿 口径：7.6cm(復元)。器高：0.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀代のものと思われる。(第24図-89・写真図版35-2-89)

90 皿 口径：8.0cm(復元)。器高：0.9cm(残存)。厚さ：0.4～0.5cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀代のものと思われる。(第24図-90・写真図版35-2-90)

91 皿 口径：11.0cm(復元)。器高：1.4cm(残存)。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外面は黄灰色(2.5Y 5/1)、断面は橙色(7.5YR 6/6)。胎土：密。直径1mm以下の砂粒を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。(第24図-91・写真図版35-2-91)

瓦

92 平瓦 長さ：7.4cm(残存)。最大幅：6.1cm(残存)。厚さ：1.5～2.0cm。色調：凹・凸・断面は灰白色(5Y 8/1)、側面は焼しにより灰色(N 4/)。胎土：やや粗。直径1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。凹面の布目痕はナデ調整により消されている。凸面は一辺約1.5cmの格子叩きを施している。他の遺物の状況から中世のものと思われる。(第24図-92・写真図版35-2-92)

2. 包含層出土遺物

黒色土器

93 B類碗 口径：15.2cm(復元)。器高：2.4cm(残存)。厚さ：0.2～0.5cm。色調：内・外面は黒色(N 2/)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。内外面ともに摩耗が著しく調整は不明瞭である。(第24図-93・写真図版35-2-93)

瓦質土器

94 三足羽釜の脚部 長さ：11.0cm(残存)。幅：3.0cm(残存)。厚さ：2.5～2.7cm。色調：内側・断面は灰白色(2.5Y 8/2)、外側は灰色(N 4/)。胎土：密。直径1mm以下の白色砂粒と金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。(第24図-94・写真図版35-2-94)

瓦

95 丸瓦 長さ：7.6cm(残存)。最大幅：6.3cm(残存)。厚さ：2.2cm。色調：凹面は灰色(N 6/)、凸面は褐灰色(5YR 5/1)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：やや粗。直径1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成：良好。凸面は長軸方向にヘラミガキ調整を施しており、炭化物が付着している。14世紀以降のものと思われる。(第24図-95・写真図版35-2-95)

(村上)

第8章 奈良井遺跡・中野遺跡 (NR・NN08-1) 調査の成果

調査地区の西隣には、平行するように主要地方道枚方富田林泉佐野線が南北方向に通じており東側に民家と店舗が隣接している。そのことから道路の安全確保と民家と店舗への通路を確保する必要があった。また、周辺に残土置き場を確保することができなかつたため、中央に店舗への進入路を挟んで、北側地区(長さ約15.7m×最大幅約5m)と南側地区(長さ約12.7m×幅約3.5m)に分割して反転作業で調査を実施した。

北側地区は、重機により盛土を約8~40cm掘削した段階で遺物包含層を確認した。南側地区は、重機により盛土を約5~40cm掘削した段階で遺物包含層を確認し、北端においては、盛土を約30cm掘削した段階で遺構面である地山を確認した。機械掘削後には、遺物包含層を人力で掘下げ遺構面の検出作業を行った。(写真図版24-1・2、26-2)

第1節 基本層序

今回の発掘調査地区については、重機により盛土を掘削した段階で遺物包含層を確認し、旧耕土は確認しなかった。北側地区においては遺構面である地山は水平ではなく、中央付近が他より約20cm高かった。南側地区では北側地区の南端より約30cm遺構面が低い状況であった。

以下、基本層序について述べる。(第27図・写真図版25-1、28-2)

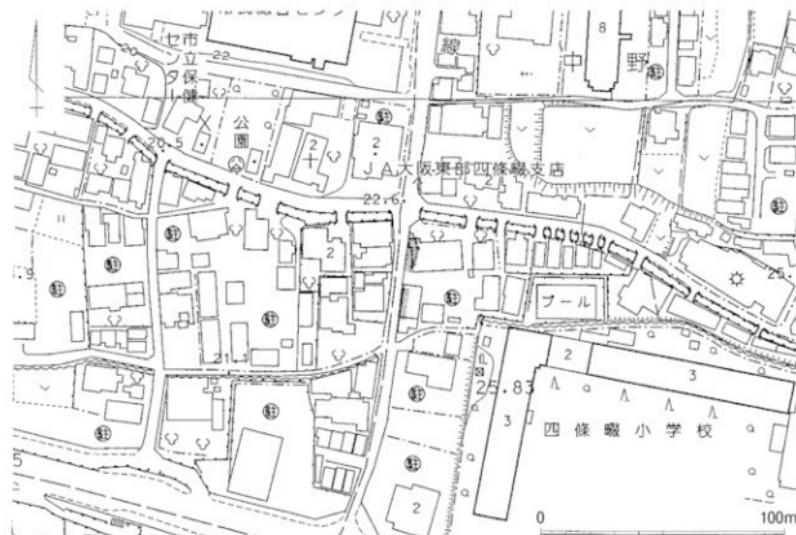
(北側地区)

第I層：盛土 上面は南端でT.P.+23.700m、北端でT.P.+23.880m。厚さは約8~40cm。

第II層：灰白色系の砂質土 中央部付近にのみ残存。上面はT.P.+23.460m~T.P.+23.620m。厚さは約15cm。中世包含層。

第III層：褐灰色系の砂質土 上面は南端でT.P.+23.580m、北端でT.P.+23.440m。厚さは約10~40cm。中世包含層。

第IV層：灰白色系の砂質土 上面は南端でT.P.+23.460m、北端でT.P.+23.020m。地山。



第25図 調査地区位置図 (NR・NN08-1)

(南側地区)

第Ⅰ層：盛土 上面は南端でT.P.+23.260m、北端でT.P.+23.350m。厚さは約5~40cm。

第Ⅱ層：黄橙色系の砂質土 中央部付近から南側にのみ残存。上面はT.P.+23.000m~T.P.+23.200m。厚さは約4~30cm。中世包含層。

第Ⅲ層：灰褐色系の砂質土 中央部付近から南側にのみ残存。上面はT.P.+22.860m~T.P.+23.000m。厚さは約10~40cm。中世包含層。

第Ⅳ層：灰色系の砂質土 北端から9.6m付近から南端部に存在。上面はT.P.+22.540m~T.P.+22.620m。厚さは約10~20cm。大溝の上層埋土。

第Ⅴ層：黒色系の粘質土 北端から7.1m付近から南端部に存在。上面はT.P.+22.370m~T.P.+22.680m。厚さは約5~20cm。大溝の中層埋土。

第Ⅵ層：灰白色系の細砂 北端から10.2m付近から南端部に存在。上面はT.P.+22.200m~T.P.+22.380m。厚さは約5~20cm。大溝の下層埋土。

第Ⅶ層：灰色系のシルト 上面は南端でT.P.+22.260m、北端でT.P.+23.040m。地山。

第2節 遺構

今回の調査地区では、北側地区においては機械掘削後に遺物包含層を掘り下げたところで遺構面を確認し、29基のPit・6基の土坑・11条の溝を検出した。南側地区においては、機械掘削後に遺構面である地山を確認し、2基のPit・1基の土坑・4条の溝・1条の大溝を検出した。(第26図・写真図版25-1・2、27-2、28-2)

以下、主な遺構について述べる。

(北側地区)

Pit4(第26図・写真図版25-1)

北側付近で検出した。形状は円形で、規模は直径30cm・深さ約18cmである。東側は別のPitに切られている。北側肩部の上端はT.P.+23.158m・底部はT.P.+22.973mであった。

主な出土遺物は、瓦器碗などである。出土遺物から、13世紀初頭のPitと思われる。

Pit6(第26図・写真図版25-1)

Pit 4の南側で検出した。形状は円形で、規模は直径40cm・深さ約21cmである。東側肩部の上端はT.P.+23.168m・西側肩部の上端はT.P.+23.158m・底部はT.P.+22.948mであった。溝6によって切られている。

主な出土遺物は、瓦器碗・土師器皿などである。出土遺物から、12世紀後半~13世紀初頭のPitと思われる。

Pit12(第26図・写真図版25-1)

中央付近で検出した。形状は円形で、規模は直径30cm・深さ約13cmである。北側肩部の上端はT.P.+23.393m・底部はT.P.+23.263mであった。溝5が埋まった段階で掘られたものである。

主な出土遺物は、瓦器碗などである。出土遺物から、13世紀初頭のPitと思われる。

Pit16(第26図・写真図版25-1)

中央付近で検出した。形状は円形で、規模は直径40cm・深さ約46cmである。東側肩部の上端はT.P.+23.228m・西側肩部の上端はT.P.+23.268m・底部はT.P.+22.813mであった。溝6が埋まった段階で掘られたものである。

主な出土遺物は、瓦器碗などである。出土遺物から、13世紀初頭のPitと思われる。

Pit19(第26図・写真図版25-1)

南側付近で検出した。形状は円形で、規模は直径35cm・深さ約39cmである。東側肩部の上端はT.P.+23.418m・西側肩部の上端はT.P.+23.363m・底部はT.P.+23.033mであった。溝7が埋まった段階で掘られたものである。

主な出土遺物は、土師器皿などである。出土遺物から、13世紀後半のPitと思われる。

土坑4(第26図・写真図版25-1)

南側付近で検出した。形状は隅丸方形で、規模は一辺40cm・深さ約27cmである。北側肩部の上端は

T.P.+23.423m・西側肩部の上端はT.P.+23.358m・底部はT.P.+23.158mであった。

主な出土遺物は、瓦器碗などである。出土遺物から、12世紀後半の土坑と思われる。

土坑5(第26図・写真図版26-1)

南端で検出した。形状は六角形に近い円形で、規模は直径2.1m・深さ約55cmである。東側肩部の上端はT.P.+23.248m・下端はT.P.+22.778m・西側肩部の上端はT.P.+23.058m・下端はT.P.+22.798m・底部はT.P.+22.703mであった。

主な出土遺物は、瓦器碗・土師器皿・黒色土器A類碗などである。出土遺物から、11世紀末~12世紀前半の土坑と思われる。

土坑6(第26図・写真図版26-1)

南端で検出した。形状は楕円形を呈していると思われるが、大半部分が調査地区外である。規模は長さ2.3m・幅60cm以上・深さ約14cmである。東側肩部の上端はT.P.+23.248m・下端はT.P.+23.103m・西側肩部の上端はT.P.+23.163m・下端はT.P.+23.083m・底部はT.P.+23.108mであった。

主な出土遺物は、土師器皿などである。出土遺物から、13世紀後半~14世紀初頭の土坑と思われる。

溝3(第26図・写真図版25-1)

北端で検出した。形状は東西方向に直線的で、規模は長さ約2.3m以上・幅約50cm・深さ約6cmである。北東肩部の上端はT.P.+23.108m・南東肩部の上端はT.P.+23.138m・底部はT.P.+23.078mであった。

主な出土遺物は、白磁碗などである。出土遺物から、12世紀代の溝と思われる。

溝5(第26図・写真図版25-1)

中央付近で検出した。形状は東西方向に直線的で、規模は長さ約4.2m以上・幅約1m・深さ約12cmである。北東肩部の上端はT.P.+23.418m・南東側肩部の上端はT.P.+23.428m・底部はT.P.+23.373m・北西肩部の上端はT.P.+23.438m・南西肩部の上端はT.P.+23.433m・底部はT.P.+23.323mであった。この溝が埋まつた段階で、新たな造構が掘られている。

主な出土遺物は、瓦器皿などである。造構の切り合いから、13世紀初頭以前の溝と思われる。

溝6(第26図・写真図版25-1)

溝5の南側で検出した。形状は東西方向に直線的で、規模は長さ約4.6m以上・幅約80cm・深さ約22cmである。北西肩部の上端はT.P.+23.413m・南西肩部の上端はT.P.+23.428m・底部はT.P.+23.138m・中央付近の北側肩部の上端はT.P.+23.458m・南側肩部の上端はT.P.+23.418m・底部はT.P.+23.238mであった。この溝はPit 6が埋まつた段階で掘られている。

主な出土遺物は、土師器皿などである。出土遺物から、13世紀末の溝と思われる。

溝9(第26図・写真図版25-1・2)

溝6の南側で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ約2.1m・幅約70cm・深さ約16cmである。北東肩部の上端はT.P.+23.428m・北西肩部の上端はT.P.+23.413m・底部はT.P.+23.268mであった。この溝は溝6などに切られている。

主な出土遺物は、土師器皿・瓦器碗などである。出土遺物から、13世紀中頃~13世紀末の溝と思われる。

溝11(第26図・写真図版25-1)

溝9の西側で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ約1.6m・幅約50cm・深さ約15cmである。南端肩部の上端はT.P.+23.413m・底部はT.P.+23.268mであった。この溝は溝6などに切られている。

主な出土遺物は、瓦器碗などである。出土遺物から、13世紀中頃の溝と思われる。

溝12(第26図・写真図版25-1)

溝11の西側で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ50m・幅約35cm・深さ約18cmである。東側肩部の上端はT.P.+23.418m・西側肩部の上端はT.P.+23.423m・底部はT.P.+23.248mであった。この溝は溝6などに切られている。

主な出土遺物は、瓦器皿などである。造構の切り合いから、13世紀中頃~13世紀末の溝と思われる。

(南側地区)

Pit 1 (第26図・写真図版27-2)

北側付近で検出した。形状は楕円形で、規模は長さ55cm・幅30cm・深さ約18cmである。東側肩部の上端はT.P.+22.993m・西側肩部の上端はT.P.+22.978m・底部はT.P.+22.818mであった。

主な出土遺物は、須恵器环身・土鍤などである。出土遺物から、6世紀後半のPitと思われる。

土坑1 (第26図・写真図版27-2)

中央付近の西端で検出した。形状は円形を呈していると思われるが、大半部分は調査地区外である。規模は直径65cm・深さ約20cmである。西側肩部の上端はT.P.+22.968m・底部はT.P.+22.773mであった。

主な出土遺物は、土師器碗などである。出土遺物から、6世紀前半の土坑と思われる。

溝1 (第26図・写真図版27-2、28-1)

中央付近で検出した。形状は南北方向に直線的で、規模は長さ25m以上・幅約50cm・深さ約18cmである。北東肩部の上端はT.P.+22.903m・南東肩部の上端はT.P.+22.793m・底部はT.P.+22.753m・北西肩部の上端はT.P.+22.833m・南西肩部の上端はT.P.+22.758m・底部はT.P.+22.653mであった。

主な出土遺物は、須恵器長頸壺である。5世紀前半の溝と思われる。

大溝 (第26図・写真図版27-2、28-2)

中央付近から南端部分で検出した。形状は南北方向に直線的と思われるが、大半部分は調査地区外である。規模は長さ3.6m以上・幅3.5m以上・深さ約93cmである。東側肩部の上端はT.P.+22.763m・中央肩部の上端はT.P.+22.653m・西側肩部の上端はT.P.+22.543m・東側底部はT.P.+21.853m・西側底部はT.P.+21.833mであった。今回検出した北側の肩部は、緩やかに南へ向かって傾斜しながら底部へ向かうが、その中間地点の東側はT.P.+22.238m・西側はT.P.+22.343mであった。

主な出土遺物は、須恵器环身・広口壺・無蓋高杯(脚部)・高杯または环蓋・土師器高杯・小型甕・韓式系平底鉢である。5世紀前半から6世紀後半まで存続した大溝と思われる。

第3節 出土遺物

1. 造構出土遺物

北側地区

Pit 4

瓦器

96 瓶 口径：14.4cm(復元)。底径：5.2cm(復元)。器高：4.8cm。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外面は灰色(N 6/)、断面は灰白色(N 8/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部外面はヨコナデ調整後若干粗いヘラミガキ調整を施し、体部外面は未調整である。体部内面は若干粗いヘラミガキ調整を施し、見込部には連結輪状文と思われる暗文を施している。高台の断面は三角形を呈する。大和型III-B。13世紀初頭。(第28図-96・写真図版36-1-96)

Pit 6

瓦器

97 瓶 口径：12.8cm(復元)。器高：3.7cm(残存)。厚さ：0.2~0.5cm。色調：内・外面は灰色(N 6/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整後体部外面に至る粗いヘラミガキ調整を施している。体部内面にはハケメ痕が残り、粗いヘラミガキ調整を施している。大和型III-A古段階。12世紀後半。(第28図-97・写真図版36-1-97)

土師器

98 皿 口径：8.0cm(復元)。器高：1.6cm。厚さ：0.3~0.5cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)。胎土：密。金雲母を極少量含む。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀初頭。(第28図-98・写真図版36-2-98)

Pit12

瓦器

99 碗 口径：15.0cm(復元)。器高：3.8cm(残存)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 4/)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整後粗いヘラミガキ調整を施している。体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。大和型III-B段階。13世紀初頭のものと思われる。(第28図-99・写真図版36-1-99)

Pit16

瓦器

100 碗 口径：15.0cm(復元)。器高：4.0cm(残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 4/)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整後粗いヘラミガキ調整を施しているが、体部外面は摩耗が著しいためヘラミガキ調整は不明瞭である。体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。大和型III-B段階。13世紀初頭のものと思われる。(第28図-100・写真図版36-1-100)

Pit19

土師器

101 皿 口径：8.6cm(復元)。器高：1.0cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/4)。胎土：密。金雲母をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半のものと思われる。(第28図-101・写真図版36-2-101)

土坑4

瓦器

102 碗(高台部) 底径：4.6cm。器高：0.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。見込部には同心円状の暗文を施している。大和型III-A古段階。12世紀後半のものと思われる。(第28図-102・写真図版36-1-102)

土坑5

瓦器

103 碗 底径：6.0cm(復元)。器高：5.5cm(残存)。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/3。体部内外面のヘラミガキ調整は密で、外面は高台付近まで施している。見込部にジグザグ状を方向を変えて重ね、斜格子状の暗文を施している。高台の断面は台形を呈する。大和型I-C。11世紀末。(第28図-103・写真図版36-1-103)

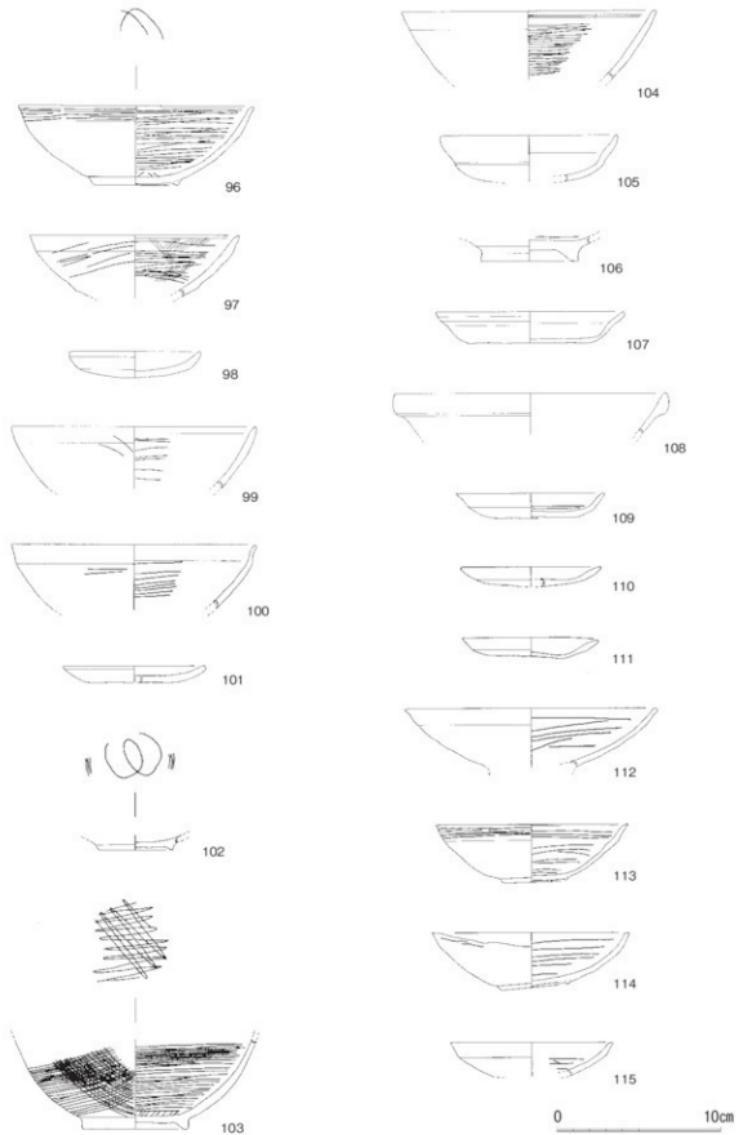
黒色土器

104 碗 口径：15.6cm(復元)。器高：4.2cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は橙色(2.5YR 6/6)。胎土：やや粗。直径1mm以下の石英を多く含む。焼成：不良。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整を施している。体部外面は摩耗が著しいためヘラミガキ調整は不明瞭である。体部内面はヘラミガキ調整を施している。外面の9割と内面の一部が黒変していることからB類と思われる。畿内IV系。10世紀中頃のものと思われる。(第28図-104・写真図版36-2-104)

106 A類碗(高台部) 底径：6.0cm。器高：1.5cm(残存)。厚さ：0.4～1.0cm。色調：内面は暗灰色(N 3/)、外面は橙色(2.5YR 6/8)、断面は灰白色(10YR 8/2)。胎土：密。焼成：良好。残存度：底部のみ完形。見込部付近までヘラミガキ調整を施し、暗文はない。畿内III系。10世紀中頃～後半のものと思われる。(第28図-106・写真図版36-2-106)

土師器

105 皿 口径：10.8cm(復元)。器高：2.8cm(残存)。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(2.5YR 8/4)。胎土：密。金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部内外面は2度にわたりヨコナデ調整を施し、端部は強いヨコナデ調整によりつまみ上げたようになり若干内傾する。体部内外面はナデ調整を施している。Abタイプ。12世紀前半のものと思われる。(第28図



第28図 出土遺物 (NR・NN08-1) (北側地区)

土坑6

土師器

107 壺 口径：11.6cm(復元)。器高：1.9cm。厚さ：0.2～0.3cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/2)。胎土：密。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。口縁部の一部が大きく歪んでいる。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀初頭のものと思われる。(第28図-107・写真図版36-2-107)

溝3

磁器

108 白磁碗 口径：16.6cm(復元)。器高：2.5cm(残存)。厚さ：0.3～0.7cm。色調：内・外面は灰白色(5Y 7/1)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：緻密。焼成：良好。残存度：小片。IV 1a。C 期。12世紀代。(第28図-108・写真図版36-2-108)

溝5

瓦器

109 壺 口径：9.1cm(復元)。器高：2.0cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/2。底部内面にジグザグ状の暗文を施している。Pit10から出土したものと接合。(第28図-109・写真図版36-1-109)

溝6

土師器

110 壺 口径：8.6cm(復元)。器高：1.2cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(7.5YR 8/3)。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/3。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀末のものと思われる。(第28図-110・写真図版36-2-110)

溝9

瓦器

111 壺 口径：8.3cm。器高：1.3cm。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は浅黄橙色(7.5YR 8/3)。胎土：密。焼成：良好。残存度：完形。口縁部外面は強くヨコナデ調整を施しているが、端部の面取りはない。体部内面はナデ調整を施している。Jbタイプ。13世紀後半～14世紀初頭のものと思われる。(第26図-111・第28図-111・写真図版36-2-111)

瓦器

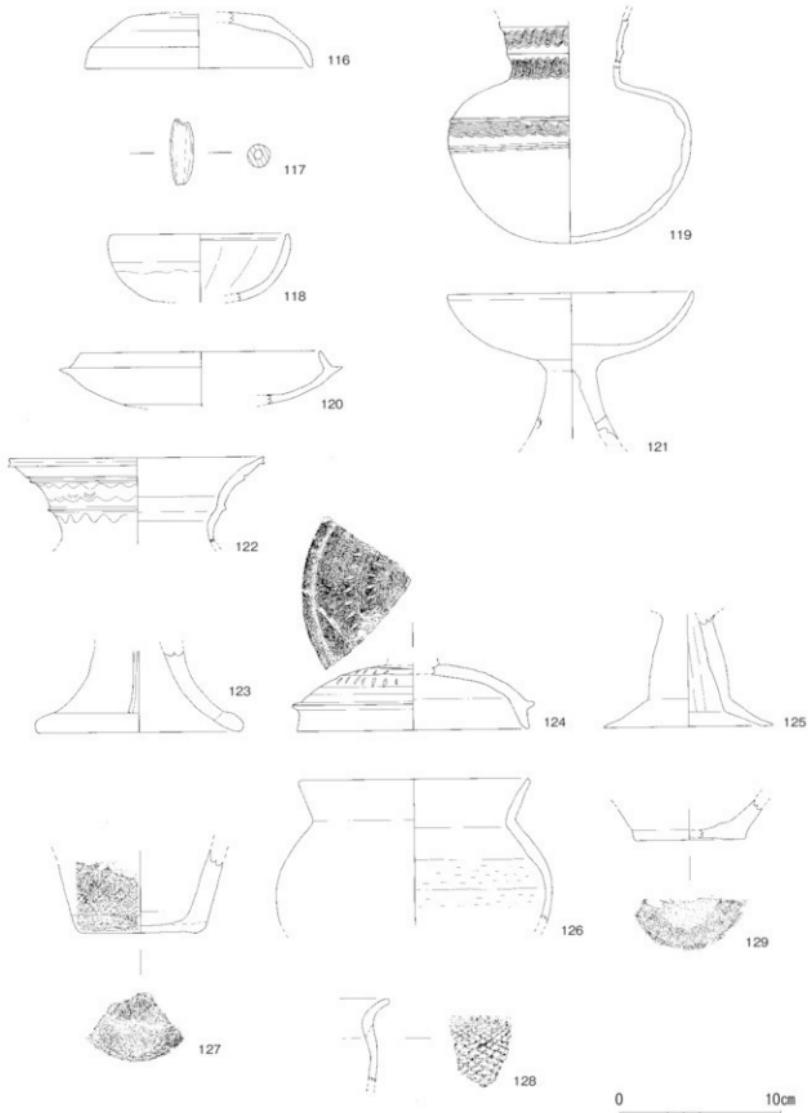
112 碗 口径：15.4cm(復元)。器高：3.6cm(残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(7.5Y 8/1)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面はヨコナデ調整を施し、体部外面は未調整。体部内面のヘラミガキ調整は幅約2mmを測り、太くて粗い。和泉型IV-2段階。13世紀中頃。(第28図-112・写真図版36-1-112)

溝11

瓦器

113 碗 口径：11.8cm。器高：3.6cm。厚さ：0.1～0.3cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：1/2。口縁部外面はヨコナデ調整後ヘラミガキ調整を施し、体部外面は未調整。体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。見込部には同心円状の暗文を施している。口縁部の一部が歪んでいる。大和型III-C。13世紀中頃。(第26図-113・第28図-113・写真図版36-1-113)

114 碗 口径：12.1cm。器高：3.5cm。厚さ：0.3～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：4/5。口縁部外面はヨコナデ調整後ヘラミガキ調整を施し、体部外面は未調整。体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。見込部には同心円状の暗文を施している。口縁部の一部が大きく歪んでいる。大和型III-C。13世紀中頃。(第26図-114・第28図-114・写真図版36-1-114)



第29図 出土遺物 (NR・NN08-1) (南側地区)

溝12

瓦器

115 壺 口径：10.0cm(復元)。器高：2.0cm(残存)。厚さ：0.2～0.4cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部内面は粗いヘラミガキ調整を施している。(第28図-115・写真図版36-1-115)

南側地区

Pit 1

須恵器

116 坯蓋 口径：14.0cm(復元)。器高：3.4cm(残存)。厚さ：0.3～0.9cm。色調：内・外・断面は灰白色(N 7/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。天井部から口縁部へ向かう境の稜はない。II型式5段階(T K209型式)。(第29図-116・写真図版37-1-116)

土製品

117 錘 長さ：4.1cm。最大幅：1.4cm。厚さ：0.3～0.5cm。色調：橙色(7.5YR 7/6)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：完形。上端の孔径は0.6cm、下端の孔径は0.4cm。(第29図-117・写真図版37-1-117)

土坑1

土師器

118 碗 口径：11.0cm(復元)。器高：4.2cm(残存)。厚さ：0.3～0.5cm。色調：内・外・断面はにぶい橙色(7.5YR 7/4)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はナデ調整、内面はヘラケズリ調整を施している。体部外面には粘土細痕がみられる。6世紀前半のものと思われる。(第29図-118・写真図版37-1-118)

溝1

須恵器

119 長頸壺 器高：13.9cm(残存)。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外面は灰色(N 4/)、断面は灰赤色(2.5YR 5/2)。胎土：緻密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：口縁部のみ欠損。頸部外面に2条の断面三角形の凸線を巡らせ、それぞれその下位に波状文を施している。体部外面中央には沈線を施することで形成された2条の断面台形の低い凸線を巡らせ、その間に波状文を施している。体部外面の下半部はヘラケズリ調整後ナデ調整を施している。I型式1段階後期(T K73型式)。(第26図-119・第29図-119・写真図版37-1-119)

大溝

須恵器

120 坯身 口径：14.8cm(復元)。器高：3.3cm(残存)。厚さ：0.3～0.6cm。色調：内・外・断面は灰色(N 6/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。II型式5段階(T K209型式)。(第29図-120・写真図版37-2-120)

122 広口壺 口径：15.8cm(復元)。器高：5.3cm(残存)。厚さ：0.2～0.7cm。色調：内・外面は灰色(N 5/)、断面は灰赤色(10YR 4/2)。胎土：緻密。直径1mm以下の白色粒子を多く含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部外面の下位と頸部外面の中位に1条の断面三角形の凸線を巡らせ、それぞれその下位に波状文を施している。ただし、その施工は粗雑である。口縁端部は上下に短く伸ばし、断面三角形を呈している。I型式3段階(T K208型式)。(第29図-122・写真図版37-2-122)

123 無蓋高坏(脚部) 底径：12.6cm(復元)。器高：5.0cm(残存)。厚さ：0.8～1.1cm。色調：内・外・断面は灰色(N 5/)。胎土：密。直径1mm以下の黒色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。脚部に台形の透かしが開けられている。体部外面に降灰がみられる。II型式5段階(T K209型式)。(第29図-123・写真図版37-2-123)

124 高坏または坏蓋 口径：14.4cm(復元)。器高：4.1cm(残存)。厚さ：0.3～0.8cm。色調：内・

断面は灰白色(N 7/)、外面は灰色(N 5/)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：1/5。天井部の中央につまみが付く器形で、天井部は若干平らである。天井部から若干下がったところに1条の凸線を巡らせ、その上位にカキメ調整と刺突文、下位に刺突文を施している。I型式1段階前期(T G232出土例)。(第26図-124・第29図-124・写真図版37-2-124)

土師器

121 高坏 口径：15.2cm(復元)。器高：9.0cm(残存)。厚さ：0.2~1.6cm。色調：内・外・断面は橙色(5YR 7/8)。胎土：密。直径1mm以下の赤色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：1/4。口縁部内外面はヨコナデ調整、他はナデ調整を施している。口縁端部をヨコナデ調整によりつまみ上げている。脚部には円孔が開けられている。5世紀中頃。(第29図-121・写真図版37-2-121)

125 高坏(脚部) 底径：10.4cm。器高：6.9cm(残存)。厚さ：0.3~1.0cm。色調：内・外・断面は浅黄橙色(10YR 8/3)、断面は黒色(N 2/)。胎土：密。直径1mm以下の赤色粒子と金雲母を少量含む。焼成：やや不良。残存度：9/10。体部外面はナデ調整、据部内外面はヨコナデ調整を施している。脚部内面には粘土を絞った痕跡がみられる。5世紀前半～中頃。(第29図-125・写真図版37-2-121)

126 小型甕 口径：14.0cm(復元)。器高：9.0cm(残存)。厚さ：0.3~0.7cm。色調：内・外・断面は褐灰色(7.5YR 4/1)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子と金雲母を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面は摩耗が著しいため調整痕は不明瞭、内面はヘラケズリ調整とナデ調整を施している。5世紀後半のものと思われる。(第29図-126・写真図版37-2-126)

127 韩式系平底鉢(底部) 底径：7.0cm(復元)。器高：5.1cm(残存)。厚さ：0.4~1.3cm。色調：内・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/2)、外面は橙色(2.5YR 6/6)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は一辺2mm程度の格子叩きを施した後下端部にヘラケズリ調整、体部内面はナデ調整を施している。底部外面には顯著な痕跡は見られない。5世紀中頃のものと思われる。(第29図-127・写真図版37-2-127)

128 韩式系平底鉢 器高：5.2cm(残存)。厚さ：0.4~0.7cm。色調：内面はにぶい黄橙色(10YR 7/2)、外面は灰黄褐色(10YR 6/2)、断面は浅黄橙色(10YR 8/4)。胎土：密。直径1mm以下の白色粒子を少量含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面は一辺2mm程度の格子叩きを施している。体部内面には炭化物が付着している。(第29図-128・写真図版37-2-128)

129 韩式系平底鉢(底部) 底径：6.9cm(復元)。器高：2.5cm(残存)。厚さ：0.4~1.4cm。色調：内・外・断面はにぶい黄橙色(10YR 7/2)。胎土：やや粗。直径1mm以下の白色粒子をやや多く含む。焼成：良好。残存度：小片。体部外面はヘラケズリ調整後ナデ調整、体部内面はヘラケズリ調整を施している。底部外面中央部は円形に窪んだ痕跡が見られる。(第29図-129・写真図版37-2-129)

(村上)

第9章 発掘調査のまとめ

第1節 各調査のまとめ

今回報告した6次にわたる調査では、道路の拡幅部分の調査であるという性質上、細長いトレンチ状の調査区による、複数の遺跡にまたがった調査であった。そこで、ここではそれぞれの調査ごとに周辺での調査との関連も含めたまとめを試みることとする。

奈良井遺跡（NR04-1）

この調査で検出したのは、東西方向の大溝1本のみであった。大溝から出土した遺物は、一部飛鳥時代以降の遺物も含まれているが、大半が古墳時代中期から後期にかけてのものであった。この大溝は古墳時代中期から後期にかけて機能し、その後埋没していったものと考えられる。大溝出土遺物の中に1点含まれていた瓦片については、奈良井遺跡の東方、大溝の上流側に位置する白鳳期寺院の正法寺跡との関連が考えられる。

この調査地周辺では、西方50m程の位置での1990年の調査で、古墳時代中～後期の東西方向の大溝が確認されている（野島1991）。この大溝からは多量の土器や木製品・種子などが出土した。土器の器種としては須恵器壺・壺・高杯、土師器高杯・壺・甕、韓式系土器、製塙土器などがあった。また、2007年には今回の調査地のすぐ西隣りで民間開発による擁壁築造に伴う調査を実施しており、開発敷地の西端でやはり東西方向の古墳時代の大溝を確認している。この際は、調査後の工事は大溝を破壊するほどの掘削深度ではなかったため、上面検出に留め、遺構は埋没保存している。さらに、2009年に今回の調査地のすぐ東隣でコンビニエンスストア建設に伴い行った確認調査でも、敷地の南西端付近で東西方向の溝の南端肩部を確認している。これらの溝は、方角や位置関係から見ても、出土遺物から見ても、一連の同一遺構である可能性が高いと考えられる。すなわち、今回検出した大溝は、少なくとも延長100m近くにわたり、20m以上の幅を保ちながら東西に流れる大溝である可能性が高い。この大溝より北側では、岡山南遺跡・南山下遺跡の古墳時代集落が広がっており、一方南側は100m程の位置に奈良井遺跡の一辺約40mある古墳時代祭祀場が存在する。この大溝は、集落域と祭祀域とを隔絶する大溝であった可能性があるだろう。これらの遺跡で検出された遺構は、全てを合わせて一連で考え、古墳時代の景観復元を行うべきものといえる。

奈良井遺跡（NR06-1）

この調査では、肩を検出した遺構としては細い溝等があるのみである。しかし、調査地区内は後世の擾乱が多く、肩を検出できなかった遺構もあった。調査地区的北端付近では大溝の埋土と思われる土層を確認している。この大溝は、その位置関係から1979年（野島1980b）・2000年（野島・村上2000）・2011年（野島・村上・實盛2012）に確認した、古墳時代の馬関係の祭祀場を囲う溝と一連のものと考えられる。既往の調査ではこの祭祀場上に溝（野島1980b）や柱（野島・村上・實盛2012）があつたことがわかっており、今回検出した溝や土坑も祭祀場に伴う遺構である可能性がある。

大溝の出土遺物を見ると、土師器や須恵器のほかにミニチュア土製品が含まれている。このようなミニチュア土製品は、1979年、2000年、2011年いずれの調査でも、この大溝と一連のものである祭祀場を囲う溝からも出土している（野島1980b、野島・村上2000、野島・村上・實盛2012）。このような祭祀用と考えられる遺物が出土していることからも、この大溝は既往の調査で検出されている祭祀場を囲う溝と一連のものであるといえるだろう。

岡山南遺跡・奈良井遺跡（OM・NR06-1）

この調査で検出できたのは、鎌倉時代～室町時代の集落跡であった。検出した遺構の中でも溝3は特異な形状をしており、畑地遺構である可能性が高い。土坑1からは鎌倉時代後半頃にまとまる時期の完形の遺物の出土があり、形状や遺物の出土状況からは中世墓の可能性も考えられるが、確定なことは言えないのが現状である。

調査地区的北西約30mの場所では、遺跡名は南山下遺跡と異なるが、2001年に共同住宅建設に伴う調査で平安時代後期～中世の集落跡を検出し、中国製青磁や黒色土器、土師質土器、瓦質土器、瓦等が出土している（村上2001b）。また、調査地の北西約50mの箇所では1995年のレジオン四條畷マン

ション建設に伴う調査で、鎌倉時代の集落が検出されている(野島・村上2001)。今回の調査で検出できた集落は、その距離や出土遺物から見てこれらの調査で検出した集落と一連のものである可能性があるだろう。

ただし、調査地区の東側では、およそ30~50m離れたいくつかの地点で確認調査を行っているが、集落の広がりは確認されなかった。今回の調査地区は一連の中世集落のほぼ東南限に近い部分に当たるものと考えられる。今回の調査では調査地区的南側で畑地状の遺構を確認している。中世集落において畠地は集落の縁辺部に作られることも多く、このことからも今回の調査地区が集落の縁辺部に当たっている可能性は高いものとみてよいであろう。

中野遺跡（NN06-1）

この調査で検出したのは、主に古墳時代の遺構であった。特に調査地区的南側には溝1~4の4本の溝が東西に走っており、これらの溝からは多量の遺物が出土した。溝1・2は古墳時代中期頃から後半に存続時期の中心があり、その後埋没している。一方溝4は古墳時代後期前半から後半を中心とする時期のものであり、時期が若干異なる。このように時期が異なりながらも同じような位置に同じ方向の溝が相次いで掘られているのは、この位置に東西方向の溝を作ることに何らかの意味があったからであろう。

こうした目線で周辺の調査成果に目をやると、これらの溝から南に約10m離れた位置では、1987~88年の調査で古墳時代中期後半の井戸が検出されており、板に乗せられた状態の馬頭骨が出土している(西尾1988)。また、溝から南西に約40m離れた位置では、1994年の調査で古墳時代後期前半の落込から滑石製子持勾玉が出土している(村上2000)。また、南に約50m離れた位置では、1993年の調査で横穴式石室を検出している(村上2006)。一方で、北側では約70m離れた位置で2008年に行った調査(NR・NN08-1)で東西方向の大溝等を検出しているが、それ以外では約150m離れた奈良井遺跡の祭祀場遺構まで古墳時代の遺構は現在のところ存在が希薄で、中世遺構が中心である。このことから、今回検出した古墳時代に属する4本の溝は、生活域とそうでない区域とを区画する溝の可能性が考えられるだろう。

調査地区的北端付近で検出した土坑1からは中世の瓦器碗が出土している。この土坑や周辺の遺構については、位置関係から見れば2008年の調査(NR・NN08-1)で検出している中世集落と一連のものと考えてよいであろう。

岡山南遺跡・南山下遺跡（OM・MS07-1）

この調査で検出できたのは、中世の集落跡の一部であった。なかでも溝1は比較的のしっかりとした遺構であった。調査地区的南側では遺構が検出できなかったが、これはこの部分で旧耕作地が一段低くなっていることによるもので、旧耕作地の造成の際に遺構面が削平されてしまっている可能性があるものとみられる。南側の2006年度の調査成果(OM・NR06-1)を踏まえると、南側にも中世集落が広がっていた可能性があるだろう。

調査地区的西約30mの場所では、2006年度の調査(OM・NR06-1)で述べたとおり2001年に共同住宅建設に伴う調査で平安時代後期~中世の集落跡を検出している(村上2001b)。また、調査地区的北西約40mの箇所では1995年の調査で鎌倉時代の集落を検出している(野島・村上2001)。また調査地区的南隣は2006年度の調査地区(OM・NR06-1)である。今回の調査で検出できた集落は、2006年度の調査(OM・NR06-1)のものと同様にその距離や出土遺物から見てこれらの調査で検出した集落と一連のものである可能性があるだろう。

調査地区的東側では、2006年度の調査(OM・NR06-1)で述べたとおりおよそ30~50m離れたいくつかの地点で確認調査を行っているが、集落の広がりは確認されていない。今回の調査地区は一連の中世集落のほぼ東限に近い部分に当たるものと考えられる。調査地区東端の比較的大きな溝1は、集落端を区画する溝である可能性もあるだろう。

奈良井遺跡・中野遺跡（NR・NN08-1）

この調査で検出したのは、南側地区で検出した古墳時代の大溝・集落跡と、北側地区で検出した中世の集落跡であった。古墳時代の大溝からは初期須恵器も含めた種々の遺物の出土があり、古墳時代の中期から後期にわたって長期間存続した大溝とみられる。中野遺跡の集落と奈良井遺跡の祭祀場と

を区画する溝の可能性もあると考えられる。中世の遺構では編年的に新しい遺物と古い遺物が混在しており、鎌倉時代から室町時代にかけての集落とみたい。

調査地区から東に約60m離れた四條畷小学校のプール建設時には、完形の韓式土器壺が出土している(山口編1972)。この土器は工事中の出土のため遺構については不明であるが、今回検出した古墳時代の大溝はこのプールの方向から流れてきていた可能性があるだろう。

中世集落については、この調査地区付近では未調査個所が多く、これまでに顕著な成果が上がっているとは言い難い。中野遺跡の範囲内では、今回の調査地区から南に100m程離れた個所で中世の掘立柱建物などの集落跡が検出されている(西尾1987)。こういった集落が今回の調査地区付近まで広がるものである可能性があるだろう。

第2節 古墳時代における奈良井遺跡周辺の様相

1.はじめに

今回報告した一連の調査では、古墳時代の祭祀場跡である奈良井遺跡周辺の景観について、これまでの調査成果とあわせ、岡山南遺跡や南山下遺跡、中野遺跡まで含めた広範囲での様相が明らかとなつた。この祭祀場周辺の集落様相についてはこれまでにもさまざまな言及がなされているが、ここではあらためて、当時の集落様相について検討してみたい。

2.周辺の景観に関する既往の言及

これまでに奈良井遺跡およびその周辺の景観に関して言及されているものとしては、まず野島稔氏の一連の言及があげられるだろう。野島氏は奈良井遺跡の祭祀遺構について最初に報告した一文の中で、馬骨の出土は古事記・日本書紀の記述にある河内の馬飼と「深く関りがあるであろう」と述べた(野島1980b)。1984年の論考では、「奈良井遺跡・中野遺跡一带」に注目し、「四條畷市一帯が河内湖畔最大の馬飼い集団の所在地として」位置づけることができるとして述べた(野島1984b)。1996年には地形環境にも注目し、「当時の北河内あたりは、東に生駒山系をひかえ、西側は河内湖が現在の外環状線あたりまで迫っていた。山系からは幾筋もの川が湖に注いでおり、自然の柵といえる機能を果たしていたのである。そうすると四條畷市あたりは絶好の牧であった」と述べ、馬飼いが行われた背景に地形環境が適していたことがある点を挙げた(野島1996d)。2000年発行の調査報告書では、古墳時代の四條畷について、「現在の市役所あたりである中野遺跡や、南野米崎遺跡が集落の中心地であった」、「飯盛山麓に墓地、総合センターを馬の祭祀場とし、市役所あたりを居住地とした。また体育館あたり(鎌田遺跡)は水田地であった」と述べ、土地利用様相の復元を行った(野島・村上2000)。また、2008年の論考でもこの標高に基づく土地利用復元を发展させ、馬が降ろされた港にはほど近いと考えられる藤原北遺跡も絡めて当時の景観について考察した(野島2008)。

野島氏のほかにも何人かがこの周辺の様相に触れている。山口博氏は、1980年に公表し、その後市史第四巻の中に収録された一文の中で、奈良井遺跡周辺について、他にも南山下遺跡、中野遺跡など「数多くの遺跡が発見」されていて、「これらは何れも、10m以上の高地帯に属するため、古代人の住居に適していた」と述べ、地形の点から見て奈良井遺跡周辺の遺跡を一連のものとして捉えるべきことを示した(山口1990)。また、奈良井遺跡での馬骨のまとまった出土を、古事記や日本書紀等の文献から読み取れるように馬の飼育地であったことを裏付けるものとして評価している。

瀬川芳則氏は、馬飼集団の祭祀について考察した論考の中で、奈良井遺跡の祭祀場遺構について詳述した後、奈良井遺跡から「川をへだてて南の中野・南野米崎の馬飼遺跡や岡部川をへだてて北にある南山下・岡山南・忍ヶ丘駅前遺跡などのやはり馬・製塙土器・古式の須恵器・韓式系土器などの出土を見ている馬飼遺跡群についても、この祭祀遺構の開始から放棄にいたる存続期間と同じ期間集落を営んでいる」と述べ、「奈良井遺跡を核とした大別3グループの馬飼集団が、遅くとも5世紀後半には、生駒山系の谷あいから流れだす川ぞいの地に、牧と集落を形成していた」として、周辺の集落様相を復元した(瀬川1991)。

村上始氏も、2003年に発行した奈良井遺跡の調査報告書の中で、馬飼い集団の「集落は市役所を中心とする中野遺跡や南野米崎遺跡、耕作地(水田跡)は市民総合体育館がある鎌田遺跡、祭祀場所は市民総合センターを中心とする奈良井遺跡や給食センターがある鎌田遺跡、墓地は清流古墳群であつ

た」と述べ、土地利用様相の復元を行っている(村上2003a)。

また、2010年に発行した市史では櫻井敬夫氏らが奈良井遺跡の祭祀遺構に触れながら「当市における遺跡の数と関連遺物を見ます時、当市は河内湖畔での中心的な馬糞いの里であったと考えられる」と述べ、河内湖と遺跡との立地関係について触れている(櫻井ほか2010)。

このように、奈良井遺跡および周辺の古墳時代遺跡については、河内湖から飯盛山系へと続く標高差のある地形の中で、最低地に馬を陸揚げする港とそれに伴う集落が営まれ、低地の平坦部には水田があり、集落および祭祀域はやや標高の高くなった平坦地に営まれ、山裾の高所部に古墳群が営まれるという理解がなされている。平面的にみると、一部寝屋川市域から四條畷市域を含めた飯盛山系西部全域で馬糞いがなされていて、山系から河内湖にそぞく川が柵のような役目を果たしていたと理解されているといえよう。

3. 奈良井遺跡の古墳時代祭祀遺構

奈良井遺跡は、四條畷市中野三丁目を中心として広がる遺跡で、主に古墳時代中期から後期にかけての馬関係の祭祀跡を中心とした、古墳時代・中世の遺跡である。1979年に市立市民総合センター建設に伴って発掘調査を行い(野島1980b、櫻井・佐野・野島2006、2010等)、古墳時代中期末の、長さ約16m、最大幅約2.5m、深さ約1mの溝を検出した。この溝からは滑石製の臼玉36点が須恵器大甕の内部より一括で出土した。この溝を中央としてそれを取り囲むように、一辺約40m、最大幅約5m、深さ約1~1.5mの、古墳時代後期初頭の方形周溝状遺構を検出した。遺構からは、土師器甕・須恵器高壺・甕・蓋壺・滑石製有孔円盤・木製品・ミニチュア土器などのほか、7頭分の馬骨・馬歯が出土した。なかでも1頭は、ほぼ完全な形で検出された。一方で、馬の首のみが切られ土坑に埋められたものもあった。方形周溝状遺構と中央の溝との合流地点からは馬形・人形の土製品18点が出土した。これらのことから、この方形周溝状遺構は、馬の祭祀を行うステージ状の施設であったと考えられている。この方形周溝状遺構の西約60mの場所では、古墳時代後期初頭の一辺約1.2m、深さ約1mの方形板枠井戸を検出した。

2000年には個人住宅の建設に伴い調査を行い、1979年検出の方形周溝状遺構の続きをと考えられる溝の一部を検出し、須恵器蓋壺が集中的に出土したほか、馬歯・製塙土器・韓式土器や韓式系土器・ミニチュア土器などが出土した(野島・村上2000)。

2006年の主要地方道枚方富田林泉佐野線拡幅工事に伴う調査でも、方形周溝状遺構の続きを確認し、ミニチュア土器などが出土した(今回報告)。

2011年にはガス関連施設の設置に伴い2000年調査地の南隣を調査し、半分しか検出できていなかった方形周溝状遺構の続きを検出した(野島・村上・實盛2012)。この地点においては溝には少なくとも二つの段階差があることと、方形周溝状遺構上に柱が立っていたことが新たに分かった。主な出土遺物としては土師器・須恵器や韓式系土器のほか円筒形土製品や滑石製玉類・ガラス小玉・剣形木製品・馬歯などがあった。出土遺物からは、少なくともTK47型式期までこの祭祀遺構で祭祀が行われたものとみられる。

4. 奈良井遺跡周辺における古墳時代の集落様相

今回報告した一連の調査からは、これまでに確認されていた奈良井遺跡の方形周溝状遺構の続きを検出できたほか、道路の拡張工事による南北に長い調査であったことから周辺の遺跡との関わりもわかつてきた。

今回報告している2004年の奈良井遺跡調査で検出した大溝は、1990年の調査で検出した大溝(野島1991)と一連の遺構の可能性が高いと考えられる。周辺での調査成果を考え合わせると、この大溝は少なくとも延長100m近くにわたって、20m以上の幅を保ちながら東西に流れる大溝である可能性が高い。この大溝より北側では、岡山南遺跡・南山下遺跡の古墳時代集落が広がっており、一方南側は100m程の位置に奈良井遺跡の古墳時代祭祀場が存在する。この大溝は、集落域と祭祀域とを隔離する大溝であった可能性があるだろう。奈良井遺跡は隣接する中野遺跡との関連でその性格が捉えられることが多かったが、今回奈良井遺跡の祭祀域と北側の岡山南遺跡・南山下遺跡の集落とを区画する大溝を検出したことで、瀬川芳則氏も考察していたように(瀬川1991)、奈良井遺跡はその北側の集落とも密接に関わりあう祭祀場であったことが想定できるだろう。

一方、奈良井遺跡と、その南東側を中心に一帯に広がる中野遺跡との関わりについても、中野遺跡の集落と奈良井遺跡の祭祀域を区画するもの可能性がある溝を2007・2008年の調査でいくつか検出できた。このことは、奈良井遺跡の祭祀場と中野遺跡の集落との密接な関わりを示すといえる。野島稔氏が幾度も触れ強調しているように(野島1984b, 2008、野島・村上2000)、中野遺跡を居住城とする人々が奈良井遺跡の祭祀場を利用していた可能性は、一層高まったといえるだろう。

このように、先達の研究に導かれながら考察すれば、奈良井遺跡の祭祀遺構を中心として見た四條畷市域の馬飼い集落のあり方は、次のようにみることができる。河内湖から飯盛山系へと続く標高差のある地形の中で、最低地に馬を陸揚げする港とそれに伴う集落(郡屋北遺跡)が営まれ、低地の平坦部には水田地(鎌田遺跡・讚良郡条里遺跡)があった。集落(中野遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡・忍ヶ丘駅前遺跡)および祭祀城(奈良井遺跡・鎌田遺跡)はやや標高の高くなった平坦地に営まれ、山裾の高所部に古墳群(清滝古墳群・大上古墳群)が営まれていた。特に奈良井遺跡の祭祀場は、周辺を取り巻く北(南山下遺跡・岡山南遺跡)や南(中野遺跡)の馬飼い集落の中心的祭祀場として存在していたとみることができよう。今後も市内の遺跡では多くの箇所で調査が行われることが予想されるが、新たな成果を取り入れながら、各時代の歴史的景観復元を行っていくこととしたい。

(實盛)

参考文献

- 阿部幸一1999「雁屋跡発掘調査概要」Ⅲ、大阪府教育委員会。
- 岩瀬透・藤田道子・宮崎泰史・藤永正明編2010「雁屋北遺跡」Ⅰ、大阪府教育委員会。
- 宇治田和生・桑原武志1974「忍岡古墳」四條畷市文化財シリーズ2、四條畷市教育委員会。
- 梅原未治1937「河内四條畷村忍岡古墳」『日本古文化研究所報告』第4、日本古文化研究所。
- 梅原未治1985「銅鐸の研究」木人社。
- 大阪府教育委員会編1970「四条畷町、正法寺跡発掘調査概報」大阪府教育委員会。
- 片山長三1967a「枚方台地の先土器時代遺跡」「枚方市史」第一巻、枚方市役所。
- 片山長三1967b「縄文時代遺跡」「枚方市史」第一巻、枚方市役所。
- 櫻井敬夫1972「考古学」「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2006「こども歴史 わたしたちの四條畷」四條畷市教育委員会。
- 櫻井敬夫・佐野喜美・野島稔2010「歴史とみどりのまち ふるさと四條畷」四條畷市教育委員会。
- 四條畷市教育委員会編1976「四條畷の古代史発掘」四條畷市教育委員会・四條畷市文化財研究調査会。
- 四條畷市教育委員会編2002「みどりの風と古墳」第17回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 四條畷市教育委員会編2004「馬と生きる」開館20周年記念特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 瀬川芳則1991「馬飼集団の神まつり」「古墳時代の研究」第3巻、生活と祭祀、雄山閣。
- 瀬川芳則1992「最古の木製下駄」「考古学と生活文化」同志社大学考古学シリーズV、同刊行会。
- 中世土器研究会編1985「概説 中世の土器・陶磁器」貞陽社。
- 辻本 武1987「雁屋跡発掘調査概要－四條畷市雁屋北町所在－」大阪府教育委員会。
- 中尾智行・山根一帆編2009「讃良郡条里遺跡」、財团法人大阪府文化財センター。
- 中村 浩2001「和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年」芙蓉書房出版。
- 西尾 宏1987「中野遺跡発掘調査概要」Ⅳ、四條畷市教育委員会。
- 西尾 宏1988「中野遺跡発掘調査概要」Ⅴ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1977「四條畷市中野遺跡」「まんだ」第2号、まんだ編集部。
- 野島 稔1978a「中野遺跡発掘調査概要」Ⅰ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1978b「南山下遺跡」「まんだ」第5号、まんだ編集部。
- 野島 稔1978c「大阪府四條畷市発見の製塙土器」「古代学研究」第86号、古代学研究会。
- 野島 稔1979「岡山南遺跡出土の古代下駄」「まんだ」第8号、まんだ編集部。
- 野島 稔1980a「清滄古墳群発掘調査概要」四條畷市文化財研究調査会。
- 野島 稔1980b「四條畷奈良井遺跡（2）」「まんだ」第9号、まんだ編集部。
- 野島 稔1982「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅱ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984a「雁屋跡発掘調査概要」Ⅰ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1984b「河内の馬廻」「万葉集の考古学」筑摩書房。
- 野島 稔1986c「四條畷市埋蔵文化財発掘調査概要－1985年度－」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1986b「中野遺跡発掘調査概要」Ⅲ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987a「雁屋跡」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987b「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅳ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1987c「四條畷市、南山下遺跡出土の馬形埴輪」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1987d「四條畷市南山下遺跡」「まんだ」第30号、まんだ編集部。
- 野島 稔1988「四條畷市“南山下道路”」「まんだ」第35号、まんだ編集部。
- 野島 稔1990「四條畷市・中野遺跡」「まんだ」第39号、まんだ編集部。
- 野島 稔1991「四條畷市・奈良井遺跡（3）」「まんだ」第42号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993a「四條畷市忍ヶ丘駅前遺跡」「まんだ」第49号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993b「四條畷市鎌田遺跡（一）」「まんだ」第50号、まんだ編集部。
- 野島 稔1993c「河内の馬廻」「古代一埋もれた馬文化」馬の文化叢書第1巻、馬事文化財団。
- 野島 稔1994a「雁屋跡発掘調査概要－四條畷市斎瀬美町所在－」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1994b「四條畷市鎌田遺跡（二）」「まんだ」第51号、まんだ編集部。

- 野島 稔1995「南野遺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔1996a「四條畷市坪井遺跡」「まんだ」第57号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996b「鍛冶工房のある風景」「まんだ」第58号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996c「四條畷市城遺跡」「まんだ」第59号、まんだ編集部。
- 野島 稔1996d「過激な馬のまつ」「岡山・北河内の歴史」郷土出版社。
- 野島 稔1997a「五絃の琴」「まんだ」第60号、まんだ編集部。
- 野島 稔1997b「四條畷市更良岡山遺跡（一）」「まんだ」第62号、まんだ編集部。
- 野島 稔1999a「四條畷市大上古墳群」「まんだ」第66号、まんだ編集部。
- 野島 稔1999b「馬がやってきた」第14回特別展、四條畷市立歴史民俗資料館。
- 野島 稔2005「正法寺跡発掘調査報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔2008「王權を支えた馬」「牧の考古学」高志書院。
- 野島 稔編2000「更良岡山遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1976「岡山南遺跡発掘調査概要」Ⅰ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・藤原忠雄・花田照也1977「正法寺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・前田 暢1984「岡山南遺跡・中野遺跡発掘調査概要」Ⅲ、四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・宮崎泰史・山上 弘2005「四條畷市」「大阪の部落史」第1巻、部落解放・人権研究所。
- 野島 稔・村上 始2000「奈良田遺跡・奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2001「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始2002「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 野島 稔・村上 始・實盛良彦2012「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 藤原忠雄1977「四條畷市奈良井遺跡」「まんだ」第2号、まんだ編集部。
- 前田 暢1984「南山下遺跡第六次調査・忍ヶ丘駅前遺跡第八次調査」「まんだ」第22号、まんだ編集部。
- 間堀忠彦・間堀義子1971「倉敷考古館研究集報」第7号、倉敷考古館。
- 松岡良恵1987「中野遺跡発掘調査概報」四條畷市教育委員会。
- 宮崎泰史・藤永正明2006「年代のものさし」大阪府立近づ飛鳥博物館。
- 三好 玄・杉本厚典・野島 稔・深澤芳樹2007「弥生時代後期周溝状遺構に伴う土器群」「大阪歴史博物館研究紀要」第6号、財团法人大阪市文化財協会。
- 村上 始1997「木間池北方遺跡発掘調査概要」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2000「四條畷小学校内遺跡・中野遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001「正法寺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001b「南山下遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2001c「大阪府鎌田遺跡の調査速報」「月刊考古学ジャーナル」No.470、ニュー・サイエンス社。
- 村上 始2001d「四條畷市鎌田遺跡」「まんだ」第71号、まんだ編集部。
- 村上 始2001e「大阪府鎌田遺跡の調査速報」「祭祀考古」第21号、祭祀考古学会。
- 村上 始2003a「奈良井遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2003b「大阪・中野遺跡」「木簡研究」第25号、木簡学会。
- 村上 始2004「四條畷市内遺跡発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始2006「一般国道163号の抜幅工事に伴う発掘調査概要報告書」四條畷市教育委員会。
- 村上 始・實盛良彦2011「雁屋遺跡の発掘調査」「近畿弥生の会第14回集会京都場所発表要旨集」近畿弥生の会。
- 本村充保2006「遺跡出土下駄の全国集成に基づく編年および地域性の抽出に関する基礎的研究」「考古学論叢」第29冊、奈良県立橿原考古学研究所。
- 山口 博編1972「四條畷市史」第1巻、四條畷市役所。
- 山口 博1990「四條畷市史」第4巻、四條畷市役所。

NR2004-1



1. 調査前現況（北側から）



2. 調査状況（北側から）



1. 大溝調査状況（南側から）



2. 大溝全景（南側から）



1. 大溝全景（北側から）



2. 大溝近景（北東側から）



1. 大溝近景（南側から）



2. 大溝近景（北側から）



1. 西壁断面（南東側から）



2. 西壁断面（北東側から）

NR2006-1



1. 調査前現況（南側から）



2. 調査状況（南側から）



1. 調査状況（南側から）



2. 調査地区南側全景（西側から）



1. 調査地区中央部全景（北東側から）



2. 溝1全景（北東側から）



1. 大溝全景（北東側から）



2. 大溝（東側から）



1. 大溝遺物出土状況（北東側から）



2. 大溝西壁断面（北東側から）

OM・NR2006-1



1. 調査前現況（南西側から）



2. 調査状況（南西側から）



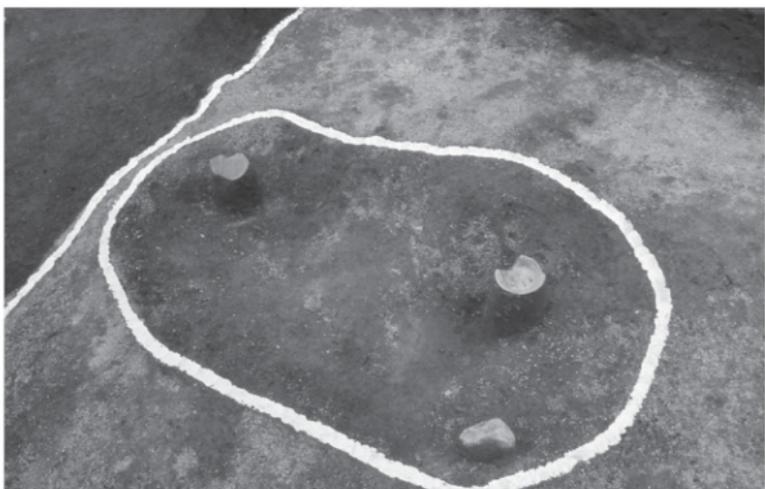
1. 調査状況（南東側から）



2. 調査地区全景（北側から）



1. 溝3近景（南東側から）



2. 土坑1全景（北東側から）



1. 調査前現況（南西側から）



2. 調査前現況（北東側から）



1. 調査状況（南東側から）



2. 土坑1全景（南西側から）



1. 調査地区中央部全景（南西側から）



2. 溝1～4検出状況（北東側から）



1. 溝1～4検出状況（南西側から）



2. 調査状況（北東側から）



1. 溝1遺物検出作業（北東側から）



2. 溝1～4全景（南西側から）



1. 溝1 遺物出土状況（南東側から）



2. 溝1 西壁断面（南東側から）



1. 溝2遺物出土状況（北西側から）



2. 溝2西壁断面（南東側から）



1. 調査前現況（北東側から）



2. 調査状況（北側から）



1. 北側地区 遺構検出全景（南側から）



2. 北側地区 調査状況（北西側から）



1. 北側地区 全景（南西側から）



2. 南側地区 全景（北東側から）



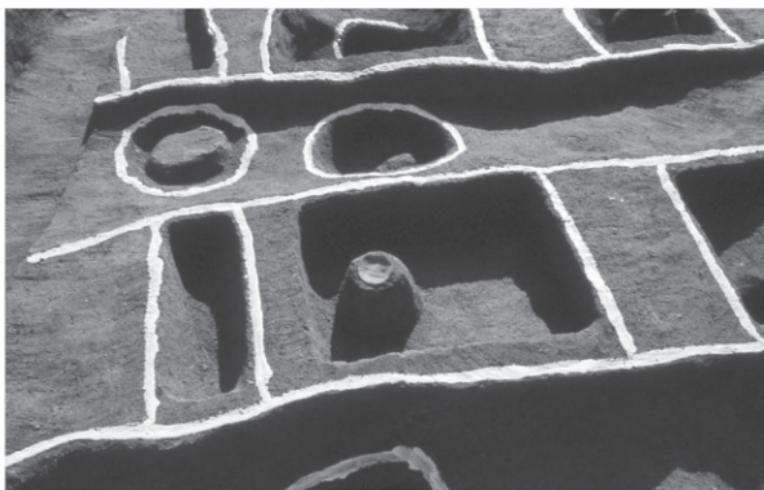
1. 北側地区 調査前現況（北東側から）



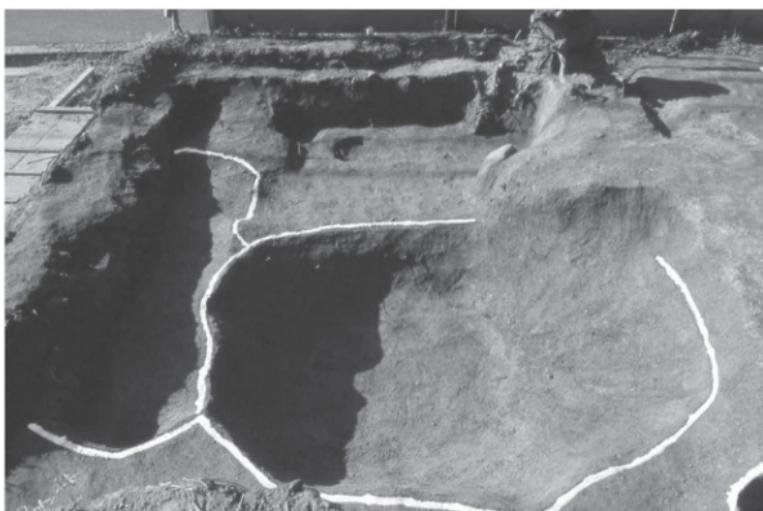
2. 北側地区 調査状況（南東側から）



1. 北側地区 全景（南側から）



2. 北側地区 遺物出土状況（北側から）



1. 土坑5・6全景（東側から）



2. 南側地区 調査前現況（南西側から）



1. 南側地区 調査状況（南西側から）



2. 南側地区 全景（南西側から）



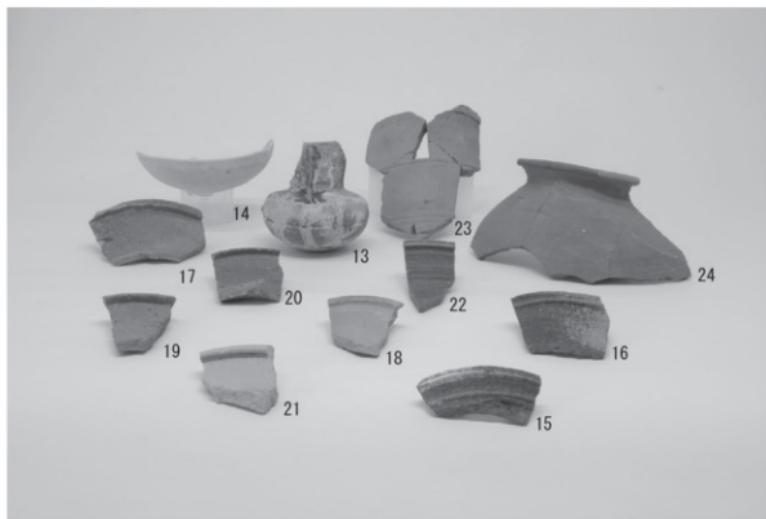
1. 南側地区 溝1 遺物出土状況（北西側から）



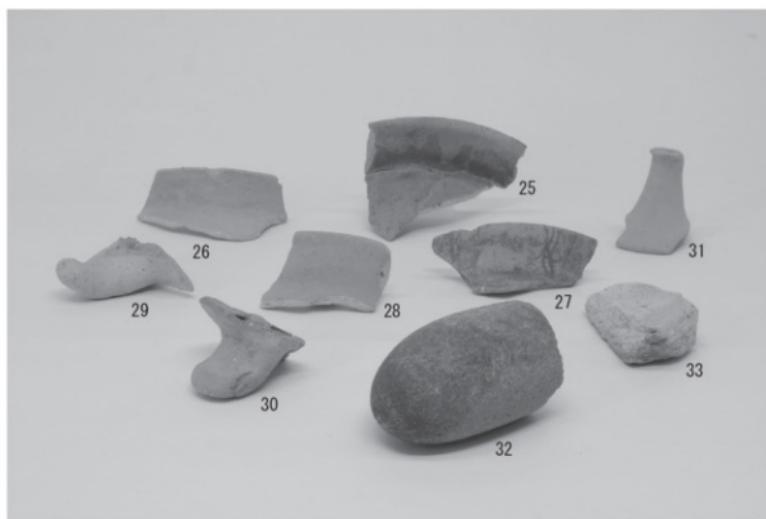
2. 南側地区 大溝全景（西側から）



1. NR2004-1出土遺物



2. NR2004-1出土遺物



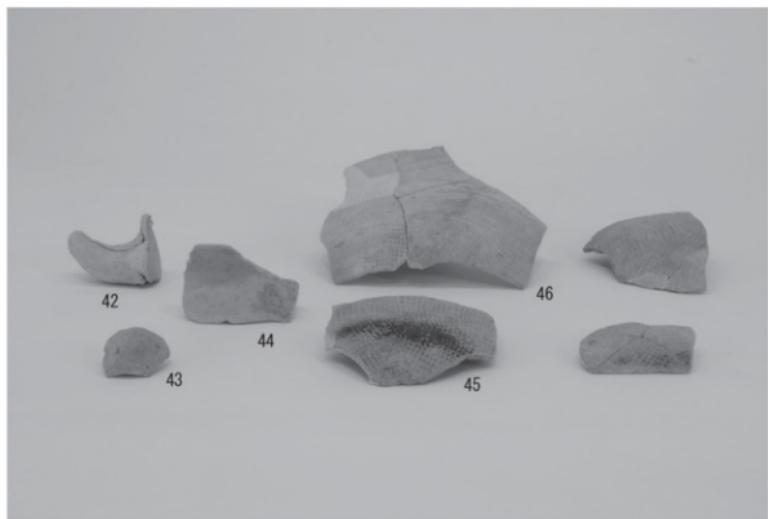
1. NR2004-1出土遺物



2. NR2004-1出土遺物



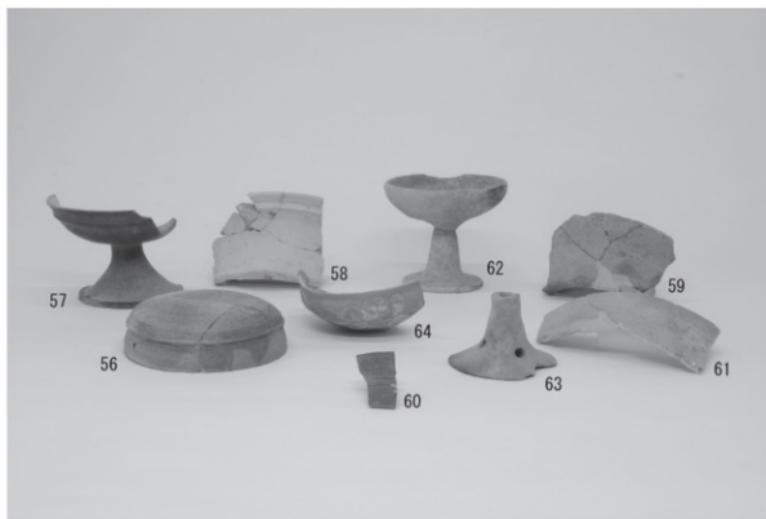
1. NR2006-1出土遺物



2. NR2006-1出土遺物



1. OM・NR2006-1出土遺物



2. NN2006-1出土遺物



1. NN2006-1出土遺物



2. NN2006-1出土遺物



1. NN2006-1出土遺物



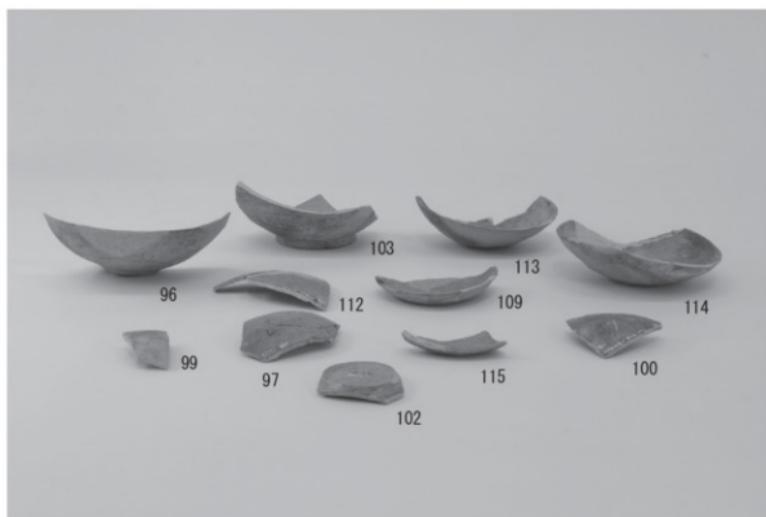
2. NN2006-1出土遺物



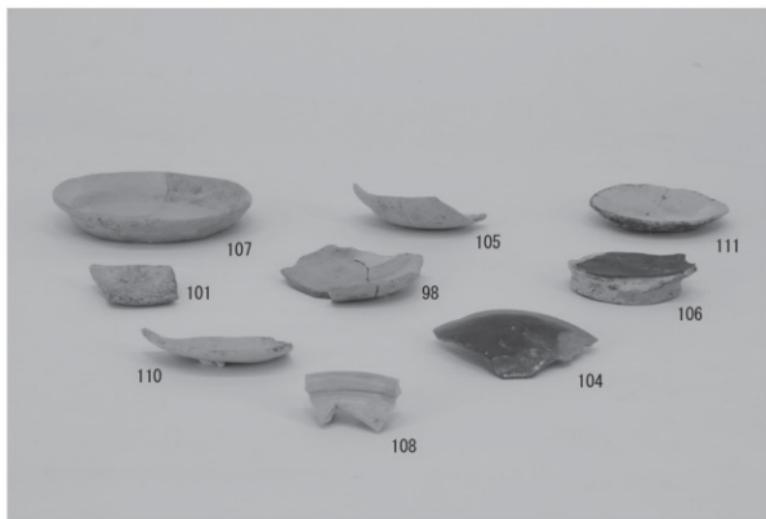
1. NN2006-1出土遺物



2. OM·MS2007-1出土遺物



1. NR・NN2008-1出土遺物



2. NR・NN2008-1出土遺物



1. NR・NN2008-1出土遺物



2. NR・NN2008-1出土遺物

報 告 書 抄 錄

ふりがな	なかのいせき・ならいいせき・みなみさげいせき・おかやまみなみいせき はっくつちょうさほうこくしょ
書名	中野遺跡・奈良井遺跡・南山下遺跡・岡山南遺跡 発掘調査報告書
副書名	主要地方道枚方富田林泉佐野線の拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シリーズ名	四條畷市文化財調査報告
シリーズ番号	第1集
編著者名	村上 始・實盛 良彦
編集機関	四條畷市教育委員会
所在地	〒575-8501 大阪府四條畷市中野本町1番1号
発行日	2013(平成25)年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	市町村 コ ー ド	北 緯	東 經	調査期間	調査面積	調査原因
ならいいせき 奈良井遺跡 (04-1)	しじょうなわてし なかのさんちゅうめ 四條畷市 中野三丁目	272299	34° 74' 19"	135° 64' 47"	平成16年 12月9日 ～ 17日	140m ²	道路拡幅工事
ならいいせき 奈良井遺跡 (06-1)	しじょうなわてし なかのさんちゅうめ 四條畷市 中野三丁目	272299	34° 74' 08"	135° 64' 45"	平成18年 11月20日 ～ 12月5日	69m ²	道路拡幅工事
おかやまみなみいせき・ ならいいせき 岡山南遺跡・ 奈良井遺跡 (06-1)	しじょうなわてし おおあざなかの 四條畷市 大字中野	272299	34° 74' 28"	135° 64' 49"	平成19年 4月3日 ～ 9日	63m ²	道路拡幅工事
なかのいせき 中野遺跡 (06-1)	しじょうなわてし おおあざなかの 四條畷市 大字中野	272299	34° 73' 93"	135° 64' 43"	平成19年 4月18日 ～ 5月16日	351m ²	道路拡幅工事
おかやまみなみいせき・ みなみさげいせき 岡山南遺跡・ 南山下遺跡 (07-1)	しじょうなわてし おおあざなかの 四條畷市 大字中野	272299	34° 74' 30"	135° 64' 49"	平成19年 12月4日 ～ 12日	77m ²	道路拡幅工事
ならいいせき・ なかのいせき 奈良井遺跡・ 中野遺跡 (08-1)	しじょうなわてし おおあざなかの 四條畷市 大字中野	272299	34° 73' 99"	135° 64' 44"	平成20年 12月15日 ～ 平成21年 1月16日	162m ²	道路拡幅工事

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
奈良井遺跡 (04-1)	集落跡	古墳	大溝	土師器、須恵器、石杵、瓦	幅20m以上ある区画溝を確認。
奈良井遺跡 (06-1)	集落跡・祭祀跡	古墳	大溝、溝、土坑	土師器、須恵器、ミニチュア土製品	馬関連の祭祀場を廻る溝の一部を土層で確認。祭祀場上の遺構を確認。
岡山南遺跡・ 奈良井遺跡 (06-1)	集落跡	中世	溝、土坑、畑地	土師器、須恵器、瓦質土器	中世の畑地遺構を確認。
中野遺跡 (06-1)	集落跡	古墳、 中世	溝、土坑	土師器、須恵器、韓式系土器、瓦器	古墳時代の溝が同じような位置に何度も掘削される状況を確認。
岡山南遺跡・ 南山下遺跡 (07-1)	集落跡	中世	溝、土坑	白磁、土師器、瓦器、瓦質土器、黒色土器、瓦	
奈良井遺跡・ 中野遺跡 (08-1)	集落跡	古墳、 中世	大溝、溝、 土坑、ピット	土師器、須恵器、韓式系土器、土錘、瓦器、瓦質土器	区画溝の可能性がある古墳時代の大溝を確認。

中野遺跡・奈良井遺跡・
南山下遺跡・岡山南遺跡
発掘調査報告書

平成25年3月発行

編集 四條畷市教育委員会
発行 四條畷市教育委員会
四條畷市中野本町1-1

印刷 川西軽印刷株式会社